
Tales of Vesperia —魔を断つ刀を持つ少年—

エターナル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of Vesperia ― 魔を断つ刀を持つ少年 ―

【Nコード】

N0273X

【作者名】

エターナル

【あらすじ】

記憶を失った少年シンクは天才魔導少女リタ・モルディオと出会う。それは運命の出会いであった……

この小説はテイルズオブヴェスペリアの二次小説です。

ある程度原作を知っておく必要があります。

プロローグ（前書き）

テイルズオブヴェスペリアを最近やって勢いで書いてしまいました！
他の小説どうすんだ俺！

温かく見守ってください。

ブローグ

古代都市 アスピオ。

その中の少し離れた小屋で一人の少女が少し大きい本を読んでいた。彼女の周りには大量の本が積まれている。

「うーん…これさえ分ければ、ブラスティア魔導器の出力を変えられるのに…」

本を読みながら少女はぶつぶつと言っている。

「うーん…こりゃあ、図書館で調べるか…」

そう言つて少女は白いマントを頭から被り、本の山から抜け出し、家の扉を開けた。

「…いやでも…図書館つてもアレだし…遺跡にでも行くか…ん？」

少女が俯きながら歩き出すと、足下で何か不思議な感触を感じて、下を見ると、下に少年が倒れていた。

見た目は自分よりも年上に見え、茶髪で、右手には刀を持っている。

「アンタ何？」

少女は足を引き、冷たく言い放つが反応がない。

「なんでこんな所に倒れているのよ？」

少女は辺りを見渡しながら言った。

他の人間は気づかなかったのか？

「はぁ… 全く… 私の家の前に倒れられていると困るっての…」

少女はため息をつきながら、少年を引きずって、家に入れようとした。

すると少女は少年の左腕に注目した。

左腕には金色のリングに真ん中に宝石のようなのがはめられたのが巻かれていた。

「これって… ボーディプラスティア武醒魔導器？なんでこんな奴が…それにこの刀…」
少女は呟きながらも少年を家に入れた。

*

「ん……」

少年は重たい瞼をゆっくりと開いた。

「ここは…？」

「ん？目覚めました？」

机に向かって本を読んでいた少女が少年を見た。

「ここは… 一体…？」

「アンタねえ、一応私は命の恩人なんだからお礼とか言えないわけ？」

少女がため息をつきながら、半目で少年を睨んだ。

「すまない…それと、よくわからないがありがとう」

少年は無表情で礼を言った。

「それで、ここはどこだ？」

少年は再び少女に尋ねた。

「ここはアスピオの私の家。っていうか、アンタ、私に質問する前に自分の名前くらい名乗りなさいよ」

「名前……」

少年は頭を抑えた。

そして少年は呟いた。

「シンク……」

少年、シンクは自分の名前を名乗った。しかし、シンクはそれ以外何も思い出せなかった。

そんなシンクの反応に少女も気づいたようだ。

「あんた…もしかして、記憶喪失なんじゃないの？」

少女が無表情でシンクに聞いた。

「解らない…名前以外…曖昧なんだ…」

少女はため息をついた。

「ったく。名前以外よく分からないってそうとうね…」

少女はシンクを見ながら考え込む形をとった。

「ん…そうね。ねえアンタが記憶取り戻すまで、ここに住まない？」

少女はシンクに聞いた。

「いいのか？」

「いいわよ。その代わりに、アンタには私に協力してもらうけど」

協力関係…か。シンクはこの少女の協力を得る他ないと判断し、了解した。

「ところで、お前の名前は？」

「リタ。リタ・モルディオよ」

少女、リタは素っ気なく答えた。

これが記憶がない少年シンクと天才魔導少女リタの出会いである。

この時、シンクの持っていた刀が一瞬輝いたのをシンクとリタは知らなかった。

プロローグ（後書き）

主人公 設定。

シンク。

年齢：18

ICV：浪川大輔

武器：刀（刀の名前は後に分かります）

モデルキャラクター：ベルクト（アナザーセンチュリーズエピソード3）

服装：青い西洋風なロングコート。（デビルメイクライ3のバージルの服装）

技や刀の名前は話が進んでいく内に分かります。
ちなみに今回の話の時系列は、原作の三年前です。
感想なんかもらえると嬉しいです。

魔導器の為なら…（前書き）

今回シンクの技が一つです。技はデビルメイクライの技を使っています。

魔導器の為なら…

リタとシンクが出会って三週間が経つ。

「シンク！敵が来たわ！援護するから攻撃しなさい！」

今、二人はアスピオから少し離れた遺跡、シャイコス遺跡の中を散策していた。

二人がこの遺跡に来ているのかというと、最近よく盗賊団がこの遺跡に魔導器を捨てるので、それを拾いに出かけているのだ。

「了解した！」

シンクは言いながら、刀を鞘から抜き、斬り裂く。その斬撃は、束になって襲い掛かってくるカエルやオタマジャクシにも見えるモンスター、ゲコゲコと、その子供オタオタを襲った。

「ゆらめく焰猛追！ファイアボール！」

リタの手から、火の玉が出ると、ゲコゲコに襲い掛かる。

火で悶え苦しむゲコゲコにシンクは刀で一閃する。
ようやく辺りが落ち着いた。

「アンタ記憶喪失なのに、戦いに慣れてきたわね」

リタは先ほどの戦闘に関しての感想を述べた。

「お前も、その年でそこまで戦えるのには驚いた」

「ふ、ふん！私は天才魔導士リタ・モルディオよ！これくらい当然よ！」

頬を少し赤くして、リタは言った。

『うわああああー！！』

「！！！！」

遠くから悲鳴が聞こえてきた。

「行くわよ、シンク！」

「あ、ああ！」

二人は悲鳴の聞こえた方向へと走った。

ついてみると、そこには武装していた男二人が岩の巨人、ゴーレムに襲われていた。

男の手には、袋があつた。どうやら魔導器を盗もうとしたところで襲われたようだ。

「不味いな…どうするリタ…っておいリタ！」

シンクが尋ねる前にリタはゴーレムに向かっていった。

「ゆらめく焔、猛追！ファイアボール！」

リタはゴーレムに火の玉を放った。

ゴーレムは盗賊達からリタに目を向けた。

「アンタ達！魔導器を置いてとっと行け！」

リタは盗賊に向かって叫んだ。

盗賊達は聞こえたのか、魔導器の入った袋を置いて逃げていった。

「まったく…無茶をする！」

シンクも刀の柄に手を置きながらリタの隣に来た。

「別に助けたつもりはないわ。私は魔導器の為なら、命なんて惜しくないわ！」

「……………」

リタの言葉に、シンクはしばし無言になった。

シンクはゴーレムに向かって、走る。

「疾走居合！」

シンクは刀を抜刀し、ゴーレムを斬り裂く。

そして、刀を鞘に収める。

その瞬間、ゴーレムは斜め一文字に斬り裂かれた。

「す、すごい…！」

リタはゴーレムを一撃で倒したシンクに驚きの表情を浮かべた。
シンクはリタに歩み寄り、そのままリタを抱き締めた。

「な、何やってんのよアンタ!？」

抱き締められているリタは顔を赤くしながら、何かなんだかわからない表情をしていた。

「命なんか惜しくないなんて…そんな悲しいこと言っな…」

シンクは悲しい声でリタを強く抱き締める。

「何よ…何なのよ…アンタは…」

リタは泣くことはしなかった。だが、リタは小さい頃に両親を亡くし、ずっと魔導器の研究をして、周りからは“変人”と呼ばれ続けた彼女にとって本気で心配をし、本気で思ってくれているシンクの言葉に、自然に目から涙が流れる。

「……すまないな。さっ、行くか。目的の物は手に入った」

シンクはリタから離れ、先ほど盗賊が置いていった魔導器の入った袋を持った。

「う…うん…」

リタはまだ若干頬を赤くして、俯きながら頷いた。
そして二人はシャイコス遺跡を後にした。

*

それから数ヶ月後。

あれからリタもシンクにだけは心を開いてきた。
シンクもリタに対して優しく接していた。

リタは図書館から戻ってきた。

「戻ったわよ……ってあれ？シンク？」

扉を開くと、そこにはシンクの姿はなかった。

リタの使っている机に書き置きがあった。

『しばらく修行の旅に出る。必ず戻る。——シンク』

という文面だった。

リタは手紙を見て、ふるふると震えている。

「何よ…勝手に…いなくなるなんて…バカ…シンクのバカァー！！
」

リタの叫び声がアスピオに木霊した。

*

「すまない…リタ」

アスピオから少し離れた場所でシンクはアスピオに
いるであろう。タにたいして謝った。
シンクは歩き出した。
自分の持つ刀『閻魔刀』と共に……

魔導器の為なら…（後書き）

次回から原作に突入します。

最後に出た閻魔刀はわかる人はわかりますよね。

感想待ってます！

帝都ザーフィアス 出会い（前書き）

今回で原作に突入します。

シンクのオリジナル技も少しです！

帝都ザーフィアス 出会い

3年後――

シンクは帝都ザーフィアスに来ていた。すると、下町が何やら騒がしかった。

「どうしたんだ？」

シンクは土嚢を持った男に話し掛けた。

「水道魔導器アクエラスティアが壊れたんだよ！」

男はそうシンクに言うと、先に向かって走った。

「水道魔導器が……」

シンクは呟くと、歩みを進めた。

進んだ先では、広場の中心にある噴水がすごい勢いで濁った水を噴き出していた。

恐らくあの噴水の中心が水道魔導器であろう。

しかし……

（魔核コアがない……？）

魔導器には、それを動かす為の魔核が必ずあるのだが、この水道魔導器にはその魔核がない。

「にいちちゃん！見ているなら手伝ってくれないか！？」

作業をしていた白い髭の老人はシンクに言った。

「ハンクスじいさん。水遊びもほどほどにしとけよ。若くねえんだからよ」

シンクの後ろから声がした。振り返るとそこには、黒い長髪で、左手に刀を持った男がいた。

「ユーリめ…やっと来たか！お前もこれからその水遊びをするんじゃないよ！」

「げっ！」

ハンクスの言葉にユーリと呼ばれた男は驚く。

「ほれ、にいちゃんも！」

「わ、わかった…」

シンクもハンクスの勢いに負け、しぶしぶ手伝った。

「お前も災難だな。こんなの手伝わされて」

ユーリはシンクに作業をしながら話し掛けた。

「まあな」

「オレ、ユーリ。ユーリ・ローウェルだ。よろしくな」

「シンクだ。よろしく、ユーリ」

二人は挨拶した。

「ところでハンクスさん！この魔導器の魔核はどうした！？」

シンクはハンクスに大声で尋ねた。

「ん？さあのう。……ないのか？」

シンクは作業を一旦止め、ハンクスに近づく。ユーリも後ろからついてきた。

「ああ。本来魔導器には、魔核がなければ機能しない」

「そりやそうだな。じいさん。最後に魔導器触ったの、修理に来た貴族様だよな？」

ユーリもハンクスに尋ねた。

「ああ、モルディオさんじゃよ」

「！！」

ハンクスの言葉に、シンクは驚いた。

シンクの知る人物の中にモルディオはいた。それは3年前に少しの間いたリタである。

「貴族街に住んでるのか？」

「そうじゃよ」

シンクは再び驚いた。

（貴族街！？リタはずっとアスピオにいるはずだ…ということはそのいつは偽物！？）

「ほれ！ユーリもにちゃんもみんなを手伝わんか！」

「……すまないハックスさん。俺は用事があるので失礼する」

「悪いじいさん。オレも用事思い出したんで行くわ」

シンクとユーリは広場から離れようとする。

「待て。お前達。まさか、モルディオさんのところに行くつもりなのか？」

「オレ達が？貴族の街に？あんな息苦しいところ頼まれたって行かねえよ。行くぜ、シンク」

ユーリはそう言ってシンクを引っ張りながら行った。

「まったく…武醒魔導器で技を使えるからって無茶だけはするんじゃないぞ！」

「わかってるよ！」

ユーリはそう言ってシンクを連れながら広場を後にした。

*

シンクとユーリは、ユーリの相棒犬ラピードの案内で、モルディオがいるであろう屋敷に向かっていた。

「ここか…」

「そうみたいだな…」

シンクとユーリはドアの前に立つ。

「なんだか人の気配がしないな…」

ユーリはそう言うと、ドアを軽く蹴った。
しかし、反応がない。

「他の入り口を探そう」

「そうだな」

ユーリはシンクの言葉に頷き、別の入り口を探した。

「あつたぞ」シンクは窓を見て言った。

見ると窓は無用心に鍵がかかっていなかった。

「よくやった！シンク」

ユーリはそう言って中に入った。続いてシンク、ラピードと窓から侵入した。

「さて、モルディオを探しますか」

「……ああ」

シンクとユーリとラピードは屋敷内を探したしかし、どの扉も鍵がかかっていて入れない。

最後の二階の扉を調べ終えた時、

「ユーリ。誰がいる」

シンクはユーリに小声で言った。

ユーリは下を見ると、そこには、マントを着た小柄な人物が入り口に立っていた。

（あのマント…アスピオの…まさか、本当に…）

シンクは信じたくなかった。まさか、あれは本当にリタなのではないかと。

その人物の手には青く輝く魔導器の魔核があった。

「よし、お宝発見」

「ワンッ」

そう言ってユーリとラピードは二階からモルディオ（？）のところまで飛び降りた。シンクも遅れて飛び降りる。

モルディオ（？）は逃げようとするが、入り口をラピードに阻まれ

る。

モルディオ（？）は挟み撃ちにされた。

「お前、モルディオだな？」

「……！」

「本当に…モルディオなのか？」

「……！」

シンの言葉にモルディオ（？）は少し驚いた。その瞬間、モルディオ（？）は煙り玉を投げた。辺りには煙りが立ち込める。

「ゲホッ…ゲホッ…なんだこりゃ！」

煙りが収まると、そこにはモルディオ（？）の姿はなかった。代わりにラピードはモルディオが持っていた袋を啜えている。

「よくやったな、ラピード」

シンはそう言ってラピードの頭を撫でた。

「クウーン」

頭を撫でられたラピードは喜んでいるように見えた。

「珍しいな。ラピードが初めてのヤツに懐くなんて」

ユーリはそう言いながらラピードが啜えている袋を受け取って、中身を見た。

「なんだよ！魔核がねえぞ！」

なんと袋には魔核が入っていなかったのだ。

「ヤツを追いかけるしかないな」

「ああ、魔核を取り返して、一発ぶん殴ってやろうぜ」

「ワンッ！」

そして、二人と一匹はモルディオ（？）屋敷の外へ出た。

*

シンク達が外に出ると、そこには剣と盾を持ったたたらこ唇の騎士と背が低く長い槍を持った騎士がいた。

「騒ぎと聞いて来てみれば、貴様なのであるか。ユーリ！」

「ついに食えなくなって、貴族の家にドロボウとは……貴様も落ちたものだ！」

「なんだ、デコとボコか」

「デコではないのである！」

「ボコじゃないのだ！」

ユーリの言葉に二人の騎士は即座につっこんだ。

「ユーリ。誰だコイツら？」

「そうか、お前は初めてだな。紹介する。こっちのたらこ唇がアデコールで、小さいのがボツコスだ」

ユーリは二人を指差しながらシンクに言った。

シンクは貴族街を見ると、先ほどのモルディオ（？）が馬車に乗るところだった。

ユーリもそれに気付き、追いかけようとするが、アデコールとボツコスがそれを邪魔する。

「逃げようとしても、そうはいかないのだ！」

そうこうしていると、馬車は走り出してしまった。

「逃げてるように見えるか？ああ、だから出世を見逃すのか」

「な、なんという暴言か！」

「取り消すのである！」

アデコールとボツコスはユーリの言葉にカチンと来たのか武器を構える。

「ユーリ…お前は穩便に済ます気はないのか？」

「悪い悪い。けど、この方が手っ取り早くていいだろ？」

「はぁ…まあ、確かにな」

二人はそう言うと、シンクは閻魔刀を、ユーリはニバンボシを抜く。

「オレがボコをやる。お前はデコを頼む」

「分かった！」

シンクはアデコールを、ユーリはボツコスを相手にする。

「お前のことは知らぬが、ユーリと一緒にいたのであれば、一緒に捕まえるのである！」

「まったく…速攻で片をつける。悪く思うな、デコ！」

「だからデコではないのである！」

アデコールは剣を持ちながらシンクを斬り付けようとするが、シンクは軽く流す。

「風牙一閃！」

シンクは風を纏った閻魔刀をアデコールに一閃する。

「ぬお〜である！」

アデコールは一撃で吹き飛ばされた。

「おつ、そつちも終わつたか」

ユーリがニバンボシを持ちながらシンクに近寄る。
後ろには倒れたボツコスがいる。

「ああ。まあな」

「つたく。お前ら、腕落ちたんじゃないか？」

ユーリは倒れているアデコールとボツコスに皮肉そうに言う。

そこに新たに騎士が数名シンクとユーリを囲む。

そこから、青髪のロン毛の騎士らしき男がやってきた。

「こりゃ、馬車は無理だな」

「そのようだな」

「流石シュヴァーン隊。こんな下民二人捕まえないなんて…無能だね」

男の言葉に、アデコールとボツコスは立ち上がり、敬礼をする。

「こ、これはキュモール隊長！とても見苦しいところを…」

「君たちみたいなの、育ちの卑しいヘナチヨコ隊、騎士団にいらないんだよ」

「グッ…シュ、シュヴァーン隊長にはご内密に、お、お願いします」

キュモールと呼ばれた男は皮肉たつぷりにアデコールとボッコスに言った。

「逃げたのが魔導器泥棒なら、逃がしたのは税金泥棒かよ」

ユーリが言っていると、ラピードは袋を咥えたまま、離れていった。

「しょうがねえな…シンク、お前も武器捨てろ」

「チツ…仕方ないか…」

ユーリはニバンボシを捨て、シンクも閻魔刀を鞘に収めてから捨てた。

「飼い犬にも見放されるとは、傑作なのである！」

「ぎゃははははっ！」

「…その飼い犬の飼い主にボコボコにやられたのはどこのどいつだ？」

「くっ……」

シンクは流石にムツときて、アデコールとボッコスを見付けながら言った。

「毎度毎度、君は忙しいね。ユーリ・ローウェル君。そっちの君は知らないけど、ちょっとだけ遊んであげるよ。僕のキュモール隊がね」

「おまえらがそうだから、フレンが苦勞するんだよ」

「あんな成り上がりの小隊長には苦勞がお似合いだよ」

キュモールの言葉を皮切りに、騎士達がユーリとシンクを囲む。

「終わったら、いつものよえに独房にぶち込んでおいてくれよ。そ
うちの彼も一緒にね。十日もすれば反省するだろうからね」

その後、シンクとユーリは騎士達にタコ殴りにされた。

帝都ザーフィアス 出会い（後書き）

現在ゲームをプレイしながら、執筆しています。

二週目からなので、スイスイ進めました。

アイテム引き継ぎだとかなり話を進めやすいです！

次回はザーフィアス城から

楽しみに！

感想もお願いします！

ザーフィアス城 牢獄からの脱出（前書き）

今回は牢獄から出るまでの話です。

もちろん、原作ヒロインも登場します。

ザーフィアス城 牢獄からの脱出

帝都ザーフィアスの地下牢。

そこにシンクとユーリは隣同士の牢に入れられた。

ユーリはしばらくして起き上がった。

隣から声が聞こえる。

「知ってるよ。盗賊も捕まった。盗品も戻っただろ？」

「いやいや、そこは貴族の面子が邪魔してね。今あるのは贋作よ」

「馬鹿な…！」

「ここだけの話。漆黒の翼もお宝を探してるらしいよ」

「例の盗賊ギルドか？」

騎士と隣の牢の男が話している。
しばらくして騎士はハッとして、

「ゴホンッ！おとなしくしている。もうすぐ食事の時間だ」

騎士はそう言い、牢から離れる。

騎士が行くと、隣にいる男がユーリに話かけてきた。

「ジッとしてるのも飽きてきたでしょ？そろそろ目覚めてもいいんじゃない？」

「あんな嘘を話すのが得意なのか？おっさんも暇だな」

「おっさんはヒドイよ。おっさん傷つくじゃないの」

「自分でおっさんと認めているがな」

男とは別隣から声が聞こえた。

「なんだ、起きてたのかよシンク」

「ああ、さっきから起きていた」

「そうかよ。で、さっきの話本当なのかよ？」

ユーリは再び男に聞く。

「本当よ。世界中の俺の部下が集めてきた情報だから。ためしに何か質問してみない？海賊ギルドの沈めたお宝か？それとも…」

「なら、ここから出る方法を教えてもらいたい」

「それか…あんたら何したかわからないけど、十日もすれば出してもらえるでしょうよ？」

「それじゃ下町が湖になっちまうよ」

「下町…？ああ、聞いた聞いた！確か、水道魔導器が壊れたんだって？」

「……モルディオのヤツはどうしようか…」

「モルディオって…アスピオの天才魔導士の？お宅、どういう関係よ？」

「知ってるのか？」

「まあ、知ってるよ。でも、情報を提供するからにはそれなりの報酬を…」

男が言おうとした時、シンクが割って入った。

「ユーリ。モルディオは俺の知り合いだ。必要ないぞ」

「そうだったのか？悪いなおっさん、そういうわけみたいだ」

「そ、そんな～…」

その時、地下牢の中に誰かが入ってきた。
そして、男の牢の前に止まる。

「出る」

「いいところだったんですがね～…」

（騎士団長のアレクセイじゃねえか）

男はアレクセイの言葉に従い、牢を出た。

そしてユーリの牢の前に来ると、わざとらしく転んだ。

「騎士団長じきじきって、おっさん、一体何もんだ？」

「……女神像の下」

男は小さくそう言うと、ユーリに牢の鍵を渡した。

「何をしている？」

「はいはい。今行きますよ」

男とアレクセイは地下牢を出ていった。ユーリは出ていったことを確認すると牢の扉を鍵で開けた。

「俺のも頼む」

「おう。待ってろ」

ユーリはシンクの牢の扉も開けた。

「しかし、相変わらずのザル警備だな。脱獄の上乗せがつかないわけだ」

「大丈夫じゃないのか？…多分」

シンクとユーリはそう言いながら、眠っている見張りを通りすぎ、箱に入っていた。自分たちの武器を拾った。そして、二人は地下牢を出た。

ユーリとシンクは遭遇した騎士達を倒しながら進んだ。
その先には、騎士二人と貴族のような少女がいる。

「お戻りください！」

「例の件は我々が責任を持って小隊長にお伝えしますので」

「そう言ってあなた方は何もしなかったではないですか！」

ユーリとシンクはこっそりと覗いている。

騎士が少女に近づこうとすると、少女は騎士に剣を向けた。

「お止めになられた方が……お怪我をなさりますよ？」

「剣の扱いは心得ています！」

「致し方ありませんね。手荒な真似はしたくありませんでしたが……」

そう言ってもう一人の騎士は剣を抜いた。それに続いてもう一人も剣を抜く。

『いたぞ！こっちだ！』

更に二人の騎士がやってきた。

「お願いします！行かせてください！私、どうしてもフレンに伝えなければならぬことがあるのです！」

（フレンだつて！？）

ユーリは飛び出し、やってきた騎士二人を蒼い疾風の衝撃波　蒼破
刃　を放ち倒す。

「うわあっ！」

「がっ！？」

「な、なんだ貴様は！？」

「フレン……！？私を助けに……？だ、誰？」

少女はユーリを見て笑顔からすぐに警戒する顔になった。
騎士達はユーリに剣を向けた。

（何をやってるんだアイツは……！）

シンクは呆れていた。

「ったく。こつそりのはずか、いきなり厄介ごとかよ」

「こいつ、魔導器を持ってるのか！？」

「慌てるな。相手は一人だ。二人で掛ければ問題ない！」

「残念だが一人じゃないぞ！」

シンクはユーリと騎士達の間に入る。

「疾走居合！」

「蒼破刃！」

シンクは目にも止まらぬ速さの居合いで、ユーリは 蒼破刃 で騎士を倒した。

「ったく。それが騎士のやることかよ」

「まったく…」

「最近の騎士団じゃ、エスコートもできないのか？」

「ユーリ。それにしてもさっきの行動は軽率だぞ」

「悪い悪い」

『ユーリ・ローウェール！何処にいる〜！』

『不届きな脱走者め！逃げ出したのは分かっているのである！』

突然、ユーリの名を叫ぶ声が聞こえた。その声は一人はアデコールの声であったが、もう一人の声はシンクは知らなかった。

「ちっ、またあいつらか。…しかもルブランまでいやがる」

「ルブラン？誰だそいつは？」

シンクはユーリに尋ねた。

「シュヴァーン隊の小隊長だよ。要するに、デコとボコの上司だよ」

『バカも〜ん！もっと声を出さぬか〜！』

『そういうルブラン小隊長は、声大きすぎて耳が…』
少女はユーリの名を聞き、少し驚いた。

「ユーリ・ローウェル？もしかして、フレンのお友達なの？」

「そうだけど、フレンに聞いたのか？」

ユーリの問いに少女は頷く。

「はい」

「ふーん、あいつも城の中に、話す相手いたんだな」

「ユーリ。話は後だ。今はここから離れよう」

「それもそうだな。そんじゃとりあえずフレンのところに案内すれば良いか？」

「あ、はい！」

「シンク、お前もそれでいいか？」

ユーリはシンクに向きながら尋ねる。

「仕方ない…早く行くぞ」

「はい！えーっと…」

「シンクだ。よろしく」

「よろしくお願いします！シンクさん」

そして、三人はフレンの部屋へと向かった。

*

ユーリ、シンクは少女を連れて、フレンの部屋に入った。
しかし、肝心のフレンはいなかった。

「やけに片付いてるな…こりゃあ、フレンのやつ、どっかに遠出かもな」

「そんな…間に合わなかった…」

「それで、お前は一体何者だ？何故騎士に追い回されている？」

シンクは唐突に少女に尋ねた。

「それは……あの！ユーリさん！シンクさん！」

「なんだよ急に？」

「詳しいことは言えませんが、フレンの身が危険なんです！わたし、それをフレンに伝えて行きたいんです」

少女の言葉を聞くと、ユーリはベッドに腰掛けた。

「行きたければ行けばいいんじゃないの？」

「それは……」

「俺達にも急ぎの事情があるんだ。外が落ち着いたら下町に戻りたいんだよ」

「俺はそれよりもアスピオに行きたいのだから」

ユーリとシンクがそれぞれ言うと、少女は二人に近づいた。

「だったら、お願いします。私も連れて行ってください。今の私には、フレン以外に頼れる人がいないんです。せめて、お城の外まで……お願いします、助けてください」

少女はそついうと頭を下げた。

「事情があるのはわかったが、せめて名前くらいは教えろ。俺達は名前を名乗った。だったらお前も名乗れ」

シンクがそう言った瞬間、ドアがものすごい勢いで開かれた。そこからは、双剣を持った赤と金髪の髪のアールバックの男が現れた。

「オレの刃のエサになれ……」

男はユーリに向かって言った。

「ノックぐらいしろよな」

「オレはザギ……お前を殺す男の名、覚えておけ、死ね、フレン・シーフォ……！」

そう言つてザギはユーリに向かって双剣を振り下ろす。
ユーリはすかさず二本ボシを抜き、防ぐ。

「人違いだ！」

「死ね」

「ちつとは人の話聞けよ」

「ザギだ。オレの名前を覚えておけフレン……オレはお前を殺し自らの血にその名を刻む」

「それ最高に趣味悪いな。あと俺はフレンじゃねえって言つてんだろ！」

そう言つてユーリはザギを押し退ける。

「やるな、フレン……あははっ！上り詰めてきたぞ！あはははははっ！」

ザギは急に笑いだした。

「急に様子変えやがつた……」

「あはははははっ！」

ザギは笑いながらユーリに剣を再び振り下ろす。

しかしそれは間に入ったシンクの閻魔刀に邪魔された。

「あん？」

「シンク！」

「まったく…見てられん…！」

シンクは閻魔刀でザギを払いのけた。

「私も手伝います！」

そこに少女が剣と盾を持って戦闘に参加した。

「危ないから下がっている！」

「でも…」

「いいぜ。2人でも3人でも相手してやる」

「仕方ない…あまり前に出過ぎるなよ！」

「はい！」

少女の返事を聞くと、シンクはザギに閻魔刀を横一閃に斬る。だが、ザギは剣でそれを受け止める。

「お前もなかなかやるな」

「そりゃ、どう…も！」

シンクはそう言うと、後ろに下がった。

そこにユーリがニバンボシでザギを斬り付ける。

「あははっ！上がってきたぜ！面白いぜお前ら！」

「ったく。仕事相手間違ってんぞ」

「そうですよ！この人はフレンじゃありません！」

「そんな些細なことはどうでもいいんだ！オレと一緒に上り詰めようぜ！」

「職務放棄しているぞこいつ…」

ザギは高笑いをしながら次の攻撃に移ろうとした時、入口からフィードを被った赤目の黒装束の男が現れた。

「ザギ、引け。こちらのミスで騎士団にバレた」

ザギは男の言葉を聞くと、男を殴り付けた。

「ぐっ…き、貴様…！」

「はははっ！オレの邪魔をするな！まだ上り詰める途中なんだよ！」

「今は引け！ここで楽しみを終わらせたいのか！？」

「ちっ！」

ザギは舌打ちをすると、男を切った。男は何度も切られ倒れた。そしてザギはユーリに振り返り、

「フレン・シーフォ……次に会つのを楽しみにしてるぞ…！」

そう言い残し、ザギは姿を消した。

「騎士団に見つかる前に行くぞ！」

「ああ、そうだな」

「あの、ユーリさん」

「分かったよ。ひとまずは城の外まで一緒だ」

「仕方ないか。ひとまずは一緒に行くぞ」

「ありがとうございます。ユーリさん、シンクさん。私の名前はエステルーゼと言います」

「エステルーゼか。よろしく。それはそうと、その格好じゃ流石に目立つと思うのだが…」

シンクはエステルーゼの着ているドレスを指摘した。

「それもそうですね。この先に私の部屋があるので、そこに行きましよう」

*

シンク達はまずはエステリーゼの部屋へ向かい、エステリーゼはさつきより動きやすい服装に変わっている。
すると、エステリーゼはユーリに手を差し出す。

「何、これ？」

「よろしくって意味です」

ユーリはエステリーゼの手をつかみ、すぐに放す。
エステリーゼは次にシンクに手を差し出す。

「よろしくです」

「ああ、こちらこそよろしく」

エステリーゼとシンクが握手をすると、3人は男からの情報の女神像に向かった。

*

場内のホールの中には立派な女神像があった。

「あれだな」

「この像に何か秘密があるんです？」

「そうらしい。聞いたのはユーリだからな」

シンクとユーリが女神像の周りを探し始める。

「ん…？」

シンクは女神像の床がすれているのを見つけ、女神像を引っ張ってみると、そこには地下道に続く梯子があった。

「ビンゴらしいな…」

「もしかして、ここから外に？」

「貴族のお姫様には、似合わない場所だからな。どうするエステリーゼ？」

「……行きます」

エステリーゼは少し悩んだが行くと決心した。

「よし、なら行くぞ」

そう言ってシンクは先に梯子を降りた。

それに続いて、ユーリ、エステリーゼも降りた。

3人は地下道へ下りて進むと魔物に遭遇はしたが、シンクとユーリ

が先頭を切って、エステリーゼがサポートに回ったことで乗り切り、外へと繋がる梯子を見つけて一人ずつ上って出口から出る。

外に出るとそこは既に朝だった。

「あゝあ、もう朝かよ。一晚無駄にしたな」

「ああ、とりあえずは下町に向かおうか？」

「それもそうだな」

ユーリはそう言いながら、最後に上ってきたエステリーゼの手を取ってあげた。

「窓から見るのと、全然違って見えます」

「そりゃ大げさだな」

「それは…」

「ところで、エステリーゼはどうする？そのフレンとかいう騎士を追うのか？」

「そのつもりです。まずは騎士の巡礼の始まる花の街ハルルに向かいたいと思います」

「ハルルか…ちょうどアスピオの途中だな。一緒について行ってやるぞ」

「いいんですか!？」

「おいおい、勝手に話進めるな。俺だってモルディオに用があるんだ。俺も行く」

シンクとエステリーゼの話にユーリも入ってきた。

「まあ、とりあえずは下町に戻ろう。行くぜ、シンク、エステル」

「ああ」

「はい……ってエステル？エステル……」

「エステリーゼじゃ長いだろ？ダメか？」

「エステル……いえ、大丈夫ですよ！」

エステリーゼ改めエステルはまずはシンクとユーリと共に下町に向かった。

ザーフィアス城 牢獄からの脱出（後書き）

スキット

【何故ユーリだけ？】

ユーリ「そういえばルブランの奴ら、俺の名前だけ呼んでたな。シンクもいたのに」

エステリーゼ「シンクも牢獄にいたんですか？」

シンク「ああ、ユーリと一緒に。恐らく、あいつらに名前、教えなかったからじゃないのか？」

ユーリ「ったく。なんで俺だけ…」

【フレンって誰だ？】

シンク「ずっと聞こうと思っていた」

ユーリ「なんだよ、シンク？」

シンク「エステルやお前、それにあのザギとかいうヤツの言っていたフレンとは誰だ？」

ユーリ「フレンか？そういえばお前にはフレンのこと説明してなかったな」

ユーリ「フレンは、昔から俺と一緒に下町で育ったやつで、今は騎士団の小隊長やってるらしい」

エステリーゼ「ユーリのことは、フレンから話を聞いていたのそれで分かったんですよ」

ユーリ「あのザギってやつは知らねえけどな」

シンク「なるほど…騎士か…」

デイドン砦 魔物達の進行（前書き）

今回は下町の話飛ばしてデイドン砦の話からスタートさせます。

デイドン砦 魔物達の進行

ユーリ、シンク、エステルそしてラピードはハンクスや下町の皆の協力で、ザーフィアスを出ることができた。

エステルはフレンに合うためにハルルの街へ、ユーリは下町の魔核ドロボウを捕まえるためにアスピオを、シンクも別の目的でアスピオを目指すために3人と一匹は旅に出た。

ユーリ達は現在、帝都から北のデイドン砦にたどり着いた。そこには騎士達がいた。

「ユーリとシンクを追ってきた騎士でしょうか？」

「どうか。ま、あんま目立たないようにな」

「ああ、騎士に目を付けられると面倒だからな」

「はい。私もフレンに早く会いたいですし」

「それじゃ、目立たないように……」

シンクが言う前に、エステルは出店の本を読み始めた。

「本当にわかってんのか？」

「恐らくはな……」

カンッカンッ！！

突如、鐘の音が激しく鳴り響く。
砦の先には、こちらに向かってくるモノたちがいた。
魔物の群れだ。

砦の外の人達は、急いで砦の中に入る。
騎士が門を閉じようとしている。

「早く入りなさい！！門が閉まるわ！！」

砦の上にいる女性の声が響く。

「矢だ、矢を持ってこい！」

「早く門を閉めろ！！」

「くそっ！やつが来る季節じゃないだろ！」

「主の体当たりを耐えればやつら魔物は去る！訓練を思い出せ！」

騎士の指示で、騎士達は魔物の群れに矢を放つ。
イノシシのような魔物の群れはそれでも向かってくる。
人が一通り砦に入った。

だが、一人の少女と一人のケガをしている男性を残して。

「……よし、退避は完了した！扉を閉めろお！」

「閉門を待ちなさい！まだ残された人が……」

女性は騎士の指示を止めようとする。
エステルは魔物達を見て驚きの表情を浮かべる。

「あれ、全部、魔物ですか……」

「帝都に出て早々にとんでもないもんにあつたな」

「ああ、寄りにもよつて…魔物の群れにな……」

「俺、なんか憑いてんのか？」

そう言つてユーリとラピードは門に向かった。

ラピードは門を閉じようとしている騎士を威嚇する。

「ワウッ！」

「な、なんだ、おまえ！うわっ、うわっ！やめろ！」

騎士が手を離れたことで門の閉門は止まった。
シンクもユーリの所に向かおうとする。

「エステル、おまえはここで待つて……つておい！エステル！」

エステルはシンクの言うことを聞かずに走つていった。

「ユーリは女の子を！」

「……はいはい」

ユーリは呆れた顔で頷いた。

エステルは足にケガをした男性駆け寄る。

「た、助けて……立てなくて……ひっ……！魔物が、魔物が……！」

「大丈夫ですよ」

エステルは得意の治癒術で男性の足を治した。

「……あ、た、立てる」

「早く避難してください」

男は走って門に向かう。

エステルも門へ走った。

後ろからユーリも女の子を抱えて門に入った。

「お人形！ママのお人形！」

女の子がいたところを見ると、人形があった。

エステルが気付いて向かおうとするが、シンクに腕を掴まれた。

「は、放してください！」

「俺が行く！ここにいろ！」

シンクはそう言って人形のところへ走った。

「まったく…思いつき目立っているじゃないか！」

シンクは悪態をつきながらも人形を拾い上げ、門に向かう。
門は閉じようとしていた。

「シンク！」

シンクは滑り込み、ギリギリのところまで門に入れた。

*

「なんとお礼を申していいか…」

「怪我まで治してもらい、本当にありがとうございます」

シンク達は女の子の母親と怪我を治してもらった男性に礼を言われていた。

「い、いえ私達は…」

「お兄ちゃん！ありがとう！」

女の子はシンクに頭を下げて言った。

「怪我がなくてよかったな」

シンクは優しく微笑んだ。

母親と男性はシンク達から離れていった。

「……みんな無事で本当によかった…」

エステルはそう言うと、ぺたりと座り込んだ。

「あ、あれ…？」

「安心した途端にそれかよ」

「まったく…」

ユーリとシンクは笑いながら一緒に座った。

「結界の外にはあんなに凶暴な魔物がいるんですね…」

「あんな群れで来られると、結界が欲しくなるよな」

「だが、結界魔導器も貴重品だからな」

「そうですね…魔導器を生み出した古代ゲライオス文明の技術がよみがえればいいのに……」

「ゲライオス文明か……」

シンクは小さく呟いた。

「それがよみがえっても、帝国が民衆のためにつてのはちょっと想像しにくいな」

ユーリ達が話していると騎士がやってきた。

「その3人、少し話を聞かせてもらいたい」

だが、騎士が話し掛けるとほぼ同時に、遠くから別の声が聞こえた。

「だから、なぜに通さんのだ！魔物など俺様がこの拳でノックアウトしてやるものを！」

「簡単に倒せる魔物じゃない！何度言えばわかるんだ！」

フードを目深に被った男が騎士ともめている。

フードの男のそばには、大剣を持った大柄な男と三日月型の武器を持った少女がいる。

「貴様は我々の実力を侮るというのだな？」

フードの男が言うと、大柄な男は大剣を抜き掲げる。

「や、やめろ！」

騎士の警告を聞かずに男は大剣を振り下ろす。周りに風が巻き起こった。

「邪魔するな！先の仕事で騎士に出し抜かれたうつぶんをここで晴らす！」

「おい！」

「これだからギルドの連中は！」

ユーリ達に話し掛けていた騎士も身構えた。

「あの様子では、門を抜けるのは無理だな」

「そんな…フレンが向かった花の街ハルルはこの先なのに」

「騎士に捕まるのも面倒だ。別の道を探そう」

ユーリはそう言うとおてもなく砦の周囲をぶらつく、すると先ほどの砦で叫んでいた女性がユーリたちに話し掛けてきた。

「ねえ、あなた、私の下で働かない？報酬は弾むわよ」

そう言つて金が入った袋を掲げる女性にユーリは無言で目を反らす。

「社長^{ボス}に対して失礼だぞ、返事はどうした」

「名乗りもせずに金で吊るのは失礼って言わないんだな。いやあ、勉強になつたわ」

「おまえ！」

女性と一緒にいた男性は、ユーリの態度に怒り、ユーリに詰め寄ろうとするが、女性が止める。

「予想通り面白い子ね。私はギルド『祝福の市場^{ギルド・ド・マルシェ}』のカウフマンよ。商売から流通までを仕切らせてもらつてるわ」

「ふん、ギルドね…」

ユーリがカウフマンの『ギルド』という言葉に少し反応する。すると、地響きが起こる。

「私、今、困つてるのよ。この地響きの元凶のせいで」

「あんま想像したくねえけど、これって魔物の仕業なのか？」

「そう。平原の主のね」

「平原の主？」

エステルがカウフマンに尋ねると、代わりにシンクが答えた。

「門の向こうの魔物達の親玉だ」

「あの親玉か…」

「どこか別の道から、平原を越えられませんか？先を急いでるんです」

「さあ？平原の主が去るのを、待つしかないんじゃない？」

カウフマンはそっぽを向いて言った。

「焦っても仕方ねえってわけだ」

「待つてなんていられません。わたし、他の人にも聞いてきます！」

そう言ってエステルは走っていった。

「待てエステル！はあ…ユーリ、ここは任せた」

シンクはそう言うと、ラピードと一緒にエステルを追い掛けた。

*

シンクはエステルを追い掛け、腕を掴む。

「放してください！シンク！」

「落ち着け！ユーリがなんとかしてくれるはずだ。今はユーリを待とう」

「……分かりました。ごめんなさい。わたし、フレンのところに行かなきゃって気を急いでいました」

「フレンというやつを考えるのはわかるが、今はユーリを待とう」

「はい」

シンクとエステルは座り込み、ユーリを待った。

「そういえばシンクは、どうしてアスピオへ？」

「魔核ドロボウを捕まえるのもあるが…会っ人がいるんだ」

「会っ人？」

「……俺には記憶がないんだ」

シンクの言葉にエステルは驚きの表情を浮かべる。

「記憶喪失というのですか？」

「正確には、三年前より以前の記憶がないんだ。そんなとき、彼女と出会った。彼女は記憶のない俺に住む場所を与えてくれた。俺は……彼女を守りたい。その為に強くなると決めて、アスピオを出た。何も言わずにな」

「アスピオに行くのは、その人に会うためなんですね」

「ああ」

エステルはシンクの話聞き終わると、少し考えてから、口を開いた。

「わかりました！花の街ハルルに行って、フレンと会ったら、必ずアスピオに行きましょう！」

「ワンッ！」

エステルの言葉にはラピードも頷いた。

「エステル…ありがとう。ラピードもな」

「クウーン」

シンクはラピードの頭を撫でた。ラピードも嬉しそうに鳴く。

「エステル、シンク」

二人を呼ぶ声がした。

ユーリだ。

カウフマンとの話を終えてきたようだ。

「あ、ユーリ！」

「話は終わったのか？」

「ああ、ここから西にある森を抜ければ、平原を越えられるってよ」

「本当ですか！？」

「らしいぜ。んじゃ、さっさと行こうぜ」

「そうだな」

「ワンッ！」

ユーリ達は、デイドン砦を後にし、西にある森、クオイの森へ向かった。

デイドン砦 魔物達の進行（後書き）

次回はクオイの森です！

お楽しみに！

感想もお願いします！

クオイの森 倒れる姫（前書き）

クオイの森の話です。

アクセスがもう10000超えて驚きました。
感想も欲しい！

クオイの森 倒れる姫

ユーリ、シンク、エステル、ラピードはカウフマンからの情報で、西にあるクオイの森へとたどり着いた。

「……この場所にあるって…、まさか、クオイの森……?」

「ご名答、よく知ってるな」

「クオイに踏み入る者、その身に呪い、ふりきる、と本で読んだことが……」

「そんなのは迷信だ。行くぞ」

ユーリとシンクは奥に進もうとしたが、エステルは呪いを気にして進まなかった。

「行かないのか? ま、オレはいいけど、フレンはどうすんだ?」

「……わかりました。行きましょう!」

エステルは覚悟を決めて奥に進んだ。

*

「蒼破刃！」

「スターストローク！」

「紅蓮斬！」

「ガウッ！」

ユーリ、エステル、シンク、ラピードは森の魔物を蹴散らしながら進んでいく。

「な、何の音……です？」

何か変な音をエステルが感じた。

「足元がひんやりします……まさか！これが呪い！？」

「どんな呪いだそれは？」

「木の下に埋められた死体から、呪いの声がじわじわと這い上がり、わたしたちを道連れに……」

「おいおい……」

ユーリは呆れたように言った。

「エステルは迷信を信じすぎだ。行くぞ」

シンクはそう言って先に進んでいく。

「……………あれは…」

シンクは何かを見つけた様だ。

「これ、魔導器か。なんでこんな場所に……………」

ユーリとラピードも近づいた。

「少し休憩するか」

「そうだな」

シンクはエステルが辛そうにしてるのを見てユーリに同意を求めた。

「だ、大丈夫です」

エステルはそれを断って歩きだした。そして、魔導器の前で止まった。

「……………あれ、これは？」

と言ってエステルは魔導器に近づいた。
次の瞬間、魔導器が強烈な光を発した。

「「うわっ!」」

「きゃっ!」

光が収まると、エステルが倒れた。

「「エステル！」」

ユーリとシンクはエステルに駆け寄った。

「おい、エステル！」

「これは…一体…」

*

エステルはラピードに枕がわりになってもらって、眠っている。
シンクは周りの警備を、ユーリは落ちていた実をかじった。

「にがつ」その時、エステルが目を覚ました。

「大丈夫か？」

「うつ……少し頭が……でも、平気です。私、一体……」

「突然倒れたんだよ。何か身に覚えはないか？」

「もしかしたら、エアルに酔ったのかもしれない」

「はい、そのエアルです」

「濃度が濃いエアルは人体に悪影響を与えるんだ。エステル、大丈夫か？」

警備から帰ってきたシンクがユーリに説明した。

「はい、大丈夫です」

「ふーん、だとすると呪いの噂ってのはそのせいなのかな」

ユーリが納得していると、エステルが立ち上がった。

「倒れたばかりなんだ、もう少し休め」

「そうはいきません。早くフレンに追いつかないと」

「また倒れて、今度は一晩中起きなかったらどうするんだよ」

「でも……そうですね。ごめんなさい……」

*

一休みした後、ユーリ達は再び森を進んだ。
もうすぐ出口というところで、

「グルルルル……」

ラピードが草むらに向かって威嚇していた。

すると草むらがガサガサと音がした。

「ん？」

ユーリとシンク、エステルは草むらの方を向いた。

「エツグベアめ、か、覚悟！」

いきなり、草むらから小柄な少年が飛び出して来た。
自分よりも大きい剣を振り回しながら。

「うわっ、とっとうっ！」

回り続ける少年にユーリはタイミングを見て、ニバンボシで、少年の武器に攻撃した。

「うあああっ！あうっ！う、いたたた……」

回っていた少年は転んだ。

転んだ少年にラピードが近づいた。

「ひいっ！ボ、ボクなんか食べても、おいしくないし、お腹壊すんだから」

「ガウッ！」

「ほ、ほほんとに、たたたすけて。ぎゃあああ~~~~!!」

「忙しいガキだな」

「何なんだコイツ」

呆れているユーリとシンク。エステルは少年に近づいた。

「だいじょうぶですよ」

「あ、あれ？魔物が女の人に」

「そんな訳ないだろ」

「つたく。なにやってんだか」

＊

「ボクはカロル・カペル！魔物を狩って世界を渡り歩く、ギルド『魔狩りの剣』の一員さ！」

先ほどの少年、カロルは自己紹介した。

「オレは、ユーリ。それにエステルとシンク、ラピードだ」

ユーリがみんなを代表して自己紹介した。

「んじゃ、そういうことで」

「あ、え？ちょっとユーリ、シンク！」

ユーリとシンクは歩きだした。

「えと、ごめんなさい」

「へ？……って、わく待って待って待って！」

カロルは歩きだしたユーリ達の前に急いで出た。

「3人は森に入りたくてここに来たんでしょ？なら、ボクが……」

「いえ、わたしたち、森を抜けてここまで来たんです。今から花の街ハルルに行きます」

「へ？うそ！？呪いの森を？あ、なら、エッグベア見なかった？」

「いや、見なかったと思うが」

「そっか……なら、ボクも戻ろうかな……あんまり待たせると、絶対に怒るし……うん、よし！3人だけじゃ心配だから、『魔狩りの剣』のエースであるボクが街まで一緒に行つてあげるよ！」

カロルはそう言うと、自分の鞆を見せる。

「ほらほら、なんたってボクは、魔導器だつて持つてるんだよ」

カロルはそう言うが、ユーリにエステル、シンクもラピードも魔導器を持っている。

「あ、あれ、3人共なんで魔導器持つてるの！な、ならこれでどうだ！」

そう言つてカロルは少し厚い本を見せた。
中には魔物の情報などが書いてあつた。

「魔物の情報か。だが、途中から白紙だぞ？」

「こ、これからどんどん増えていく予定なの！」

ユーリとシンクは本に魔物の情報を書き込んでいた。

「ちょっと！ねえ、勝手に書き込まないでよ！」

「エースの腕前も、剣が折れちゃ披露できねえな」

「いやだなあ。こんなのただのハンデだよ。あれ？なんかいい感じ？」

カロルは折れた武器を振りながら言つた。
ユーリ達はカロルを置いて行こうとした。

「ちょ、あ、方向わかつてんの？ハルルは森出て北の方だよ。もお、置いてかないでよ」

カロルもユーリ達についていった。

*

ユーリ達が先ほどまでいた魔導器の場所では…

魔導器が光出した。

そこに赤いオーラ放つ剣を持った男が剣を掲げる。
男の周りには謎の魔法陣が展開された。

クオイの森 倒れる姫（後書き）

次回はハルルの街！

エッグベア戦も含めた話にしたいと思います。
お楽しみに！

感想もお願いします！

花の街ハルル 樹を生き返らせるため…（前書き）

今回はハルルの街の話です。

長くなってしまいました。

あと、少しばかりデビルメイクライの設定組み込みました。

花の街ハルル 樹を生き返らせるため…

ユーリ、エステル、シンク、ラピードはクオイの森で出会った少年、カロールと共に花の街ハルルに到着した。しかし街には結界が張られていなかった。

「ここがハルルなんですよね？」

「うん、そうだよ」

「この街には結界がないのか？」

「ユーリとエステルはこの街は初めてだったな。この街の結界魔導器は樹についているんだ」

「魔導器の中には植物と融合して、有機的特性を身につけることで進化をするものがある、です。その代表が、花の街ハルルの結界魔導器だと本で読みました」

エステルが説明すると、ユーリは街の様子を見た。街の住民の中にはケガをした人が多くいた。

「役に立ってねえみたいだけど」

「毎年、満開の季節が近付くと一時的に結界が弱くなるんだよ。ちょうど今の季節なんだけど、そこを魔物に襲われて……」

「結界魔導器がやられた…というところか？」

「うん、魔物はやつつけたけど、樹が徐々に枯れはじめてるんだ」

そこにカロルの前を通りすぎた女の子がいた。

「あっ！」

「どうしました、カロル？」

「ごめん！用事があつたんだ！じゃあね！」

そう言つてカロルは走つていった。

「どうしたんだろうな？」

「さあな。勝手に忙しいやつだな。エステルはフレンを探すんだよな……」

エステルはユーリが言い終わる前にケガをした人達に駆け寄つた。

「まったく、大人しくすることができないのかアイツは」

「ああ、それにフレンはいいのかよ」

そう言つてユーリとシンクはエステルのところまで歩み寄つた。

「わたしに、皆さんの手当てをさせてください」

「なんと、治癒術をお使いになるのか！？」

エステルの言葉に長老らしき老人が驚きの声を上げた。

「ええ、それはぜひとも！……あ、いや、ですが、私らお金の方は……」

「そんなのいりません」

そう言つてエステルはみんなのケガを治癒術で手当てした。

「ありがとうございます！本当にありがとうございます！」

「いえ、そんな、ぜんぜん……」

「いやはや、これほどの治癒術があつたなんて……」

「なんとお礼を言えばいいか」

エステルがみんなに感謝されてるのを見ると、シンクは離れようとしていた。

「シンク、どこ行くんだよ？」

「ハルルの樹を少し見てくる」

「そうか。オレは少ししたら行く」

「わかった」

シンクはユーリ達と別れた。

＊

シンクはハルルの樹を見ていた。
樹は徐々に枯れようとしていた。
ふと、シンクは足下の土を見た。そこだけなぜか色が違っていた。

「これは……魔物の血か？」

シンクは土を見て呟いた。

「シンク。どうだ？樹は」

「ユーリ…エステルもか」

そこにユーリとエステル、ラピードがやってきた。

「お前達はこれからどうする？」

「わたしは、フレンが来るまでケガ人の治療を続けます」

「なあ、どうせ治すなら結界の方にしないか？」

「「え？」」

ユーリの言葉にエステルとシンクは首を傾げた。

「魔物が来れば、またケガ人が出るんだ。今度はさっきのガキたち

が大ケガするかもしれねえ」

「それはそうですけど……」

「どうやって結界を治すつもりだ？」

「こんだけかい樹なんだ。魔物に襲われた程度で枯れたりしないだろ」

「それなら、土を見てみる。足下の土だけ変色している。恐らく魔物の血を土が吸ってしまつて樹を枯らしているんだろっ」

「なんと！魔物の血が……」

そこに先ほどの長とカロルがやってきた。

「シンク、よくわかつたね」

「ということは、カロルも知っていたんだな？」

「ま、まあね。……ボクにかかれば、こんくらいどうってことないよ」

「その毒をなんとか出来る都合のいいもんはないのか？」

ユーリがカロルに尋ねた。

「あるよ、あるけど……誰も信じてくれないよ……」

カロルは顔を俯かせて言った。

「なんだよ、言ってみなつて」

「パナシアボトルがあれば、治せると思うんだ」

「パナシアボトルか。よろず屋にあればいいがな」

「行きましょう、ユーリ、シンク！」

*

ユーリ、シンク、エステル、ラピードはよろず屋を訪れた。

「はいよ、いらつしやい。今日は何がいり用で？」

「パナシアボトルはあるか？」

「あいにくと今切らしてるんだ」

「そんな……」

「素材さえあれば、合成できるだがね」

「何が必要なんだ？」

「『エッグベアの爪』と『ニアの実』、『ルルリエの花びら』の3つ

だ。けど、パナシールボトルを一体、何に使うんだ？先日も同じことを聞いてきたガキがいたんだが」

「ハルルの樹を治すんです」

「え？パナシールボトルを樹に使うなんて、聞いたことないけどなあ」

「なるほど…カロルがクオイの森でエッグベアを探していたのはそういうことか……」

「あの、ニアの実とはどんなものなんです？」

「森でオレが食ってたあの苦い果実だよ」

「ルルリエの花びらは？」

「この街の真ん中にハルルの樹があるだろ？あれの花びらさ。普通なら魔導樹脂をつかうんだけど、このあたりにはないからね。ルルリエの花びらは長が持つてると思うから聞いてみてよ」

「わかった。素材が集まったら、また来る」

ユーリ達はそう言っただけで、屋を後にする。そして、隠れていたカロルに話し掛けた。

「カロル、クオイの森に行くぞ」

「え？」

「森で言ってたろ？エツグベアかくごって」

カロルは少し驚きの表情を浮かべる。

「パナシアボトルで治るって信じてくれるの……？」

「お前が嘘をついてるようには見えない。だから、俺達はお前の言葉を信じる」

「シンク……も、もう、しょうがないな。ボクも忙しいんだけどね」

カロルはいつもの調子に戻った。

「決まりですね！わたしたちで結界を直しましょう」

「エステルも来るの？」

「フレンという男を待たなくていいのか？」

「治すなら樹を治せて言ったのはユーリです」

「なら、フレンが戻る前に樹治して、びびらせてやるっぜ」

ユーリ達は再びカロルも加わり、クオイの森に向かった。

*

くクオイの森」

「ねえ、疑問に思ってたんだけど、三人……ラピードもなんだけど、なんで魔導器持ってるの？」

カロルが森に入った直後に尋ねた。

「普通、武醒魔導器なんて貴重品持っていないはずなんだけどな」

「カロルも持ってたんじゃない」

「ボクはギルドに所属してるし、手に入れる機会はあるんだよ。魔導器発掘が専門のギルド、『遺構の門』ルインスゲートのおかげで出物も増えたしね」

「ほお、遺跡から魔導器を発掘するギルドもあるのか」

「うん、そうでもしなきゃ帝国が牛耳る魔導器を個人で入手するなんて無理だよ」

「古代文明の遺産、魔導器は、有用性と共に危険性を持ったため、帝国が使用を管理している、です」

エステルが説明する。

「やりすぎて独占になってるけどな」

「確かにな」

「そ、それは……」

「で、実際のところどうなの？なんで、持ってたの？」

「オレ、昔騎士団にいたから、やめた餞別にもらったの。ラピードのは、前のご主人様の形見だ」

「餞別って、それ盗品なんじゃ。……えと、エステルは？」

カロルは次にエステルに尋ねた。

「あ、わたしは……」

「貴族のお嬢様なんだから魔導器くらい持ってるって」

「あ、やっぱり貴族なんだ。ユーリと違って、エステルには品があるもんね」

「うるせえ」

「じゃあ、シンクは？」

「俺は……わからない？」

「え？どういうこと？」

「カロルには話していませんでしたね。シンクは記憶喪失なんです」

よ」

「えっ？そうなの？」

「ああ、3年前より以前の記憶はない。覚えていたのは名前とこの刀の名前くらいだ」

シンクは閻魔刀を見せながら言った。

「そういえばその刀、なんて名前なの？」

「閻魔刀だ」

「「！！」」

シンクの言葉に、カロールとエステルは驚く。

「どうしたんだよ？そんなにすごいのか？」

「すごいも何も、閻魔刀って言ったら、古代ゲライオス文明の伝説の英雄『スパード』の持っていた剣の一つだよ！」

「英雄『スパード』。強大な魔物達を自分の持つ三つの剣で、一人で倒したと言われる伝説の剣士、と本で見たことがあります」

「ふーん。英雄ね」

「俺にはよくわからない。今はニアの実とエッグベアの爪を探すことを先決にしよう」

シンクは話題を変えて先に進んだ。

（スパーダか……）

『スパーダ』が自分の記憶に関わっているのではないかと、シンクは疑問に思った。

*

ユーリ達は前にエステルが倒れた魔導器のある場所に着いた。そこでユーリは落ちていたニアの実を拾った。

「あとは、エッグベアの爪、だね」

「森の中を歩いて、エッグベアを探すんです？」

「それでは、多分見つからないと思うぞ」

「なら、どうすんだ？」

「ニアの実一つ頂戴。エッグベアを誘い出すのに使うから。エッグベアはね、かなり変わった嗅覚の持ち主なんだ」

ユーリはそれを聞くと、カロールにニアの実を渡した。カロールはニアの実をいじりだした。すると、ものすごい異臭が漂った。

「くさっ！！おまえ、くさっ！！」

「ちょ、ボクが臭いみたいに！」

カロールが近づこうとするが、ユーリ達は異臭で引く。

「先に言ってからやれ！」

シンクがそう言つと、ラピードが倒れた。

「あ、ラピード、しっかりして」

「みんな警戒してね。いつエッグベアが来てもいいように。それに、エッグベアは凶暴なことでも有名だから」

「その凶暴なやつの相手は、カロール先生がやってくれるのか？」

「やだな、当然でしょ。でも、ユーリとシンクも手伝ってよね」

「わたしもお手伝いします。ほら、ラピードも」

エステルが介抱していると、ラピードはやっと立ち上がった。

「それじゃ、これで森の中を歩いてみるか」

シンクの言葉でユーリ達はカロールを先頭に歩きだした。

＊

『ガアアア！！』

森を歩いていると何かの叫び声が聞こえた。
それを聞いたカロルはユーリの後ろに隠れる。

「き、気をつけて、ほ、本当に凶暴だから……！！」

「そう言ってる張本人が真っ先に隠れるな」

「エ、エースの見せ場は最後なの！」

そう言っていると茂みから出てきたのは、タンポポの形をした植物型のモンスター、プチプリだった。

「……これは、違いますよね」

プチプリが去ると、次に現れたのは、巨大な腕を持つ熊の魔物、エツグベアだった。

「うわああっ！」

「こ、これがエツグベア……？」

エステルが言うと、カロルは頷く。

「なるほど、カロル先生の鼻曲がり大作戦は成功ってわけか」

「へ、変な名前つけないでよ!」

「そういうセリフは、しゃきつと立って言うもんだ」

ユーリはそう言って、ニバンボシを抜く。

「来るぞ!」

閻魔刀の柄を握っているシンクが叫ぶと、エステルとカロールとラピードも武器を構えた。

そしてエッグベアは巨大な腕を振り回した。

4人は散開して避けた。

「蒼破刃!」

ユーリは蒼破刃を放つがあまり効いていない。

「紅蓮斬!」

シンクは閻魔刀を抜き、炎を纏った斬撃を放った。

エッグベアは少し仰け反る。

「臥龍アッパー!」

カロールはハンマーでアッパー攻撃をしたが、エッグベアは巨大な腕で防御した。

そしてエッグベアは腕を振り回した。

「うわっ！」

カロルは吹き飛ばされる。

「大丈夫ですか！聖なる活力ここに、ファーストエイド！」

エステルが駆け寄り、治療術で治した。

エッグベアがカロルとエステルに向かおうとした。

「ガウッ！」

ラピードが剣でエッグベアの背中を切る。エッグベアはラピードに視線を向けた。

「今だ！」

「わかってる！」

シンクとユーリは隙について左右から攻撃をする。

「双牙掌！」

「風牙一閃！」

ユーリはニバンボシで斬り付けたあと、右手の拳でアッパーを繰り出し、シンクは風を纏った閻魔刀で一閃した。

『グオオオ………』

エッグベアは力尽き倒れた。

「カロール、爪取ってくれ。オレ、わかんないし」

「え！？だ、誰でもできるよ。すぐはがれるから」

カロールが言っと、ユーリ達はエッグベアに近付く。

「わたしにも手伝わせてくだ……うつ」

「エステルとシンクは周囲の警戒な」

「は、はい」

「わかった」

そう言つて、シンクとエステルは周りを警戒した。

「うわあああつー!!」

「ぎゃあああ~~~~っ!!」

後ろからカロールの叫び声が聞こえ、振り向くと、カロールはガクガク震えていた。

「驚いたフリが上手いなあ、カロール先生は」

「あ、うつ……はっはは……そ、そう？あ、ははは……」

「ユーリ…あまりからかうな。こつちも驚いた」

「悪い悪い」

そう言つてユーリはエッグベアから爪を剥ぎ取つた。

「さて、戻ろうぜ」

そう言つてユーリ達は森を出口まで歩いた。

*

ユーリ達が森の出口にさしかかったところで、

『ユーリ・ローウェル！名無しの男！森に入つたのはわかっている！素直にお縄につけい！』

奥からシュヴァーン隊のルブランの声が聞こえた。

「この声、冗談だろ。ルブランのやつ、結界の外まで追つてきやつたのか」

「名無しの男とは、俺のことか？」

「そつなんじゃねえのか？おまえ、あいつらに名前教えてないしな」

「え、なに？誰かに追われてんの？」

「ん、まあ、騎士団にちよつと」

「またまた、元騎士が騎士団になんて……」

「信じたくないだろうが、ユーリの言ってることは事実だ」

「え、え、ええっ！！」

カロルが叫ぶと、

『す、素直に出でるのである』

『い、今ならボコるのは勘弁してあげるのだ』

更にアデコールとボツコス声も聞こえた。

『噂ごときに怯えるとは、それでもシュヴァーン隊の騎士か！』

「……ねえ、何したの？器物破損？詐欺？密輸？ドロボウ？人殺し？火付け？」

「脱獄だけだと思っただけど……」

「とにかく今は逃げよう」

ユーリとシンクは林の草を使って道を阻んだ。

「これでよし」

「だな」

「だ、だめですよ！無関係な人にも迷惑になります！」

「ここは呪いの森と言われているんだから、大丈夫だろ？」

そう言ってユーリとシンク、ラピードは森を出ようとした。エステ
ルも後に続いた。

「わゝ、待ってよゝ！」

置いてかれたカロルも走って追い付いた。

*

ハルルの街に着いた頃には夜となっていた。

ユーリ達は長からルルリエの花びらをもらい、よろず屋を訪れた。

「おっ、戻ってきたか。材料は揃ってるか？」

「ちゃんとあるよ」

そう言っでカロルは、素材を渡した。

「よし、作業に取り掛かる」

店主はその後、パナシーアボトルを持って出てきた。

「パナシーアボトルの出来上がりだ」

「これで毒を浄化できるはず！早速行こうよ！」

カロルの言葉で4人は樹に行った。

樹には街の人たちが集まる。

「おおつ、毒を浄化する薬ができましたか！」

「カロル、任せた。面倒なのは苦手だね」

「え？いいの？じゃあボクがやるね！」

カロルはパナシーアボトルを受け取り、樹に向かった。

「カロル、誰かにハルルの花を見せたかったんですよね？」

「恐らくはな」

「ま、手遅れでなきゃいいけど」

カロルはパナシーアボトルをかけた。
樹の毒が浄化されていく。

「お願いします。結界よ、ハルルの樹よ、よみがえってください」

しかし、ハルルの樹には何の変化も起きなかった。

「そ、そんな……」

「うそ、量が足りなかったの？それともこの方法じゃ……」

カロルは樹がよみがえらなかったことに困惑している。

「もう一度、パナシアボトルを！」

「それは無理です。ルルリエの花びらはもう残っていません」

「そんな、そんなのって……」

諦めきれないエステルは樹の前に立ち、両手を合わせ、祈った。

「お願い……」

すると、エステルの周りに光の粒子が現れた。

「エステル……」

「あれは……」

光の粒子が樹を覆った。

「咲いて……」

なんと、信じられないことに樹が生き返ったように花を咲かせ、結界が復活した。

街の人々は驚きを隠せなかった。

「す、すごい……」

「こ、こんなことが……」

「今のは治癒術なのか……」

「これは夢だろ……」

「あり得ない……でも……」

エステルはその場で膝を下ろす。

「はあ……はあ……」

エステルは荒い息遣いをする。

「ありがとうございます。これで、まだこの街も、やっていきます……」

長はエステルに礼を言った。

「わ、わたし、今何を……？」

「……すげえな、エステル。立てるか？」

ユーリが尋ねると、エステルは立ち上がる。

「ユーリ」

ユーリとカロルはハイタッチする。

「シンクも」

「あ、ああ……」

シンクもカロルとハイタッチした。

「フレンのやつ、戻ってきたら、花が咲いてて、ビックリだろうな。
……ざまあみる」

「ユーリとフレンって不思議な関係ですね。友達じゃないんです？」

「ただの昔馴染みってだけだよ」

「ライバルと言った方がいいんじゃないか？」

「そりゃ、言えてるな」

「……………」

ラピードがユーリたちに近づき、ある方向を向いた。そこには城で会った赤目の男たちとザギがいた。

「あの人たち、お城で会った……」

「ここで会つのはまずいな。この街から早く離れよう」

「え？なにになに？どうしたの急に！」

ユーリ達は街から出ようとした。

「面倒な連中が出てきたな」

「ここで待っていれば、フレンも戻ってくるのに」

「そのフレンって誰？」

「「エステルが片想いしてる帝国の騎士様だ」」

ユーリとシンクは同時に言った。

「ええっ!!」

「ち、違います!!」

「あれ？違うのか？ああ、もうデキてるってことか」

「もう、そんなんじゃないやありません。というかシンクも笑わないでください!!」

「ククッ……すまない。おかしくてな……」

「ま、なににせよ、街から離れた方がいいな。シンク、アスピオつてのは、どこにあるんだ？」

「ここから東の方向にある。洞窟に囲まれた街だ」

「東って言ったら、フレンが行ったところですね」

「そういえばそうだな。とりあえず、今は急いでここを出た方がいいな」

その言葉にシンクとエステルも頷く。

「待つてくだされ」

そこに長がやってきた。

「花のお礼がしたいので、我が家へおいでください」

「すまない長。今は一刻も早くこの街から出なければならんだ」

シンクが長の誘いを断った。

「ですが、何かお礼をしなくては私の気持ちが収まりが付きません」

「なら、こうしよう。今度遊びにきたら、特等席で花見させてくれ」

「あ、それいいですね！とても楽しみです！」

「……わかりました。その時は腕によりをかけて、おもてなしさせていただきます」

「サンキュ、んじゃあまたな」

そう言ってユーリ達は街を出た。

「そっいや、カロルはどうすんだ？」

「港の街に出て、トルビキア大陸に渡りたいんだけど……」

「それじゃ、ここでお別れか」

「え!？」

「カロル、ありがとな。楽しかったぜ」

「お気をつけて」

みんなの言葉にカロルはあわあわしていた。

「あ、いや、もうちょっと一緒について行こうかなあ」

「なぜだ？」

「やっぱ、心細いでしょ？ボクがいないとき」

「ま、カロル先生、意外と頼りになるもんな」

「では、みんなで行きましょう」

再びカロルも加わってアスピオに向かうことになった。

「とにかく、あのザギとかいうやつもいるからな。来る前にここを出よう」

シンクの言葉にみんな頷いた。

各々の目的のために、ユーリ達はアスピオへ向かった。

花の街ハルル 樹を生き返らせるため…（後書き）

次回は学術都市アスピオ。

ようやくリタを出せる！

お楽しみに！

感想もお願いします！

学術都市アスピオ 再会する二人（前書き）

今回かなり長い！

今回はアスピオくシャイコス遺跡くアスピオという流れです。
やっとりタを出せた！

学術都市アスピオ 再会する二人

ユーリ達はハルルの街の東にあるアスピオに到着した。

「ここがアスピオだ」

「薄暗くてジメジメして……おまけに肌寒いところだね」

「街が洞窟の中にあるせいですね」

「太陽見れねえと心までねじくれんのかね、魔核盗むとか」

「……とりあえず行くぞ」

シンクを先頭に入り口に行く。

行こうとするとそこにいる騎士に止められた。

「通行許可証の提示をお願いします」

「許可証……ですか……？」

エステルが首を傾げる。

「ここは帝国直属の施設だ。一般人を簡単に入れるわけにはいかな
い」

「そんなの持ってるの？」

「持ってねえよ、シンクは？」

「残念だが、持っていない。中に知り合いがいるのだが、通してくれないか？」

シンクが前に出て尋ねた。

「正規の訪問手続きをしたなら、許可証が渡っているはずだ。その知り合いとやらからな」

「いや、何も聞いていない。入れないのであれば、呼んできてもらえないか？」

「その知り合いの名は？」

「リタ・モルディオだ」

シンクの言葉に騎士達は驚いた。後ろにいるユーリも驚いていた。

「モ、モルディオだと！？」

騎士達は一度お互いを見合う。

「や、やはり駄目だ。書簡にてやり取りをし、正式に許可証を交付してもらえ」

「ちえ、融通きかないんだから」

カロルの言葉に騎士は武器を構える。カロルはユーリの後ろに隠れた。

「あの、フレンという名の騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「施設に関する一切は機密事項です。些細なことでも教えられませんか」

「フレンが来た目的も？」

「もちろんです」

「……ということは、フレンはここに来たんですね！」

エステルの言葉に騎士は慌てる。

「し、知らん！フレンなんて騎士は……」

「じゃあせめて伝言だけでもお願いできませんか？」

「やめとけ、こいつらに何言っても時間の無駄だって」

そう言つてユーリ達は入り口から離れた。

「冷静に行こうぜ」

「でも、中にはフレンが……」

「諦めちゃっていいの？」

「絶対に諦めません！今度こそフレンに会つんです」

「オレはモルディオのやつから魔導器取り返して、ついでにぶん殴

ってやる」

「ユーリ…もしそのようなことをしたら、お前を斬る」

シンクはそう言いながら、閻魔刀に手をかける。

「わかったよ。んで、シンク、他の出入り口知ってるか？」

「……ついてこい」

ユーリ達はシンクについていった。

*

ユーリ達はシンクの案内で違う道の扉についた。

ユーリは扉に手をかけたが、開かない。

「都合よく開いちゃいないか」

「壁を越えて、中から開けるしかないですね」

「早くも最終手段か…」

「フレンが来るのを待ちましょう」

「フレンは出てきたとしても、モルディオは出てこないだろ」

「それに、待っていたら日が暮れてしまうぞ」

ユーリ、シンク、エステルが話をしていると、カロルが扉の前で鍵をいじっていた。

「よし、開いたよ」

「え？だ、だめです！そんなドロボウみたいなこと！」

「……おまえのいるギルドって魔物狩るのが仕事だよな？盗賊ギルドも兼ねてんのか？」

「え、あ、うん……。まあ、ボクぐらいだよ。こんなことまでやるのは」

「それもそうだな。もし本当だったら魔狩りの剣の品格が疑われる」

「んじゃ、行くか」

そう言っただけでユーリとシンクは中に入ろうとした。

「ほんとに、だめですって！フレンを待ちましよう」

「フレンが出てくる偶然に期待できるほどオレ、我慢強くないんだよ」

「右に同じだ」

「……………わ、わかりました！わたしも行きます！」

エステルは渋々了承し、中に入った。
中にはローブを着た人間がいっぱいいた。

「なんかモルディオみたいなのかいっぱいだな」

「まあ、この人間は研究ばかりしかしないからな」

エステルは近くにいた男性に話かけた。

「あの、少しお時間よろしいですか？」

「なんだよ？」

「フレン・シーフォという名の騎士が訪ねてきませんでしたか？」

「フレン？ああ、あれか、遺跡荒らしを捕まえるとか言ってた……………」

「今、どこに！？」

「さあ、研究に忙しくてそれどころじゃないからね」

「そ、そうですか。……………」ごめんなさい」

「じゃあ、失礼するよ」

そう言っただけで男は立ち去った。

「さて、シンク、モルディオはどこにいるんだ？」

「なぜ俺に聞く？」

「おまえ、帝都の牢屋で言っただろ？モルディオとは知り合いだ
って」

「そういえば言ってたな。奥の小屋に確かいるはずだ。ついてこい」
シンクの案内でモルディオの小屋に向かった。

*

「ここだ」

「『絶対、入るな。モルディオ』。間違いないな」

ユーリはドアを開けようとしたが鍵がかかっていて開かない。
次に扉を叩いた。

「普通はノックが先ですよ……」

「いないみたいだね。どうする？」

「それはないな。あいつは年中小屋にこもっているからな」

「なら、ボクの出番だね」

「え……？出番って……」

再びカロルは鍵をいじり始めた。

「それもだめですって！」

エステルが止めるが、すでに鍵が開けられた。

「ま、ちよろいもんだね」

ユーリ、シンクと中に入っていた。

「待つて！ボクも行くよ」

「あ、待つてください！もう、どうしてこつ……」

カロルとエステルも中に入った。

中には本が沢山積まれていた。

エステルは玄関で立っていて、ユーリとカロルは周りを見ていた。すると、ラピードが突然反応する。

すると、ムクツと本の山からロープを纏った人が現れた。

「ぎゃああああゝゝっ！あう、あう、あうあうあう」

カロルは驚いてユーリの後ろに隠れる。

「……うるさい……」

ローブ姿の人物はいきなり魔術の詠唱を始める。
ユーリはカロルを置いてその場を離れる。

「え？あれ、ちょっと！」

「ドロボウは……」

「うわわわっ、待ってえっ！」

「ぶっ飛べ！」

ローブ姿の人物はファイアボールをカロル目掛けて放った。

「ぎゃああああああっっ！！」

爆発が起きた。

ローブ姿の人物はフードが外れて、少女の顔が見えた。

「久しぶりだな、リタ」

シンクカロルの前に現れ、少女に声をかけた。

「え……？」

少女、リタは驚いた顔をした。

「な、な、何でシンクがここにいるのよ……！？」

「それは……戻ってきた」

シンクの言葉に、リタは顔を俯きながらプルプルと震えた。

「三年も……三年も勝手にどっか行つて……この……」

「え？リタ？」

リタは再び魔術の詠唱を始めた。

「バカシンクーーーー！！！！」

「のわっ！！」

「何でボクもおおおお！！」

リタはシンクに向かってファイアボールを放った。カロールもそれに巻き込まれた。

「げげげほ。ひどい……」

「ごほっ、ごほっ！やりすぎだリタ……」

カロールとシンクは咳き込みながらリタに言った。

「こんだけやれりゃあ、帝都で会ったときも逃げる必要なかったのにな」

ユーリはリタの背後に回り、刀を抜いた。

「はあ？逃げるって何よ。何で、あたしが逃げなきゃならないのよ」

「リタ、その事に関してだが……」

シンクはリタに近寄り、今までの経緯をリタに話した。

「ふうん。つまりあたしの名を語った偽物が、帝都の下町で水道魔導器の魔核を盗み、それを追ってきたこいつらと、あんたは一緒に来たと？」

「そういうことだな」

話している二人の間にエステルが入り、リタに会釈した。

「な、なによ、あんた？」

「わたし、エステリーゼと言います。突然、お邪魔してごめんなさい！……ほら、ユーリとカロールも」

「う、ごめんなさい」

カロールは謝った。

「んで？おまえがモルディオなんだろう？」

「確かにあたしはモルディオよ。リタ・モルディオ」

「で？実際のところどうなんだ？」

「だから、そんなの知ら……あ、その手があるか……ついて来て」

「はあ？おまえ、意味わかんねえって、まだ話が……」

「ユーリ、ここはリタに従った方がいい」

「そうよ。シャイコス遺跡に盗賊団が現れたって話、せっかく思い出したんだから」

「盗賊団？それ本当かよ？」

ユーリはリタをまだ疑っている。

「協力要請に来た騎士から聞いた話よ。間違いないでしょ」

リタは小屋の奥に行った。

「騎士ってフレンのことでしょうか？」

「だろうな。あいつフラれたんだ」

「そういえば、外の人も遺跡荒らしがどうか言ってたよね？」

「ということは、その盗賊団が魔核を盗んだ犯人と考えるべきだな」

「さあなあ……」

ユーリ達が小声で話していると、リタがロープを脱ぎ捨てた姿でやってきた。

「相談終わった？じゃあ行こう」

「とか言って、出し抜いて逃げるなよ」

「ユーリ、リタはそんなことはしない」

「ユーリ、ここは行ってみましょう。フレンもいるみたいですし」

「捕まる、逃げる、ついてくる、どうすんのかさっさと決めなさい」

「わかった。行つてやるよ」

「シャイコス遺跡は街を出てさらに東よ」

こうしてユーリ達は、リタも加わり、盗賊団がいるというシャイコス遺跡に向かうことになった。

「シャイコス遺跡か……なつかしいな」

シンクは思い出したように言った。

「あ、そういえばそうね。あん時は……!？」

リタはハツと思い出した。

三年前、シャイコス遺跡でシンクに抱き締められたことを。

リタの顔は次第に赤くなった。

「どうした、リタ？」

「な、な、な、なんでもないわよ!！」

「「「「「?」「」「」」」」」

シンクだけでなく、ユーリ達も首を傾げた。

*

「シャイコス遺跡」

「ここがシャイコス遺跡よ」

「騎士団の方々、いませんね」

シンクがシャイコス遺跡の入り口の近くに、無数の足跡を見つけた。

「この足跡、まだ新しいな。数もかなりあるな」

「騎士団が、盗賊団が、その両方かってとこだろ」

「きっと、フレンの足跡もこの中にあるんでしょうね」

「そうかもな」

「ほら、こっち。早く来て」

シンク、エステル、ユーリが足跡を見て話していると、いつの間にか進んでいるリタがいそぐように告げる。

「モルディオさんは暗がりに連れ込んで、オレらを始末する気だな」

「ユーリ、いい加減にしろ。リタはそんなことしない」

「庇わなくていいわよ、シンク。その方があたし好みだったかもだし」

「不気味な笑みで同調しないでよ」

「な、仲良くしましょうよ」

一行は一通り遺跡を探索するが、

「騎士団も盗賊団もいねえな」

「もつと奥の方でしょうか？」

「奥って言うてもな」

「誰かいるように見えないよね」

「リタ、まさか地下の情報がもれてるんじゃないか？」

「地下？」

「この遺跡には地下の入り口があるの。まだ一部の魔導士にしか知らされてないはずなのに……」

「それをオレらに教えていいのかよ？」

「しょうがないだろ。リタの潔白を証明するためだ。いいよな？」

「仕方ないわね」

「身の潔白ねえ……」

リタとシンクは、遺跡にあった石像の横に移動して地面を見ていた。

「地面にこすれた跡があるね」

「発掘の終わった地下の遺跡くらい盗賊団にあげてめよかったけど来て正解ね」

「なら、早く追いかけないと。これを動かせばいいんでしょう？」

カロルはそう言って石像を両手で押すが、びくともしない。

「はあ、はあ」

そこにユーリとシンクも加わった。

「ほら、行くぞ。もうちつとがんばれよ」

「行くぞ」

「あ、う、うん……」

三人は押しだす。

すると地下に繋がる階段があった。

「じゃ、行くわよ」

＊

階段を降りたそこには、神殿のような遺跡があった。

「遺跡なんて入るの初めてです……」

「そこ、足元滑るから気をつけて……」

先へ進もうとするエステルに、リタは注意する。ユーリはその様子を見ている。

「なに見てんのよ」

「モルディオさんは意外とお優しいなあと思ってね」

「はぁ……やっぱり面倒を引きつれてきた気がする。別に一人でも問題なかったのよね……」

「リタはいつも、一人でこの遺跡の調査に来るんですか？」

「そうよ。三年前はかってにどこか行ったバカと一緒に来たこともあるけど」

「……………」

リタはシンクを見ながら答えた。

「罨とか魔物とか、危険なんじゃないありません？」

「ええ、そう、ね……」

リタは俯きながらエステルに答えた。

（なんかこんな会話…シンクともしたっけな…）

リタは思い出していた。

三年前、シンクが言った言葉を。

『そんな悲しいこと言っな……』

初めて自分を心配し、理解してくれたシンクが、突然いなくなったときは悲しみに打ち拉がれていた。

（許して…あげようかな…もちろん、あいつが謝っただけど）

「リタ、どうしたのです？」

「う、うわっ、驚かさないでよ！」

「おまえが返事しなかったからじゃねえか」

ユーリがそう言うと、リタは考え込んでいたのに気づいた。

「……考え事してた、それで、何？」

「先進まねえかってことだよ」

「そ、そうね。行きましょう」

リタは進み、ユーリ達もついていく。

*

ユーリ達は遺跡の最深部まで進んだ。途中、ユーリはリタからソーサリーリングというアイテムをもらっている。

最深部には、巨大な石像があった。

リタは真っ先に石像に近づいた。

「あ、おい！」

「うわ、なにこれ?!これも魔導器？」

「らしいな」

「こんな人形じゃなくて、オレは水道魔導器がほしいな」

「ちょっと、不用意に触らないで！」

リタはユーリに注意すると石像を調べ始めた。

「この子を調べれば、念願の自立術式を……あれ?うそ!この子も、魔核がないなんて!」

すると、ラピードが人の気配に気付く。

そこを見ると、そこにはローブを纏った人物が階上にいた。

「リタ、おまえの友達がいるぜ」

リタはユーリに言われると、ローブの人物に言った。

「ちょっと！あなた、誰よ？」

「わ、私はアスピオの魔導器研究員だ！おまえたちこそ何者だ！ここは立ち入り禁止だぞ！」

「違うな。本当にアスピオの人間なら、ここにいるリタ・モルデイオを知らないはずがない」

シンクがローブの人物に言った。

シンクの言葉にユーリ達は武器を構えた。

ローブの人物は人型魔導器に近づいた。

「くっ！邪魔の多い仕事だ。騎士といい、こいつらといい！」

そう言うときローブの人物は人型魔導器に魔核をはめ込んだ。

人型魔導器、ゴライアースは青い光を放ちながら動き出した。

「うつわーっ、動いた！」

ゴライアースは近くにいたリタを右腕で風ぎ払った。

リタは壁に叩きつけられた。

「「リタ！」」

シンクとエステルの声が重なる。

「エステル、俺達が引き付ける！その間にリタを！」

「わかりました！」

エステルはリタのところへ向かった。

ユーリ、シンク、カロール、ラピードはゴライアースの攻撃を避けながら引き付けている。

「ちょっと！サボってないで手伝って！」

カロールはエステルとリタに言った。

「あゝ、もうしょうがないわね！」

リタが目覚め、ローブの人物は逃げようとしていた。

「あたし、あのバカ追うから！ここはあんたらに任せた！」

「任せたって、行けねえぞ！？」

「……ああ！あのバカのせいで……！」

リタは舌打ちをしながら魔術の詠唱を始める。

「こいつをやるしかないか！」

「速攻ブツ倒して、あのバカを追うわよ！」

リタは自分の武器、サツシュを取出し、シンクは閻魔刀を抜く。

「来るぞ！」

シンクが言うと、ゴライアースは暴れだした。

「こんなのが動くんなんて……」

「あんたら、気をつけて！相手は加減知らないんだから！」

「おまえも気をつける、リタ！」

「わ、わかってるわよ！」

ゴライアースは両腕を地面に叩きつける。

シンクとカロルは、うまく懐に入り込みかわす。

「風牙一閃！」

「爆砕ロック！」

シンクとカロルはゴライアースの足に攻撃を仕掛ける。ゴライアースは仰け反る。

「ファイアボール！」

「スターストローク！」

「蒼破刃！」

そこにユーリ、エステル、リタの攻撃が当たり、ゴライアースは力尽きたように倒れた。

リタはゴライアースに駆け寄る。

「あとは動力を完全に絶てば……ゴメンね……」

リタはゴライアースに謝りながら、魔核を取り出した。
ゴライアースは完全に動きを止めた。

ユーリ達はさっきの男を追う。

「あんたも早く！」

「でも、フレンは……」

「あんな怪しい奴がウロウロしてるところに、騎士団なんていねえ
って」

「じゃあ、もうフレンは……」

「恐らく、もうここにはいないだろう、行こう！」

ユーリ達は歩き出す。

「あの子を調べたら、自立術式が解析できたのに……」

リタは残念な表情で言った。

「そのためにボクらを戦わせたの？」

「当たり前でしょ」

「極悪人だよ！」

「ドロボウ探しのついでに手伝ってもらっただけよ」

「口じゃなく足使えよ!!」

ユーリは怒鳴りながら先へ進んだ。

*

ユーリ達は先ほど逃げたローブの男を追った。

「あつ、いたよ！」

カロールが言った方向を見ると、ローブの男がオタオタやゲコゲコに襲われていた。

「疾走居合！」

「ガウッ！」

シンクとラピードがゲコゲコ達を蹴散らした。

「魔核盗んで歩くなんてどうしてやろうかしら……」

「ひい！やめてくれ！や、やめて、もう、やめて！俺は頼まれただけだ……。魔導器の魔核を持ってくれば、それなりの報酬をやるって」

「おまえ、帝都でも魔核盗んだよな？」

「帝都？お、俺じゃねえ！」

「ということは、他に仲間がいるということだな？」

「あ、ああ！デ、デデッキって野郎だ！」

「そいつがリタの偽物が……」

「そいつはどこ行っただ？」

「今頃、依頼人に金をもらいに行ってるはずだ」

「依頼人だと……どこのどいつだ？」

ユーリはローブの男を睨みながら尋ねた。

「ト、トリム港にいるっただけで、詳しいことはしらねえよ。顔の右に傷のある、隻眼でバカに体格のいい大男だ」

「そいつが魔核を集めているということか……」

「ソーサリーリングもどこかで盗んだのね」

「ぬ、盗んでいねえ！仕事の役に立つって依頼人に渡されたんだ！
」

「うそね。コソ泥の親玉なんかに手に入れられるものじゃないわ」

「ほ、本当だ！信じてくれよ！」

「なんか話が大掛かりだし、すごい黒幕でもいるんじゃない？」

「カロルのいう通りだな。これはただのコソ泥集団には大掛かりすぎる」

「騎士も魔物もやり過ぎて奥まで行つたのに！ついてねえ、ついてねえよっ！」

「騎士？やはりフレンが来てたんですね」

「ああ、そんな名前のやつだ！くそー！あの若造め！」

「……………うつさい！」

地団駄を踏んでいる男にしびれを切らし、リタはサッシュを男に叩きつけた。

男は気絶して倒れた。

「ちょ、リタ、気絶しちゃったよ……………どうすんの？」

「後で街の警備に頼んで拾わせるわよ」

「それじゃあ、アスピオに戻るか」

ユーリ達は男を置いて、アスピオに戻った。

＊

一行はアスピオに到着した。

「……肝心のフレンはいませんでしたね」

「その騎士、何者なの？」

「ユーリの友達です」

「ふうん、あんたの友達ね。それは苦労するわ」

リタはジト目でユーリを見た。

「なんだよ？」

「別に。で、なんでそいつがこの街にいるの？」

「ハルルの結界魔導器を直せる魔導士を探して来たらしい」

「ああ……あの青臭いのね……あたしのところにも来たわ」

「フレン、元気そうでした？」

「元気だったんじゃない？」

「うっわ、適当……」

「騎士の要請なら他の魔導士が動くだろうしもうハルルに戻ったんじゃない？」

「……そんな……」

エステルは残念そうな表情を浮かべる。

「で？疑いは晴れた？」

「帝都の魔核ドロボウも、デデッキという奴だ。リタはそんなことをする奴じゃない」

「私もそう思います」

「思うだけじゃ、やってない証明にはならねえな」

「ユーリ……貴様、いい加減に……！」

シンクはユーリの胸元をつかむ。

「いいわよ、かばわなくて。けど、本当にやってないから」

「ま、おまえはドロボウよりも研究の方がお似合いだもんな」

ユーリはシンクの腕を払い、歩き出す。

「ユーリは素直じゃないんです」

「……変なやつ。警備に連絡してくるから、先にあたしの研究所戻ってて。それと、シンク、これ」

リタはシンクに通行証を渡した。

「いい？あたしの許可なくどっか行ったら許さないからね」

「わかつている」

*

ユーリ達はリタの研究所でリタを待っていた。

ユーリとラピードは床で寝ていて、カロルは座り込んでいて、エステルはそわそわしていて、シンクは壁にもたれていた。

「フレンが気になるなら黙って出て行くか？」

「あ、いえ、リタにもちゃんと挨拶しないと……」

「なら、大人しくしている」

「ユーリはこのあと、どうするの？」

「魔核ドロボウの黒幕のここに行ってみっかな。デデッキってやつも同じとこ行っただけだし」

「だったら、ノール港まで一直線だね！」

「トリム港って言ってなかったか？」

「知らないのか、ユーリ？ノール港とトリム港は繋がっているんだ。カプワ・ノールのノール港の隣にカプワ・トリムのトリム港があるんだ。途中にエフミドの丘がある。ハルルの街から西に進めばすぐだ」

シンクはユーリに説明した。

「わたしはハルルに戻ります。フレンを追わないと」

「……じゃ、オレも一旦、ハルルの街へ戻るか。シンクはどうするんだ？」

「……俺はここに残る。元々目的は、ここに戻るためだったからな」

「そうか。じゃあここでさよならだな」

そこでドアが開く音がした。
リタが戻ってきたのだ。

「待つてるとは言ったけど……どんだけくつろいでんのよ」

「あ、おかえりなさい。ドロボウの方はどうなりました？」

「さあ、今ごろ牢屋の中でひひ泣いてんじゃない？」

「疑って悪かった」

ユーリは立ち上がり、リタに軽く謝罪した。

「軽い謝罪ね。ま、いいけどね、こっちも収穫あったから」

「んじゃ、世話かけたな」

「なに？もう行くの？」

「ユーリ達はハルルに行く。急ぎの用があるからな」

「あんたは？」

「ここに残る」

「えっ！？」

「元々はここに戻るためだったからな。おまえにも心配かけたからな」

「シンク……」

リタは自然と嬉しそうな表情になった。

「んじゃ、そういつことで」

「リタ、お世話になりました」

ユーリ達はそう言って研究所を出た。
残ったのは、リタとシンクだった。

リタは誰もいないと理解すると、シンクに抱きついた。

「リタ？」

「……心配……したんだから……この、バカシンク……」

リタは泣きながらシンクの背中に抱きついている。

「すまない、リタ」

「……でも、許してあげる」

「……ありがとう」

リタはシンクから離れると、涙を拭った。

「それでどうする？」

「え？」

「行きたいんじゃないのか？ エステル達と」

「ま、まあね。でも、あんたはいいの？」

「俺はリタについていくさ」

シンクの言葉に、リタは少し考え込む。

「そうね。じゃあ行こう」

「ああ」

シンクとリタはユーリ達を追った。

*

ユーリ達は広場から出口に向かおうとしていた。
そこでリタとシンクがやってきた。

「見送りならここでいいぜ」

「そうじゃないわ。あたし達も行く」

「え、な、なに言ってるの？」

「まさか勝手に帰るなってこういうことか？」

「うん」

「うんって、そんな簡単に！」

「いいのかよ？シンクも」

「俺はリタが行くならついていくさ」

「あたしはハルルの結界魔導器を見ておきたいのよ。壊れたままじやまずいでしょ」

リタが思いついたように言った。

「それなら、ボクたちで直したよ」

「はあ？直したってあんたらが？素人がどうやって？」

「よみがえらせたんだよ。バーンってエステ……」

「素人も、侮れないもんだぜ」

カロルの言葉を遮りユーリが言った。

「ふうん、ますます心配。本当に直ってるか、確かめにいかないと。っていうかシンク、知ってるなら教えなさいよ」

「すまない。ユーリ、いいか？」

「わかったよ。勝手にしてくれ」

ユーリが呆れて答えると、エステルはリタに近づいた。

「な、なに！？」

「わたし、同年代の友達、はじめてなんです！」

「あ、あんた、友達って……」

「よろしく願います」

「え、ええ……」

「よかったな、リタ。友達が出来て」

「か、からかうな〜！」

こうして、シンクは再び加わり、リタが新しくメンバーに加わった。

学術都市アスピオ 再会する二人（後書き）

次回はハルルからエフミドの丘までの話にします。

お楽しみに！

感想もお願いします。

ハルル〜エフミドの丘 それぞれの見てる世界（前書き）

今回はハルルからエフミドの丘までです。

それと今さらですが、この小説はPSS版をモデルにしています。

ハルル〜エフミドの丘 それぞれの見てる世界

ユーリ達はリタも加えて、ハルルの街に戻った。
相変わらずハルルの樹は満開だった。

「げえ、なにこれ、もう満開の季節だっけ？」

リタはハルルの樹を見て、驚きの声を上げる。

「へへ〜ん、だから言ったじゃん。僕らでよみがえらせたって」

自慢気に言うカロルに、リタはカロルの頭を一発叩いた。そして、
樹の方に走りだした。

「おお、皆さん、お戻りですか。騎士様のおっしゃったとおりだ」

家から長の声がし、ユーリ達は長に近づいた。

「あの……フレンは？」

「残念でしたな、入れ違いでして……」

「え〜、また〜」

「結界が直っていたことには大変驚かれました」

「あの……どこに向かったか、わかりませんか？」

「いえ……私には何も……ただ、もしもの時はと手紙をお預かりし

ています」

長はそう言うと、ユーリに手紙を渡し、一礼し、戻っていった。中を開けると、中には手紙と一緒にユーリとシンの似顔絵の入った手配書が入っていた。

「え？こ、これ手配書！？ってな、なんで？」

「ちょっと悪さが過ぎたかな」

「い、いったいどんな悪行を重ねてきたんだよ！」

「というより、なぜ俺もだ？しかもユーリと同じ5000ガルド…」

…」

「これって……わたしのせい……」

「こりゃ、ないだろ。たった5000ガルドって」

「脱獄にしては高すぎだよ！他にもなんかしたんじゃない？」

「それで、手紙にはなんて？」

ユーリはエステルに手紙を渡した。

「『僕はノール港に行く。早く追いついてこい』」

「『早く追いついてこい』ね。ったく、余裕だな」

「それから、暗殺者には気をつけるようにと書かれています」

「そいつ、狙われているのに気づいていたんだな」

「なんか、しっかりした人だね」

「身の危険ってやつには気付いてるみたいだけど、この先、どうする？」

「そうですね……」

「オレはノール港に行くから、伝言あるなら伝えてもいい」

「それは……でも……」

エステルは口籠もる。

「ま、どうするか考えときな。リタが面倒起こしてないかちよいと見てくる」

ユーリはエステル達と別れ、リタのいるハルルの樹に向かった。

*

「なあ、カロル。そろそろその武器、どうにかしないか？」

シンクはカロルの持っている武器、カロリアンハンマーを見て言っ

た。

「え？だ、大丈夫だよ！これくらいハンデ、ハンデ！」

「見栄を張るな。それに強い武器の方がカッコいいと思うぞ」

「え、そう？しょうがないな。シンクがそう言うなら……」

「なら、よろず屋に合成してもらおう」

「あ、じゃあ、わたしはここで待ってます」

「わかった。じゃあ、またあとでな」

シンクとカロルはエステルと別れ、よろず屋に向かった。

「いらっしやい。何か御用かい？」

「この剣を直してもらいたい」

「……これなら、素材さえあれば直せるよ」

「何がいるんだ？」

「バジリスクのうること大きなハサミがあれば一緒に合成できるよ」

「……どっちも持っていないよ？どうする、シンク？」

「大丈夫だ。俺が持つてる」

そう言ってシンクはバジリスクのうること大きなハサミを渡した。

「あいよ。ちょっと待ってな」

そう言って店主は奥に行った。

「シンク、どうしたの？あんな素材」

「旅に出ていたときに魔物と戦っていたら、普通に手に入った」

「へ、へえ……そうなんだ」

そう話していると、店主が完成した剣、カロリアンソードを持ってやってきた。

「はいよ。待たせたな。完成だよ」

「あれ？前よりいい感じ？」

カロルはカロリアンソードを振りながら感想を言った。

「よかったな」

「うん、ありがとうシンク！」

「じゃあ、エステルのところに行くか」

*

シンクとカロールがエステルのところに行くと、そこにはエステルの周りにルブラン、アデコール、ボツコスがいた。シンク達の後ろからユーリ、ラピード、リタがやってきた。

「ささ、今のうちに、エステリーゼ様は我らのもとに」

「帝都まで丁重にお送りするのであゝる」

「あとはユーリとあの男をとっ捕まえればいいのだ」

ルブラン達は歩いてきたユーリ達に気付いた。

「ここで会ったが百年目、ユーリ・ローウェル、名無しの男！そこになおゝれえゝ！」

「今回はバカにしつこいな」

「昔からのよしみとはいえ、今日こそは容赦せんぞ！」

「ユーリとシンクは悪くありません。わたしが連れ出すように頼んだのです！」

「ええい、おのれ、ユーリ！エステリーゼ様を脅迫しているのだな！」

「全くエステルの話聞いていないなコイツら」

「貴様も黙っているのだ！」

「違います！これはわたしの意志です！必ず戻りますから、あと少し自由にさせてください」

「それはなりませんぞ！我々とお戻りください！」

「戻れません。わかってください！」

どうあってもエステルを連れ戻そうとするルブランと引き下がないエステル。

「ここは致し方ない。どうせ罪人も捕えるのだから……」

ルブランの言葉に、アデコールとボッコスはユーリ達に剣を向けた。

「これでおまえたちの自由も今日限り！」

「我々騎士団究極の戦闘術、『オーバーリミッツ』でいくのである！」

「勝手に盗むなよ。騎士団のもんじゃないだろ」

「黙れである！」

「オーバーリミッツって……？」

カロルは首を傾げた。その質問にはシンクが答えた。

「戦闘時の能力を上げる技のことだ。見ている」

シンクはそう言って、アデコールに近づき、斬りかかる。

「くはっ……！いててである……不意討ちとは卑怯である……
もうガマンならないのである……！」

「こうやって、相手に攻撃を当てて、闘気を上げていくんだ」

「あ、そうそう、思い出したわ。サンキュ、シンク！ここで溜めた
闘気を一気に放出すれば……」

「ああ、行くぞ！」

シンクとユーリは溜めていた闘気を一気に解放放つ。すると、シンクとユーリから青白いオーラを纏っているように見える。それを見たカロール、エステル、リタは、

「うわっ、ユーリもシンクも凄い……」

「二人とも、すごいです……」

「シンク、すごい……」

ユーリとシンクを見て各々の感想を言っていた。

「これ以上、調子に乗せるな！」

ボッコスは槍を構えて、シンクに突っ込んでいった。

「一気に決める！」

シンクは難なくボツコスの突きをかわす。

「闇裂刃！」

シンクは闇魔刀を抜き、黒い障気を纏った刃でボツコスを斬り付けた。

「まだまだである！」

アデコールも諦めずにユーリに攻撃をするが、ユーリはニバンボシで剣を弾いた。

「牙浪撃！」

ユーリはニバンボシで突き、その後に、アデコールを殴り、吹き飛ばす。

「ええいつ！情けない！」

ルブランは部下を見た後、今度は自分が剣を抜く。その時、リタが魔術の詠唱をしていた。

「ちょ、リタ……」

カロルの言葉も聞かず、リタはルブラン達にファイアボールを放った。

「戻らないって言ってんだから、さっさと消えなさいよ！」

リタはルブラン達に言い放った。

「ユーリっ！シンクっ！あの人たち！」

エステルが言った方向を見ると、そこには赤目達がいた。
赤目達もこちらに気付いた。

「やはり、俺達も狙われているな」

「今度はなにっ！」

「ど、どういうこと？」

赤目達を知らないリタとカロルは首を傾げる。

「話はあとだ！カロル、ノール港つてのはどっちだっけ？」

「え、あ、西だよ、西！エフミドの丘を越えた先に、カプワ・ノールはあるんだ！」

それを聞いたユーリ、ラピードは走りだす。カロルもそれについていく。

エステルは立ち止まった。

「ほら、さっさと行く」

「でも、わたし……」

「……あゝっ！決めなさい、本当にしたいのはどっち？旅を続けるのか、帰るのか」

「……今は、旅を続けます」

「賢明な選択ね、あの手の大人は懇願したってわかってくれないのよ」

「なら、行くぞ！」

シンの言葉に、エステルとリタも走りだした。

「騎士団心得ひとつ！『その剣で市民を護る』そうだったよな？」

ユーリの言葉を聞くと、ルブラン達も赤目達に気づいた。

「その通りッ！！いくぞ騎士の意地をみせよう！！」

そう言ってルブラン達は赤目達と対峙した。

「……ごめんなさい」

エステルは小さく呟き、ハルルの街を後にした。

*

くエフミドの丘く

ルブラン達を退け、ユーリ達はエフミドの丘に着いた。

「ここがエフミドの丘？」

「そう……だけど……」

カロルは空を見上げながら言った。

「おかしいな……結界がなくなってる」

「ここに結界があつたのか？」

「うん、来るときにはあつたよ」

「人の住んでないところに結界張るとは、贅沢な話だな」

「あんたの思いすごしじゃないの？結界の設置場所ならあたしが把握してるはずだけど、知らないわよ」

「リタが知らないだけだよ。最近設置されたって、ナンが言ってたし」

「ナンとは誰だ？」

「え……？え、えっと……ほ、ほら、ギルドの仲間だよ。ボ、ボク、その辺で、情報集めてくる！」

「あたしも、ちょっと見てくる」

そう言ってカロールとリタは行ってしまった。

「まったく、自分勝手な連中だな。迷子になっても知らねえぞ」

「わたしたちも行きましょう」

「そうだな」

ユーリとシンク、エステルもついていく。
そこには壊れた魔導器が横たわっていた。
リタが魔導器に近づこうとする。

「ここらこら、部外者は、立ち入り禁止だよ！」

「帝国魔導器研究所のリタ・モルディオよ。通してもらってから」

「アスピオの魔導士の方でしたか！し、失礼しました！」

男はリタに一礼した。

リタは構わず、魔導器を調べ始めた。

「ああ、勝手をされては困ります！上に話を通すまでは……」

そう言うと男は走っていった。

「あの強引さ、オレもわけてもらいたいね」

「ユーリには必要ないと思うぞ」

「三人とも、聞いて！」

そこにカロールがやってきた。

「それが一瞬だったらしいよ！槍でガツン！魔導器ドカンで！空にピューって飛んでいったね！」

「……誰が何をどうしたって？」

「竜に乗ったやつが！結界魔導器を槍で！壊して飛び去ったんだってさ！」

「人が竜に乗ってか？」

「んなバカな」

「そんな話、初めて聞きました」

「ボクだってそうだけど、見た人がたくさんいるんだよ。『竜使い』が出たって」

「竜使い……ねえ。まだまだ世界は広いな」

『ちょっと放しなさいよ！何すんの！？』

魔導器の方を見ると、リタが騎士に取り押さえられていた。

「なんか騒ぎ起こしてるよ」

「この魔導器の術式は、絶対、おかしい！」

「おかしくなんてありません。あなたの言ってることの方がおかしいんじゃない……」

「あたしを誰だと思ってるのよ!？」

「存じています。噂の天才魔導士でしょ。でも、あなたにだって、知らない術式のひとつくらいありますよ!」

「こんな変な術式の使い方して、魔導器が可哀想でしょ!」

「ちょっと!見てないで捕まえるのを手伝ってください!」

他の騎士もリタを取り押さえようとしている。

「火事だあつ!山火事だつ!」

「なんだ、あのガキ」

「山火事?音も匂いもしないが?」

「こらっ!嘘つき小僧!」

「やばっ……もうばれたの?」

カロルは騎士達に追いかけられた。

そこに騎士の一人がユーリ達の前で止まる。

「おまえたち、さっきのガキと一緒にいたようだが……ん?おまえら、確か手配書の……」

騎士が思い出そうとしてると、シンクはリタのところにいる騎士を鞘で気絶させた。

「行くぞ！」

「え、ち、ちょっと！」

シンクはリタの手をつかみ走る。

「あ、こら待て！」

騎士の一人が止めようとしたが、ラピードがしっぱを叩きつけ倒れる。

「ごめんなさい」

エステルが謝り、ラピードと一緒に林の中に入った。

「おまえら！サボってないで小僧追いかけるの、手伝え！」

「ちっ……！」

*

「ふっ、振り切ったか」

「ああ、そうだな」

「ちょっと、シンク……手、放してよ……」

リタが顔を赤くしながら言った。

見ると、シンクはリタの手をまだ握っていた。

「ああ、すまない」

「はあ……はあ……リタって、もっと考えて行動する人だと思っていました」

「あの結界魔導器、完璧おかしかったから、つい……」

「おかしいって、また厄介事か？」

「厄介事なんてかわいい言葉で、片付けばいいけど」

「どういつことだ？」

『ユーリ・ローウェ……ル！名無しの男……！どこに逃げよったあつ！』

林の向こうからルブランの声が聞こえた。

「呼ばれてるわよ？有名人。っていうかシンクも？」

「ああ……それにしても、本当にしつこいな」

「仕事熱心なのも考えものだな」

『エステリーゼ様！出てきてくださいであゝる！』

今度はエステルを呼ぶアデコールの声が聞こえた。

「あんたら、問題多いわね。いったい、何者よ」

「えと、わたしは……」

『ユーリ、出てこい！』

「そんな話はあとあと」

すると、ラピードが構えだした。

「うわあああつ！待って待って！ボクだよ！」

林からカロルが慌てて出てきた。

「……なんだカロル……びっくりさせないでください……」

「さ、面倒になる前に、さっさとノール港まで行くぞ」

「えと、どちらに向かえば、いいんでしょうか？」

「遠回りにはなるが、この先を行けば出口に行ける」

「これって獣道よね？進めるの？」

「行けるとこまで行くぞ。捕まるのはたくさんだ」

「魔物にも注意が必要ですね」

「結界があれば心配なかったのにね」

「まったくよ。どっかのバカが魔導器壊すからほんとにいい迷惑！」

リタは竜使いに怒りを覚えていた。

カロルも加わり、一行は獣道を歩いた。

*

一行が獣道を魔物を蹴散らしながら進んでいると、

『ガオオオツ！！』

獣の吠える声がした。

「ん……なに？」

「上だ！」

シンクの言葉に、全員は上に注目する。

そこには巨大な狼の魔物、カットウーゾがいた。

「あ、あれ、ハルルの街を襲った魔物だよ！」

「へえ、こいつがね。生き残りつてわけか」

「ほつといたらまたハルルの街を荒らしに行くわね、たぶん」

「でも、今なら結界があります」

「結界の外にいたらいたで、迷惑だ」

「……来るぞ！」

カットウーゾは雄叫びを上げながら降りてきた。両隣には、小型の魔物、カットウーゾ・ピコが一匹ずついる。

「先にあの二匹だ！」

シンクは迷わず、カットウーゾ・ピコに向かって走る。

カットウーゾ・ピコは飛び掛かるが、シンクは難なくかわし、斬り付ける。

『キャウン！』

「紅蓮斬！」

まずは一匹目を倒す。

ラピードはカットウーゾの攻撃をかわしながら、おびき寄せる。

ユーリとカロールは、もう一匹のカットウーゾ・ピコを撃退した。リタは遠距離から援護していた。

「揺らめく焔、猛追、ファイアボール！」

ファイアボールがカットウーゾに当たる。

「どうやら、炎が苦手らしいな」

「だったら、これだ！」

ユーリはそう言って、カットウーゾの後ろに回り込む。

「爆砕陣！」

ユーリは前方に宙返りしつつカットウーゾを斬り付けた。炎の陣のように二本ボシを叩きつけ、カットウーゾは怯んだ。

「今だ、紅蓮斬！」

「ピアズクラスター！」

「ガウッ！」

「ファイアボール！」

「爆砕ロック！」

最後はシンク、エステル、ラピード、リタ、カロルの総攻撃で、カットウーゾは倒れた。

「な、なーんだ、手応えゼロだったね」

「でも、この先もまだ何匹も出てくるかも……」

「だ、大丈夫だって」

「そうならないことを祈ろう」

*

ユーリ達はカットウーゾのいた崖を抜け丘にたどり着いた。

「うわあ……」

「これ……って……」

そこには広大な海が無限に広がっていた。
エステルはその光景に感動している。

「ユーリ、海ですよ、海」

「わかってるって。……風が気持ちいいな」

「ああ、潮風がいいな」

「本で読んだことはありますけど、わたし、本物をこんな間近で見るのは初めてなんです!」

「普通、結界を越えて旅することなんてないもんね。旅が続けば、もっと面白いものが見られるよ。ジャングルとか滝の街とか……」

「旅が続けば……もつといろんなことを知ることができる……」

「そうだな……オレの世界も狭かったんだな」

「あんたにしては珍しく素直な感想ね」

「リタも海初めてなんでしょ？」

カロルがリタに尋ねた。

「まあ、そうだけど」

「そっかあ……研究ばかりの寂しい人生送ってきたんだね」

「あんたに同情されると死にたくなるんだけど」

「この水は世界の海を回って、すべてを見てきてるんですね。この海を通じて、世界中がつながっている……」

「また大げさな。ただか水溜まりのひとつで」

「そう言うリタも、感激していただろ？」

「う……ま、まあね」

「これがあいつの見てる世界か」

「ユーリ?」

ユーリの呟きにエステルは首を傾げた。

「もっと前に、フレンはこの景色を見たんだろうな」

「そうですね。任務で各地を旅してますから」

「追いついて来いなんて、簡単に言ってくれるぜ」

「エフミドの丘を抜ければ、ノール港はもうすぐだよ。追いつける
って」

「そういう意味じゃねえよ」

「え? どういうこと?」

「さあて、ルブランが出てこないうちに行くぞ」

「ノール港はここを出て海沿いの街道を西だよ。もう目の前だから」

「エステル、海はまたいくらでも見える」

「シンクの言うとおりだぜ。旅をしていけば、いくらでもできるさ」

「……………」

「その気になりやな。今だってその結果だろ?」

エステルは海をもう一度見ると、柔らかな表情になる。

「……そうですね」

「ほら、先に行っちゃうよ」

そう言っでカロルは走りだす。

「慌てていると、崖から落ちるぞ」

「うわあああっ！」

言った矢先に落ちそうになるカロル。

「バカっぽい……」

リタはカロルを見てそう呟いた。

「ねえ、シンク」

リタはユーリ達の後ろで隣にいるシンクに聞く。

「ん？なんだ？」

「あんたも、この海前に見たの？」

「ああ。最初に見たとき、こう思った。『リタにもこの景色を見せたい』ってな」

「えっ……？」

リタは顔を赤くした。

「だ、だったら、早く帰ってきなさいよ、バカ……」

「すまない……」

「わ、わかればいいのよ。でも……その……あ、ありがと……」

「ああ……」

「ふたりともー！早く早く、追いつちゃうよー！」

カロルの呼ぶ声が聞こえる。

「今行く！行こう、リタ」

「あ、うん……」

シンクはリタの手を引き、ユーリ達のところに行った。

ユーリ達はエフミドの丘を抜け、目的地のあるカプワ・ノールへと向かった。

ハルル〜エフミドの丘 それぞれの見てる世界（後書き）

次回はカプワ・ノールの話です。

長くなりそうだ……

次回もお楽しみに！

感想もお願いします。

港の街 カプワ・ノール 暗雲渦巻く街（前書き）

今回のカプワ・ノールは前後編に分けます。
今回はリブガ口戦まで書きました。

港の街 カプワ・ノール 暗雲渦巻く街

ユーリ達は目的地のノール港ことカプワ・ノールに着いた。
カプワ・ノールに着いたとたんに、雨が降り出した。

「……なんか急に天気が変わったな」

「びしょびしょになる前に宿を探そうよ」

ユーリ達が歩き出すが、エステルは浮かない表情だった。

「どうした、エステル？」

「あ、その、港街というのはもっと活気のある場所だと思っていた
した……」

「確かに、想像してたのと全然違うな……」

「でも、あんたの探してる魔核ドロボウもいそうな感じよ」

「デデッキってやつが向かったのはトリム港の方だぞ？」

「どっちも似たようなもんでしょ」

「そんなことないよ。ノール港の方が一番厄介なだけだよ」

「確かにな」

「どづいうことですか？」

「ノール港はさあ、帝国の圧力が……」

『金の用意が出来ないときは、おまえらのガキがどうなるかよくわかってるよな？』

別の方向からの声で、カロルの言葉が遮られた。

見ると、そこには、ケガをした男と女性が目の前の役人らしき男と傭兵みたいな男に頭を下げている。

「お役人様！どうか、それだけは！息子だけは……返してください！この数ヶ月のあいだ、天候が悪くて船も出せません。税金を払える状況でないことはお役人様もご存知でしょう？」

「ならば、早くリブガ口って魔物を捕まえてこい」

「そうそう、あいつのツノを売れば一生分の税金納められるぜ。前もそう言っただろう？」

そう言っただけで役人と傭兵は去っていった。

「なに、あの野蛮人」

「今のが、ノール港の厄介の種だ」

「そうなのか？」

「うん、このカプワ・ノールは帝国の威光がものすごく強いんだ。特に最近来た執政官は帝国でも結構な地位らしくてやりたい放題だっただけだよ」

「その部下の役人が横暴な真似をしても、誰も文句が言えないってことね」

「……………」

「そんな……………」

ユーリは少し黙り、エステルは驚きの表情を浮かべた。

見てみると、ケガをした男は立ち上がり、どこかへ行こうとする。それを女性が止めている。

「もうやめて、ティグル！その怪我では……………今度こそあなたが死んじゃう！」

「だからって、俺が行かないとうちの子はどうなるんだ、ケラス！」

ティグルと呼ばれた男はケラスの言葉を無視し、走りですが、ユーリに足を引っ掛けられ、転んでしまう。

「痛ッ……………あんた、何すんだ！」

「あ、悪い、ひっかかったしまった」

ユーリはわざとらしく謝った。

ケラスやエステル達はティグルに駆け寄る。

「もう！ユーリ！……………ごめんなさい。今、治しますから」

エステルはティグルの怪我を治療術で治した。

「あ、あの……私たち、払える治療費が……」

「その前に言うことがあるだろ？」

「え……？」

「まったく、税金と一緒に常識も持っていかれたのか？」

シンクの言葉に、ケラスは立ち上がる。

「……ご、ごめんなさい。ありがとうございます」

「あれ……？ユーリは？」

カロールがあたりを見回す。確かにいつの間にかユーリの姿が見えなくなっていた。

「どこ行っただ、あいつ？」

「先に宿でも見つけにいったんじゃないの？」

シンクとリタが話していると、路地裏のほうで騒がしかった。

「なんでしょう？ちょっとわたし、見てきます」

そう言ってエステルは路地裏へと歩いていった。

「まったく……落ち着いて行動できないのか、あいつは？」

「あはは……」

「それよりもシンク。どういうことよ？」リタは宿の入り口でシンクに尋ねる。

「何をだ？」

「エフミドの丘で騎士の話し声聞いちゃったのよ。あんたとユーリが指名手配されてるって」

「ああ、そのことか……実は……」

シンクはリタに今までの経緯を話した。

「ふーん……なるほどね。よかった……」

「なにがよかったんだ？」

「あんたが間違ったことしなかったってことがよ」

リタが安心したような顔で言った。

そこにエステルが金髪の騎士に引きずられながら、宿屋に入った。その後ユーリがやってきた。

「なんかエステルが引きずられていったけど……」

「ふたりは宿屋の中か？」

「ああ。さっきの騎士がフレンなのか？」

「まあな」

そう言つてユーリは中に入ろうとした。

「今、行つても色々立て込んできと思つたよ」

「長くなりそうだったし、先に街を見て回つたら？」

「……そうだなあ」

「それなら俺も回る」

ユーリとシンクは街を見て回つた。

*

ユーリとシンクはやけに大きな屋敷を見ていた。

そこに入り口へと歩く海賊帽子をかぶつた少女の姿があつた。

おでんをくわえながら、入り口に入ろうとするが、入り口にいた傭兵らしき男に襟を掴まれる。

「あつ」

「何入ろうとしてんだ、このガキが」

「まあまあ、これでも食って落ち着け」

少女は男におでんを差し出す。

「いらねえよ。ガキが来るところじゃねえんだ、ここは」

そう言つて男は少女を投げた。

その先にいたユーリが少女を受け止める。

「おつと、つと……」

「むむ……」

「子ども一人にずいぶん乱暴だな」

「なんだ、おまえらは。そのガキの親父が何かか？」

「オレ達がこんな大きな子どもの親に見えるつか？嘘だろ」

「再チャレンジなのじゃ」

そう言つて少女は入り口に向かってダッシュするが、男が剣を突き付け、直前で止まる。

「あつ」

「おいおい。丸腰の子ども相手に武器向けんのか」

「ガキにこれが大人のルールだつてことを教えてやるだけだよ」

「やめておけ……」

「えいつ！」

少女は足元に煙玉を投げた。周りは黄色い煙に覆われ、視界が邪魔される。

「うわっ……」

「ぬっ……」

「な、何しやがる……！」

「うつぷ……や、やりやがった……」

男達は煙を払おうとしている。

そのすきに逃げようとする少女の手をユーリが掴む。

「おいおい、ここまでやつといて逃げる気か？」

「美少女の手を掴むのには、それなりの覚悟が必要なのじゃ」

「自分で美少女って言うのか……」

「どんな覚悟か、教えてもらおうじゃねえか」

「残念なのじゃ。今はその時ではない」

「なんだって……？」

「さらばじゃ」

その直後、煙が濃くなった。
そして煙が晴れた。

「てめえ……待てっ……！」

男の一人が屋敷に走っていった。

「ちっ、なんだってんだあのガキ。おい、お前らもさっさと消えるんだな」

「……ったく、やってくれるぜ」

「まっただな」

ユーリの手にはあの少女ではなく、少女に似た人形だった。

「そろそろエステルとフレンの話も終わってる頃だろうな」

「ああ。宿屋に戻ろう」

ユーリとシンクは屋敷を後にした。

*

ユーリとシンクはリタ、カロール、ラピードと合流し、宿屋の中に入った。

そして、宿の一室に入ると、エステルとフレンが向かい合って話していた。

「用事は済んだのか？」

ユーリの言葉にエステルは頷いた。

「そっちのヒミツのお話も？」

「ここまでの事情は聞いた。そっちの彼、シンクのこと、賞金首になった理由もね。まずは礼を言うておく。彼女を守ってくれてありがとう」

「あ、わたしからもありがとうございました」

エステルはユーリとシンクに頭を下げた。

「なに、魔核ドロボウ探すついでだよ」

「俺は巻き込まれたのだから」

「問題はそっちの方だ」

「ん？」

「どんな事情があれ、公務の妨害、脱獄、不法侵入を帝国の法は認めていない」

「う、ごめんなさい。全部話してしまいました」

「しかたねえなあ、やったことは本当だし」

「まあ、確かにな」

「では、それ相応の処罰を受けてもらうが、いいね？」

「フレン！？」

「別に構わねえけど、ちょっと待ってくんない？」

「下町の魔核を取り戻すのが先決と言いたいのだろ？」

ユーリ達が話していると、部屋のドアが開き、一人の女性騎士と一人の小柄なアスピオの服を着た少年が入ってきた。

「フレン様、情報が……なぜ、リタがいるんですか！！」

少年がリタを見て言った。

「あなた、帝国の協力要請を断ったそうじゃないですか？帝国直属の魔導士が、義務づけられている仕事を放棄していいんですか？」

「誰だ？」

シンクはリタに尋ねる。

「……だれだっけ？」

聞かれたリタも首を傾げた。

「……ふん、いいですけどね。僕もあなたになんて全然まったく興味なんてありませんし」

「……負けず嫌いなんだな」

「黙ってもらえますか？」

呟いたシンクに少年は睨む。

「紹介する。僕……私の部下のソディアだ」

フレンが言つと女性騎士、ソディアは一礼した。

「こっちはアスピオの研究所で同行を頼んだウィチル。彼は私の……」

「こいつら……！賞金首のっ！！」

ユーリとシンクを見ると、ソディアは剣をユーリとシンクに向ける。

「ソディア！待て……！彼は私の友人だ。そちらの彼はリタ・モルディオの知り合いだ」

「なっ！賞金首ですよ！」

「事情は今、確認した。確かに軽い罪は犯したが、手配書を出されたのは濡れ衣だ。後日、帝都に連れ帰り私が申し開きをする。その上で、彼らには受けるべき罰は受けてもらう」

フレンの言葉にソディアは剣を収めた。

「し……失礼しました。ウィチル、報告を」

ウィチルはフレンに近づいた。

「もう用事は終わったんでしょ」

「この連続した雨や暴風の原因は、やはり魔導器のせいだと思えます。季節柄、荒れやすい時期ですが、船を出すたびに悪化するのは説明が付きません」

「ラゴウ執政官の屋敷内に、それらしい魔導器が運びこまれたとの証言もあります」

「天候を制御できるような魔導器なんて聞いたことないわ。そんなもの発掘されてないし……いえ、下町の水道魔導器に遺跡の盗掘……まさか……」

フレン達の話聞いて、リタは考え込む。

「執政官様が魔導器使って、天候を自由にしてるってわけか」

「……ええ、あくまで可能性ですが。その悪天候を理由に港を封鎖し、出航する船があれば、法令違反で攻撃を受けたとか」

「それでは、カプワ・トリムに行けないな……」

「執政官の悪いうわさはそれだけではない。リブガロという魔物を

野に放ち、税金を払えない住人たちと戦わせてあそんでいるんだ。リブガ口を捕まえてくれば、税金を免除すると言ってね」

「そんな、ひどい……」

フレンの話を聞いて、エステルは絶句した。

「入り口の夫婦のケガって、そういうからくりなんだ」

「やりたい放題だな」

「そっいえば子どもが……」

「子どもがどうかしたのかい？」

「なんでもねえよ。色々ありすぎて疲れたし、オレらこのまま宿屋で休ませてもらうわ」

そう言っただけでユーリ達は部屋を出た。

「それと……例の『探し物』の件ですが……」

（……探し物？）

出る前にソディアの話を聞いたエステルは首を傾げながら部屋を出た。

ユーリ達は宿屋で休まず、外に出た。

「これからどうする？」

「わたし、ラゴウ執政官に会いに行つてきます」

「え？ボクらなんかが行つても門前払いだよ。いくらエステルが貴族の人でも無駄だつて」

「とは言つても、港が閉鎖されてちゃトリム港に渡れねえしな。デッキリつてコソ泥も、隻眼の大男も、海の向こうにいやがんだ」

「なにか献上品でも出せば、会ってくれるんじゃないか？」

「献上品？何よそれ？」

「リブガロのツノだ。入り口で役人が言つてただろ？『リブガロのツノを売れば一生分の税金納められる』つて」

「なるほどな。そんなに高価なものなら、面ぐらい拝ませてくれるな」

「リブガロつてのを捕まえるつもり？」

リタの言葉にシンクは頷く。

「だったら今がチャンスだよ！雨降ってるし」

「雨がどうかしたんです?」

「リブガロは雨が降ると出てくるんだよ。天気が変わった時にしか活動しない魔物つてのが、時たまいるんだよね」

カロルが説明する。

「よく知ってるな、カロル先生。それで?」

「……それでつて?それだけだよ」

「どこにいるんだって聞いてるんだ」

「さ、さあ……」

「……やっぱりね」

「……とりあえず、街の人に聞いてみよう」

「そうですね」

「あたしも行くわ。天候操れる魔導器なんて興味あるし」

「そんじゃ、まずはリブガロを探しに行くか」

クーリ達はラゴウに会うために、リブガロを探すことにした。

＊

ユーリ達は、街の人の情報で、結界の外にある森にいた。そこに、黄金のタテガミに黄金のツノをした馬に似たフォルムの魔物がいた。

「これがリブガロだよ！」

「……来るぞ！」

リブガロはユーリ達に向かって、鋭いツノをたてながら、突っ込んできた。

ユーリ達は難なくかわす。

「爆砕陣！」

「あどけなき水のたわむれ、シャンパーユ！」

「ピアズクラスター！」

「雷撃ウェーブ！」

「闇裂斬！」

ユーリ達はリブガロに一斉攻撃を放った。リブガロは力なく倒れた。

「さっさと連れて帰ろうよ」

「傷だらけ……………少しかわいそうですね」

「多分、死に物ぐるいの街の連中に何度も襲われたんだろうな」

「街の人が悪いわけじゃ……………」

「わかってるって」

ユーリはそう言ってリブガロから生えていた黄金のツノを折った。

「ユーリ……………」

「高価なのはツノだろ？金の亡者どもにやこれで十分だ」

「あんたが魔物に情けなんてかなり意外なんだけど」

「のんきなこと言ってたら、ほら、起きるよ！」

カロルが言うと、リブガロは立ち上がり、どこかへ走り去っていった。

「あれ、なんで？」

「多分、俺達の意図を理解したんじゃないか？」

「魔物が？まさか？」

「ツノが手に入ったんだからなんだっていいさ」

「それじゃ、さっさと街に戻ろう」

ユーリ達はリブガロのツノを持ってカプワ・ノールに戻った。

港の街 カブワ・ノール 暗雲渦巻く街（後書き）

次回は出来ればザギ戦まで書きたいです。

次回もお楽しみに！

感想もお願いします。

港の街 カプワ・ノール 追い詰める執政官、暗殺者再び（前書き）

今回は後編です！

新たにシンクの新しい技が登場します。

今回結構長くなっています。

港の街 カプワ・ノール 追い詰める執政官、暗殺者再び

ユーリ達はリブガ口のツノを持ってカプワ・ノールに戻ると、入り口ではまたあの夫婦がもめていた。

ティグルの手には剣があった。

恐らくまたリブガ口挑戦しに行こうとしているのだろう。

「待つて！せつかくケガを治してもらったのに！」

ティグルはケラスの説得を聞かずに歩きだす。

そこにユーリが近づいた。

「そんな物騒なもん持つて、どこに行こうってんだ？」

「あなた方には関係ない。好奇心で首を突っ込まれても迷惑だ」

ユーリはティグルの前にリブガ口のツノを投げた。

ティグルはそれを見て目を見開く。

「こ、これは……っ!？」

「あんたの活躍の場奪つて悪かったな。それは、お詫びだ」

「あ、ありがとうございます」

ケラスとティグルは膝を下ろして、ユーリに礼を言った。

「ちょ、ちょっと！あげちゃってもいいの？」

「あれでガキが助かるなら安いもんだろ」

「最初からこうするつもりだったんですね」

「思いつき思いつき」

「少なくともシンクはそのつもりだったみたいよ」

「あのツノ一つであの家族の子どもが助けられるなら、喜んでやるさ」

「でも、それで献上品がなくなっちゃったわよ。どうするの？」

「ま、執政官邸には、別の方法で乗り込めばいいだろ」

「なら、フレンがどうなったか確認に戻りませんか？」

「とくにラゴウの屋敷に入って、解決してるかもだしね」

「だといけど」

「……多分、そううまくいってないと思うぞ」

*

ユーリ達はフレン達のいる宿の部屋を訪ねた。

「相変わらず辛気臭い顔してるな」

「色々考えることが多いんだ。君と違って」

「ふーん……」

「また無茶をして、賞金額を上げて来たんじゃないだろうね」

「お前達、執政官のところに行かなかったのか？」

シンクは話を変えようとフレンに尋ねた。

「行っただ。魔導器研究所から調査執行書を取り寄せてね」

「それで中に入れたのか？」

「いや……執政官にはあっさり拒否された」

「なんで!？」

カロールが驚きの声を上げる。

「魔導器が本当にあると思うなら、正面から乗り込んでみたまえ、と安い挑発までくれましたよ」

「私たちにその権限がないから、馬鹿にしているんだ!」

ソディアは怒りを表しながら握り拳をする。

「でも、そりゃ、そいつの言う通りなんじゃねえの？」

「何だと!？」

ユーリの言葉にソディアは飛び掛かろうとするが、フレンとウィチルに止められた。

「ユーリ、お前どっちの味方なんだ？」

「敵味方の問題じゃねえ。自信があんなら乗り込めよ」

「いや、これは罠だ。ラゴウは騎士団の失態を演出して評議会の権力強化を狙っている。今、下手に踏み込んでも、証拠は隠蔽され、しらを切られるだろう」

「それで他に方法はねえのか？」

「……………」

ユーリの問いにフレンは口籠もる。

「打つ手無し……………みたいだな」

「……………中で騒ぎでも起これば、騎士団の有事特権が優先され、突入できるんですけどね」

「騎士団は有事に際してのみ、有事特権により、あらゆる状況への介入を許される、ですね」

エステルの説明にユーリは何か閃いたようだ。

「なるほど、屋敷に泥棒でも入って、ボヤ騒ぎでも起こればいいんだな」

「ユーリ、しつこいようだけど……」

「無茶するな、だろ？」

ユーリ達はそう言って宿屋を後にした。

*

ユーリ達は執政官邸の前で隠れていた。

「おつきな屋敷だね。評議会のお役人ってそんなに偉いの？」

「評議会は皇帝を政治面で補佐する機関であり、貴族の有力者により構成されている、です」

「言わば、皇帝の代理人ってわけね」

「へえ、そうなんだ」

カロル、エステル、リタの話を聞きながら、シンクはユーリに顔を向ける。

「どうやって入る？」

「裏口はどうです？」

「残念、外壁に囲まれてて、あそこを通らにや入れんのよね」

後ろから違う人物の声がして、全員後ろを振り返ると、そこには見るからにうさんくさいボサボサの髪をした中年の男がいた。

「えっと、失礼ですが、どちら様です？」

「なぐに、そっちのかっこいい兄ちゃん二人とちょっとした仲なのよ。な？」男はユーリとシンクを見て言った。

「「いや、違うから、ほつとけ」」

ユーリとシンクは迷惑顔で言った。

「おいおい、二人してひどいじゃないの。お城の牢屋で仲良くしたじゃない、ユーリ・ローウェル君よお。あと……」

「シンクだ」

「そうそう、シンク君よお」

「ん？名乗った覚えねえぞ」

ユーリの問いに、男は手配書をヒラヒラと見せた。

「ユーリは有名人だからね」

「おいおい、シンクは？」

「シンクは名前知られてないじゃん。で、おじさんの名前は？」

「ん？そうだな……。とりあえずレイヴンで」

「とりあえずって……。どんだけふざけたやつなのよ」

「んじゃ、レイヴンさん、達者で暮らせよ」

「そして人知れず朽ち果てろ」

「うわっ……シンク君の方はひどいね……でも、屋敷に入りたいんでしょ？ま、おっさんに任せときなつて」

そう言つてレイヴンは見張りの方に走つていった。

レイヴンが見張りに何かを言っているようで、見張りはこちらに走つてきた。

「な、なんかこつちくるよ？」

レイヴンはこちらを一度見て、屋敷に悠々と入つていった。

「そ、そんなあ……」

「あいつ、バカにして！あたしは誰かに利用されるのが大っ嫌いな
のよ！」

リタは怒りの言葉を口にし、怒りにまかせ、見張りの男達をファイアボールで吹っ飛ばした。

「あゝあゝ、やっちゃった。どうするの？」

「どうするって、そりゃ、行くに決まってるだろ？見張りもいなくなっただし」

「ああ、おっさん見つけたら、とりあえず一発殴ろう」

「同感！行くわよ！」

そしてユーリ達も裏口に向かった。
裏口にはレイヴンがいた。

「よう、また会ったね。無事でなによりだ、んじゃ」

レイヴンはそう言いながら、エレベーターに乗り、上へあがって行く。

「待て、こちら！」

ユーリ達も隣のエレベーターに乗るが、レイヴンの乗ったエレベーターとは違う下へ降りていく。

「あれ？下……」

「あのおっさん、絶対知ってたな」

「まったく……」

エレベーターが止まり、地下らしきところに到着した。

「あゝ、もう！ここからじゃ操作できない仕組みになってる……」

リタはエレベーターが操作できないことに腹を立てている。

エステルは部屋の匂いをかぎ、顔を歪め、口を抑える。

「うつ！？」

「なんか、くさいね……」

「……血とあとはなんだ？何かの腐った臭いだな」

「死臭だ……」

ユーリとシンクの見る先には人間の骨らしきものがあり、近くにはブラックウルフ、ブラックライノ、ブラックバジリスクという黒い魔物がいた。

「魔物を飼う趣味でもあんのかね」

「かもな。リブガ口もいたしな」

「パ……パ、マ……助けて……」

どこかから弱々しい声が聞こえた。

「ちよっ、今度は何！？どうなってんの、ここ！？」

ユーリとエステルはお互い顔を見合って頷く。

「行きましょう！誰かいるみたいです！」

ユーリ達は声のした方向に向かった。

*

先を進むと人の骨らしきものがあちこちに散乱していた。

「うげっ……！」

カロルは小さく悲鳴を上げた。

「えっぐ、えっぐ……パパ……ママ……」

部屋の角を見ると、そこには一人の子どもが泣きながらうつろくまっていた。

ユーリ達はその子に駆け寄る。

「だいじょうぶだよ。何があつたか、話せる？」

エステルが優しく尋ねた。

「こわいおじさんに、つれてこられて……パパとママがぜいきんを

はられないからって……」

子どもは弱々しく話してくれた。

「ねえ、もしかして、この子、さっきの人たちの……」

「ああ、恐らくあの夫婦の子どもだな」

「……なんて、ひどいこと」

「もしかして、この人たちは、ここの魔物に……？」

カロルは周りの骨を見ながら言った。

恐らく、ここにいる魔物たちの餌にされたのだろう。

「これが同じ人間のすることか……！」

シンクは怒りで拳を強く握る。

「パパ……ママ……帰りたいよ……」

「だいじょうぶ。もう、だいじょうぶだからね。お名前は？」

「ポリー……」

ユーリはポリーに駆け寄った。

「ポリー、男だろ、めそめそすんな。すぐに父ちゃんと母ちゃんにはあわせてやるから」

「うん……」

ユーリ達はポリーをつれて、先に進んだ。

*

魔物を倒しながら進んでいくと、鉄格子の部屋に着いた。
そこから、黒い貴族の衣装を着た老人がやってきた。

「はて、これはどうしたことが、おいしい餌が、増えていますね」

男は不適に笑いながら言った。

「あんたがラゴウさん？随分と胸糞悪い趣味をお持ちじゃねえか」

「趣味？ああ、地下室のことですか。これは私のような高雅な者にしか理解できない楽しみなのですよ。評議会の小さな老人どもときたら退屈な駆け引きばかりで、私を楽しませてくれませんかね。その退屈を平民で紛らわすのは私のような選ばれた人間の特権というものでしょう？」

ラゴウはヘラヘラ笑いながら言った。

「まさか、ただそれだけの理由でこんなことを……？」

「救いようのないクズが……！」

エステルは驚きの表情に、シンクは怒りの表情を表していた。

「さて、リブガロを連れ帰ってくるとしますか。これだけ獲物が増えたなら、面白い見せ物になります。ま、それまで生きてれば、ですが」

「リブガロなら探しても無駄だぜ。オレらがやっちまったからな」

「……なんですって？」

ラゴウは驚いた表情でユーリの言葉を聞く。

「聞こえなかったのか？オレらが倒したって言ったんだよ」

「くっ……なんということを……」

ラゴウはリブガロが倒されたことを知り、怒りをあらわにした。

「飼ってるなら、分かるように鈴でもつけときゃよかったんだ」

「まあ、いいでしょう。金さえ積みめば、すぐ手に入ります」

鉄格子越しにエステルがラゴウの前に出た。

「ラゴウ！それでもあなたは帝国に仕える人間ですか！」

ラゴウはエステルを見て、驚いた様子をした。

「むむっ……あなたは……まさか？」

その際にユーリとシンクが蒼破刃と紅蓮斬を鉄格子に放った。

鉄格子は破壊され、その反動でラゴウは後ろに突き飛ばされた。

「き、貴様！ な、なにをするのですか！ 誰か！ この者たちを捕らえなさい！」

ラゴウはそう言い、逃げていった。

「早いところ用事すまさねえと、敵がそろそろ来るぞ？」

ユーリがそう言っていると、リタが魔術の詠唱を始めていた。

「待て、リタ！」

「何よ？ 騎士団が踏み込むための有事が必要なんですよ？」

「まだ早い。証拠を見つけなきゃならない」

「天候を操る魔導器を探すんですね」

エステルの言葉にシンクとユーリは頷いた。

ユーリ達は天候を操る魔導器を探すため、先へ進んだ。

*

敵を倒しながら進むと、そこで意外な人物に出会った。

「いーい眺めなのじゃ……」

部屋の真ん中で布団に巻かれて吊されていた、あの海賊帽子の少女だった。

「誰……?」

「そこで何してんだ?」

ユーリは少女に聞きながら近づいた。

「見ての通り、高見の見物じゃ」

「へえ。オレはてつきり捕まってるのかと思ったよ」

「イヤ、どう見ても……」

「捕まってるんだと思うんですけど……」

「そんなことないぞ」

シンクとエステルの言葉を少女は体を振りながら否定した。

「お……? おまえたち、知ってるのじゃ」

少女はユーリとシンクを見て言った。

「えーと、名前は……ジャックとウィル」

「誰なんです?」

少女の言葉に、エステルは首を傾げながら尋ねる。

「オレはユーリだ。こっちはシンク。おまえ、名前は？」

「パティなのじゃ」

「パティか。さっき屋敷でオレたちと会ったよな？」

ユーリはそう言いながら人形を見せた。

「おお、そうなのじゃ。うちの手のぬくもりを忘れられなくて、追いかけてきたんじゃない」

パティの呑気な言葉に、ユーリ達は呆れた。

ユーリはパティを降ろしてあげた。

「ね、こんなところで何してたの？」

「お宝を探してたのじゃ」

「宝？こんなところに？」

カロルは首を傾げた。

「あのクズ執政官のことだから、そういうのを持っていたても不思議じゃないが……」

「パティは何してる人？」

「冒険家なのじゃ」

パティはきっぱりと答えた。

「と、ともかく、女の子ひとりでこんなところウロウロするのは危ないです」

「そうだね。ボクたちと一緒に行こう」

エステルの提案にカロルは賛成する。

「うちはまだ宝も何も見つけていないのじゃ」

「人のこと言えた義理じゃねえが、おまえ、やってること冒険家っていうより泥棒だぞ」

「ホントに人のこと言えないな」

ユーリの言葉にシンクはジト目でツツコんだ。

「冒険家というのは、常に探求心を持ち、未知に分け入る精神を持つ者のことなのじゃ。だから、泥棒に見えても、これは泥棒ではないのじゃ」

「ふーん……なんでもいいけど。ま、まだ宝探するってんなら、止めないけどな」

「どうする？」

ユーリ達が話していると、パティは再び振り返った。

「たぶん、この屋敷にはもうお宝はないのじゃ」

「一緒に来るってさ」

「なら、行くか」

ユーリ達はパティも連れて、先を進んだ。

*

「侵入者アアアアイ!!」

次の部屋に入った途端、大剣を持った男が三人襲い掛かった。ユーリ達はそれをかわした。

「行くぞ、ラピード!」

「ワンツ!」

シンクの言葉に、ラピードは頷く。

大剣の男がシンクに大剣を振り回すが、シンクはそれを難なくかわす。

「ガウツ!」

ラピードはそのすきに、男の横から素早く屈み、突進する技、
“瞬迅犬”で攻撃する。

「ゲホッ……！」

男は小さく悲鳴を上げる。

シンクはそのすきを見逃さず、懐に潜り込む。

「雷閃牙！」

シンクは閻魔刀を抜き、電撃を纏った刀身で突いた。
男は吹き飛ばされ、倒れた。

「ナイス、ラピード！」

「ウォーン！」

ラピードは頷くように吠えた。

ユーリ達を見ると、近くには同じく倒れた男達がいた。

「こんなやつらがいる所に、おまえ、よく来れるな」

シンクは男達を見ながらパティに言った。

「危険を冒してでも、手に入れる価値のあるお宝なのじゃ」

「それって、どんな宝？」

「アイフリードの隠したお宝なのじゃ」

「ア、アイフリードッ……！」

パティの言葉に、カロルは驚きの声を上げる。

「アイフリードって、あの、大海賊の？」

「有名人なのか？」

ユーリは首を傾げていた。

「し、知らないの？海を荒らし回った大悪党だよ」

「アイフリード……『海精^{セイレーン}の牙』という名の海賊ギルドを率いた首^{ボス}領^ス。移民船を襲い、数百人という民間人を殺害した海賊として騎士団に追われている。その消息は不明だが、既に死んでいるのではと言われている、です」

「ブラックホープ号事件って呼ばれてるんだけど、もうひどかったんだって」

「……ま、そう言われとるの」

エステルとカロルの言葉に、パティは表情を暗くしていた。

「……？どうしました……？」

「なんでもないのじゃ」

パティは見るからに不機嫌そうだった。

「でも、あんたそんなもん手に入れて、どうすんのよ」

「どうする……？ 決まってるのじゃ、大海賊の宝を手にして、冒険家として名を上げるのじゃ」

「危ない目に遭っても、か？」

ユーリの言葉に、パティは振り返る。

「それが冒険家という生き方なのじゃ」

「ふっ……面白いじゃねえか」

ユーリはふつと笑った。

「面白いか？ どうじゃ、うちと一緒にやらんか？」

「性には合いそうだけど、遠慮しとくわ。そんなに暇じゃないんでな」

「ユーリは冷たいのじゃ。サメの肌より冷たいのじゃ」

「サメの肌……？」

「でも、そこが素敵なのじゃ」

「「素敵か……？」」

リタとシンクは声を合わせて言った。

「もしかしてパティって、ユーリのこと……」

「ひとめぼれなのじゃ」

パティは堂々と言った。

「やめといた方がいいと思うけど」

「同感だ」

「ひとめぼれ……」

「……なんでもいいが、さっさと行こう」

シンクは頭を押さえながら言った。

*

先の部屋に行くとそこには巨大な魔導器らしきものが中央にあった。

「この魔導器が例のブツ？」

「らしいな」

リタは階段を上り、魔核の前に立ち、術式を展開し、目にも止まら

ない早さで操作する。

「ストリムにレイトス、ロクラーにフレック……複数の魔導器をツギハギにして組み合わせている……この術式なら大気に干渉して天候操れるけど……こんな無茶な使い方して……！エフミドの丘のといい、あたしよりも進んでるくせに、魔導器に愛情のかけらもない！」

リタは術式を操作しながら、ふつふつと怒りをあらわにしている。

「これで証拠は確認できましたね。リタ、調べるのは後にして……」

「……もうちょっと、もうちょっと調べさせて……」

「あとでフレンにそいつをまわしてもらえばいいだろ？さっさと有事を始めようぜ」

ユーリ達は辺りを見回す。

「……何か壊しているものは」

「よし。なんか知らんが、うちも手伝うのじゃ」

そう言ってパティは海賊銃を構える。

「おまえはおとなしくしている」

「あう？」

パティはユーリに止められた。

カロルは近くの支柱をカロリアンソードで叩く。

「あゝっ!!もう!!」

リタは唸りながらファイアボールを辺りに放った。
流れ弾がカロルに当たった。

「うわぁっ!!いきなり何すんだよ!!」

「こんくらいしてやないと騎士団も来にくいでしょう!!」

「でも、これはちよつと……」

「ああ……やりすぎだ」

「なに、悪人にお灸を据えるにはちょうどいいくらいなのじゃ」

「人の屋敷でなんたる暴挙です!!」

別方向から声がして、そこにはラゴウと数人の傭兵がいた。

「おまえたち、報酬に見合った働きをしてもらいますよ。あの者たちを捕らえなさい。ただし、くれぐれもあの女を殺してはなりません」

ラゴウはエステルを見ながら、傭兵に指示をだした。
ユーリ達も武器を構える。

「まさか、こいつらって、『ブラッドアライアンス紅の絆傭兵団』?」

カロルは傭兵たちを見ながら言った。

リタは未だにファイアボールで屋敷内を攻撃している。

ユーリ達は傭兵たちを蹴散らしている。

「もう、十分だ、引くぞ！」

ユーリはリタに近づいて言った。

「何言ってるの、まだ暴れ足りないわよ！」

「早く逃げないと騎士団と鉢合わせだ。今の内に……」

「まさか、こんなに早く来れるわけ……」

リタが放った所にはフレン達がいた。

「執政官、何事かは存じませんが、事態の対処に協力致します」

フレンが前に出てラゴウに言った。

「フレン！？」

「ほらみる」

「ちっ、仕事熱心な騎士ですね……」

ラゴウが舌打ちをした直後、部屋のガラスを割り何かが入ってきた。それは青い竜のような魔物に白い鎧を着た人間が乗っていた。

「う、うわあっ！あ、あれって、竜使い！？」

カロルが驚きながら言った。

竜使いはウィチルの放つ魔術を避けながら魔導器の近くを通り、通りすぎざまに魔核を自身が持つ槍で傷つけた。魔核は砕け散った。

「ちょっと！！何してくれてんの！魔導器を壊すなんて！」

リタは竜使いに向かって怒鳴った。

「待て、こら！」

リタは竜使いにファイアボールを放つが全てかわされた。竜使いの竜は口から炎を溜めて、それを魔導器に放った。竜使いはその後、窓から飛び去った。

「船の用意を！」

ラゴウはこの隙に逃げようとしていた。

「ちっ、逃がすかつー！」

ユーリ達はラゴウを追って屋敷の外に出た。

「まったく、なんなのよ！あの魔物に乗ってんの！」

「あれが竜使いだよ」

「竜使いなんて勿体ないわ。バカドラで十分よ！あたしの魔導器を壊して！」

リタは竜使いに対する不満を爆発させている。

「おいおい……おまえの魔導器じゃないだろ……」

シンクは呆れながら言った。

「それにしても、どうして魔導器を壊したりするんでしょう？」

「確かに。話ができる相手なら、一度聞いてみたいけどな」

「あんな奴とまともな話、できるわけないでしょ！」

リタの言葉を聞くと、ユーリはポリーとパーティに視線を向ける。

「おまえらとはここでお別れだな」

「ラゴウってわるい人をやっつけに行くんだね」

「ああ、そうだ。お父さんとお母さんのところまで行けるか？」

「だいじょうぶ、ひとりで帰れるよ」

「いい子だな」

シンクはポリーの頭を撫でた。

「おまえももう危ないところに行ったりすんなよ」

「わかったのじゃ」

パティは頷いてポリーと走っていった。

「……あの娘、多分わかってないわね……」

「……エステル、どうしたの？」

「わたし、まだ信じられないです。執政官があんなひどいことをしていたなんて……」

エステルは沈んだ表情で言う。

「エステル、信じられないだろうが、これが現実だ」

「シンク……」

シンクはエステルにいつもより厳しく言った。

「ほら、急がないとラゴウに逃げられちゃうよ！」

カロルの言葉に、ユーリ達は頷き、ラゴウを追った。

*

ラゴウを追いかけると、船が出航しようとしていた。

「あたしはこんなところで何やってんのよ……」

「行くぞ！」

シンクはそう言いながら、リタとエステルを両脇に抱える。

「え、ちょっと！何すんのよ！／＼／」

「シ、シンク！？／＼／」

シンクに掴まれて、顔を赤らめる。

そしてシンクは飛び上がり、船に飛び乗った。

ユーリ達も無事、飛び乗った。リタは近くにあった箱を見て、驚いた。

「これ、魔導器の魔核じゃない！」

「なんでこんなにたくさん魔核だけ？」

「知らないわよ。研究所にだって、こんなに数揃わないってのに」

箱の中には大量の魔導器の魔核が入っていた。

「もしかして、これも魔核ドロボウと関係が？」

「かもな……」

「でも、黒幕は隻眼の大男でしょ？ラゴウとは一致しないよ」

「ということは、黒幕は他にいるということか。リタ、このなかに、水道魔導器の魔核はないか？」

シンクは箱を見ているリタに尋ねた。

「残念だけど、それほど大型の魔核はないわ」

話していると、奥から数人の男たちが姿を現した。

カロールがその男たちを見て、口を開いた。

「やっぱりこいつら、五大ギルドの一つ、『紅の絆傭兵団』だよ」

この男たちはおそらく紅の絆傭兵団の手下だろう。

手下たちはユーリたちに襲い掛かってきたので、ユーリたちは彼らを倒した。

ユーリとカロールが船室の扉の前に立ち、カロールが扉を開けようとした時、

「どきやがれえ！」

「うわあっ！」

扉が勢いよく開き、カロールを突き飛ばした。

中から姿を現したのは隻眼の赤い服を着た大男だった。

「はんっ、ラゴウの腰抜けは、こんなガキ共から逃げてるのか」

「隻眼の大男……あんたか。人使って魔核盗ませてるのは」

ユーリは後ろから二本ボシを大男に突き付けながら聞く。

「そっかも知れねえなあ……」

大男はそう言つて大剣でユーリを攻撃した。

ユーリはそれをかわし、みんなのところまで着地した。

「いい動きだ。その肝っ玉もいい……ん？」

大男はシンクに目を向けた。

「おまえ、どつかで見たことあると思つたら、蒼き狼ブルーウルフじゃねえか」

「蒼き狼？」

ユーリはシンクを見て、首を傾げた。

「バルボス、さつさとこいつらを始末しなさい！」

バルボスと呼ばれた大男の後ろからラゴウが現れた。

「金の分は働いた。それに、すぐ騎士が来る。追いつかれては面倒だ。小僧ども、次に会えば容赦はせん！」

そう言い捨てバルボスは小舟に乗った。

「待て、まだ中に、ちつ……！ザギ……！後は任せますよ！」

そう言つてラゴウも小舟に乗り、バルボスが大剣で小舟のロープを切つて脱出した。

そして、後からユーリ、シンク、エステルには見覚えのある双剣の暗殺者、ザギが姿を現した。

「誰を殺させて、くれるんだ……？」

ザギはユーリ達を睨みながら言った。

「あなたはお城で！」

「どうも縁があるみたいだな」

「またこいつか」

ユーリ達が口々に言うと、船が爆発を起こした。

「刃がうずくう……殺らせろ……殺らせろおっ！」

そう言っただけでユーリに向かって突進してきた。

ユーリはそれをかわし、ザギの刃は船の一部に当たり、船が爆発する。

「うおっと……お手柔らかに頼むぜ」

ザギは再びユーリを睨み、斬り付けようとする。

その間にシンクの閻魔刀が入り、ザギの斬撃を防ぐ。

「また会ったな」

「おまえ……邪魔をするなあ！」

ザギは怒りをあらわにし、シンクに標的を変えた。

「シンク！」

リタが悲鳴にも似た声をあげる。

「大丈夫だ！」

「余裕を言ってる暇があるのかあ！？」

ザギは連続して、双剣で閻魔刀を叩きつけ、シンクは膝をついてしまふ。

「たゆたう闇の微笑、スプレットゼロ！」

ザギの前に黒い塊が現れ、それが小規模な爆発を起こした。

「ぐおっ……！」

ザギは少し吹き飛んだ。

今のはリタの魔術だった。

シンクの近くにエステルとリタが来た。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ」

「まったく、無茶するんじゃないわよ！」

エステルは治癒術でシンクを回復させる。

「ありがとう、エステル、リタも」

「はい」

「ふ、ふん！」

シンクの言葉に、エステルは微笑み、リタは顔を赤らめながらそばを向いた。

ザギはユーリ、カロール、ラピードが相手をしている。

「雷撃ウェーブ！」

カロールはカリリアンソードを帯電させてザギに振り払う。ザギはそれを後ろに下がってかわす。

「ガウツ！」

ラピードは“瞬迅犬”でザギに突進し、ザギは一瞬仰け反った。

「今だ！爪竜連牙斬！」

ユーリはその隙に回転しながら斬りと蹴りを交互にザギに繰り出す。ほとんどの攻撃がザギの左腕に当たる。

その瞬間、船が再び爆発を起こす。

船の上はすでに炎でつつまれていた。

「ぐうおおおうあー！……い、痛てえ………！」

ザギは左腕を押さえながら痛みに顔を歪める。

「どうやら、勝負あったな」

「……オレが、退いた……？」

ザギは再び立ち上がり笑いだす。

「アハハハッ！ 覚えた、覚えたぞ！ ユーリ、ユーリイ！！」

ザギはユーリを睨みながらユーリの名を叫ぶ。

「オレがおまえを殺す！ 切り刻んでやる、幾重にも！ 動くな、じつとしてろ！ アハハハッ！！」

ザギは笑っていると、かれの足元が火を噴き出し、その勢いでザギは海に投げ出された。
すると、船が傾き、沈もうとしていた。

「え、沈むの？」

「海に飛び込むぞ！」

ユーリが海に飛び込もうとした時、

『ゲホッ、ゲホッ！……誰か、いるんですか！』

船室から人の声がした。

ユーリは真っ先に船室に走っていく。

「ユーリ！」

エステルがユーリを追い掛けようとしたが、リタとシンクに腕を掴まれる。

「エステリーゼ、ダメ！」

「でも……」

「今は海に飛び込むのが先だ！」

ユーリ以外の全員が海に飛び込んだ。

シンクたちが海に飛び込んですぐに船は沈んだ。

「みんな、大丈夫？」

「ああ、なんとか」

「けど、ユーリは……」

エステルが沈んだ表情となって、ユーリの名を呟くと、ユーリが海の中から出てきた。

「ユーリ！」

「ぶはっ！少し水飲んじまったな」

ユーリは金髪の少年を抱き抱えていた。

エステルはその少年を見て驚いた。

「ヨーデル！」

「知り合いなのか？」

シンクが尋ねていると、こちらに帝国の船がやってきた。その船にはフレンが乗っていた。

「どうやら、無事みたいだな！」

フレンはユーリの抱き抱えていた少年を見て、エステルと同じく驚いた。

「ヨーデル殿下……！今、引き上げます！ソディア、手伝ってくれ！」

フレンはユーリたちを船に引き上げ、カプワ・ノールの隣街、カプワ・トリムに船を進めた。

港の街 カプワ・ノール 追い詰める執政官、暗殺者再び（後書き）

次回はカプワ・トリムからカルボクラムまで書くつもりです！
お楽しみに！

感想もマジでお願いします！

港の街 カプワ・トリム亡き都市 カルボクラム 未知の魔物 襲来（前書き）

今回はトリム港からカルボクラムまでです。

港の街 カプワ・トリム 亡き都市 カルボクラム 未知の魔物 襲来

く港の街 カプワ・トリムく

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

ユーリが助けた金髪の少年、ヨーデルはユーリたちに礼を言った。

「ね、こいつ、誰？」

リタはヨーデルを指差しながらエステルに尋ねた。

「え、えつと、ですね……」

「今、宿を用意している。詳しい話はそちらで。それでいいね」

フレンはユーリに向かって言った。

ユーリは無言で頷き、フレンとヨーデルは一足先に宿屋に向かった。

*

宿屋の一室に入ると、そこにはフレンとヨーデル、そしてラゴウがいた。

「こいつ……！」

「どの面下げて出てきた……！」

リタとシンクはラゴウを睨み付ける。

「おや、どこかでお会いしましたかね？」

ラゴウは知らない顔で言った。

ユーリとエステルは二人の前に出る。

「船でのショックで、都合のいい記憶喪失か？いい治療師、紹介するぜ」

「はて？記憶喪失も何も、あなたと会うのは、これが初めてですよ？」

ラゴウは不適に笑いながら言った。

「何言つてんだよ！」

「執政官、あなたの罪は明白です。彼らがその一部始終を見ているのですから」

フレンがラゴウの前に出て、言った。

「何度も申し上げた通り、名前を騙った何者かが、私を陥れようとしたのです。いやはや迷惑な話ですよ」

「ウソ言つな！魔物のエサにされた人たちを、あたしはこの目で見たのよ！」

あくまでしらを切るラゴウに、リタは怒鳴った。

「さあ、フレン殿、貴公はこのならず者と評議会の私とどちらを信じるのです?」

「フレン……」

ラゴウの言葉に、フレンは押し黙って、顔を俯かせる。

「決まりましたな。では、失礼しますよ」

そう言ってラゴウは部屋を出ていった。

「なんなのよ、あいつは!で、こいつは何者よ!?」

リタは怒りながら、ヨーデルを指差して尋ねた。

「落ち着け、リタ」

シンクがリタを宥める。

「この方は……」

フレンが説明しようとした時、エステルが前に出て、代わりに説明する。

「この方は、次期皇帝候補のヨーデル殿下です」

「へ?またまた、エステルは……」

エステルという言葉にカロルは信じられないような顔をする。

「……って、あれ？」

「あくまで候補のひとりですよ」

「本当なんだ。先代皇帝の甥御にあたられる、ヨーデル殿下だ」

「ほ、ほんとに!？」

「はい」

カロルの言葉に、ヨーデルは頷いた。

「その次期皇帝候補が、なんであんなクズ執政官に捕まってたんだ？」

「それはオレも聞いてみたいね」

シンクとユーリはヨーデルに尋ねる。

「……この一件はやはり……」

エステルの言うことに、フレンは頷いている。

「市民には聞かせられない事情ってわけか」

「あ……それは……」

「エステルが騎士に追われてまできたのにも関係してるんだな」

「……………」

二人の言葉に、エステルは黙ってしまふ。

「ま、好きにすればいいさ。目の前で困ってる連中をほっとく帝国のゴタゴタに興味はねえ」

ユーリはそう言って立ち去ろうとした。

「ユーリ……そうやって帝国に背を向けて、何か変わったか？」

フレンの言葉に、ユーリは足を止める。

「人々が安定した生活を送るには帝国の定めた正しい法が必要だ」

「けど、その法が、今はラゴウを許してんだろ」

「だから、それを変えるために、僕たちは騎士になった。下から吠えているだけでは何も変えられないから。手柄を立て、信頼を勝ち取り、帝国を内部から変える。そうだったろ、ユーリ」

ユーリはフレンに向き合う。

「……だから、出世のために、ガキが魔物のエサにされんのを黙って見てろってか？下町の連中が厳しい取立てにあってんのが見過ごすのかよ！それができねえから、オレは騎士団を辞めたんだ」

「知ってるよ。けど、やめて何か変わったか？」

「……………」

フレンの言葉に、ユーリは再び黙ってしまふ。

「騎士団に入る前と何か変わったのか？」

ユーリは無言で部屋を出ていった。

「俺はユーリに賛成だ」

シンクが口を開いた。

「シンク……………」

「あんたの理想はいいと思う。けど、そうしてる間にも、誰かが
ラグウみたいな奴らに苦しめられる。……………無慈悲に」

「……………」

シンクの言葉に、フレンは黙る。

「あなたは、どうされるんです？」

ヨーデルがエステルに尋ねた。
エステルはフレンに近づく。

「行ってもいいのでしょうか？」

「なぜですか？」

「……ユーリやシンクと旅をしてみても変わった気がするんです。帝
国とか、世界の景色が……それと、わたし自身も……」

そう言つて、エステルは微笑む。

「そうですか……わかりました。少年……！」

フレンはカロルに向かって言つた。

「え……ボ、ボク……！？」

「ユーリに彼女を頼むと伝えておいてくれ」

「は、はい……！」

フレンの言葉に、カロルは頷いた。

フレンは今度はシンクに向かって言つた。

「それとシンク、君にも頼みたい」

「……わかつた」

「いいんですか……？」

エステルは戸惑いながら尋ねる。

「私がお守りしたいのですが、今は任務で余力がありません。それ
に、ユーリのそばなら、私も安心できます」

「フレンはユーリを信頼しているんですね」

「ええ」

「話がまとまったんなら、行くわよ。あいつ、見失うわよ」

リタの言葉にシンクたちはユーリを追い掛けることにした。

*

宿屋を出たら、ユーリはすぐに見つかった。
隣にはレイヴンがいた。

「あ！ユーリ！おい！！」

カロルが大声で呼ぶ。

「あんの、オヤジ……！！」

リタはレイヴンを見て走っていく。

レイヴンはそれを見て一目散に逃げた。

「待て、こら！ぶっ飛ばす！」

リタはそのままレイヴンを追いかけた。

「おい、ユーリ。なんであのおっさん逃がした？」

「誤解されやすいタイプなんだとさ」

「え？それ、どういう意味……？」

ユーリの言葉に、シンクとカロルは首を傾げた。
すると、リタが戻ってきた。

「……逃したわ。いつか捕まえてやる……」

「ほっとけ。あんなおっさん、まともに相手してたら疲れるだけだぞ」

そこにエステルが息を切らしてやってきた。

「大丈夫か、エステル？」

「……少し、休憩させて、ください」

「ああ、じゃ少しだけな。そしたら行くぞ」

「行くってどこにだ？」

「紅の絆傭兵団の後を追う。下町の魔核、返してもらわねえとな」

シンクの問いに、ユーリは答えた。

「足取り、つかめたんです？」

「北西の方に怪しいギルドの一団が向かったんだと。やつらかもしんねえ」

「北西つていうと……地震で滅んだ街くらいしかなかった気がするけどなあ」

カロルは思い出しながら言った。

「そんなところに何しに行っただんでしょう」

「さあな」

「そんな曖昧な情報で大丈夫なのか？」

「だから、行つて確かめんだろ」

ユーリの言葉に、一行は北西に向かった。

*

く亡き都市 カルボクラム

そこは街の面影は残っているが、完全に廃墟であつた。

「こりゃ、完璧に廃墟だな」

「こんなところに誰が来るっていうのよ」

「またいい加減な情報掴まされたかな……」

「また……？」

ユーリの言葉にカロルが首を傾げた。

「そこで止まれ！当地区は我ら『魔狩りの剣』により現在、完全封鎖中にある」

「この声……！？」

上を見上げると、そこには三日月型の大きな武器を携えた少女がいた。

「あいつ……デイドン砦で騒いでたやつらと一緒にいた……」

シンクは少女を見て思い出した。

「これは無力な部外者に被害を及ぼさないための措置だ」

「ナン！」

カロルが少女を見て呼んだ。

「よかった、やっと追いついたよ」

「……………」

ナンと呼ばれた少女はカロルを睨む。

「首領やティソンも一緒？ボクがいなくて大丈夫だった？」

「なれなれしく話し掛けてこないで」

ナンは冷たい口調でカロルに言った。

「冷たいな。少しはぐれたただけなのに」

「少しはぐれた？よくそんなウソが言える！逃げ出したくせに！」

「逃げ出してなんていないよ！」

「まだ言い訳するの？」

「言い訳じゃない！ちゃんとエッグベアを倒したんだよ！」

「それもウソね」

ナンはなおもカロルに冷たい視線を送る。

「ほ、ほんとだよ！」

「せっかく魔狩りの剣に誘ってあげたのに……今度は絶対に逃げないって言ったのはどこの誰よ！昔からいつつもそう！すぐに逃げ出して、どこのギルドも追い出されて……」

「わあああああっ！わあああああっ！」

カロルはナンの言葉を大声で遮った。

「……ふん！もう、あんたクビよ！……！？蒼き狼！？」

ナンはシンクを見て驚いた。

「またその名か……」

「また私たちの狩りの邪魔をするの！？」

ナンはシンクに向かって怒鳴る。

シンクは呆れ顔になって口を開く。

「……別に、今はおまえらに用はない」

シンクはめんどくさそうに言った。

「ふん、ならいいわ。魔狩りの剣より忠告する！速やかに当地区より立ち去れ！従わぬ場合、我々はあなた方の命を保障しない」

そう言い残し、ナンは去っていった。

「ナン！」

「……………」

「それにしても、どうして魔狩りの剣とやらがここにいんだろっな」

「さあね」

「多分、十中八九魔物狩りだな」

そう言ってシンクとリタは先へ進もうとする。

「リタ、シンク、待ってください。忠告忘れたんですか？」

「入っちゃだめとは言ってなかったでしょ？」

「それに紅の絆傭兵団を探しに来たんだしな」

「それもそうだな。奥を調べてみようぜ」

ユーリたちは歩きだす。

カロールも遅れてついていく。

*

ユーリのソーサリーリングを使って先を進んでいるとある一団を見つけた。

「……紅の絆傭兵団……？」

「……じゃなさそうだな」

「あれが魔狩りの剣だよ」

カロルは一団を見て言った。

「あの男、デイドン砦で騒いでたやつだな」

その先頭にはデイドン砦にいた大剣を持った男だった。

「あ、そっぴや、見たな。なるほど、あいつがおまえんこのリーダーか」

「うん、首領のクリントだよ」

クリントはユーリたちが前に戦った魔物、ガットウーゾと対峙していた。

クリントはガットウーゾを一撃で倒した。

「……なによ、あいつ」

「とどめの一発、フェイタルストライクだ」

「なんだ？そのフェイタルストライクってのは」

シンクの言葉に、ユーリは首を傾げた。

「熟練した剣の使い手なら、使えるスゴ技だ」

「ふーん……」

「そっぴえばシンク。あんた、蒼き狼ってどっいつことよ？」

リタが唐突にシンクに尋ねる。

「なんだ、急に？」

「あの紅の絆傭兵団のバルボスや、ナンって奴も、あんたのことそう呼んでたじゃない。どういう意味よ？」

「ああ、あれか……修行の旅をしていた時、魔物や盗賊を狩って回っていた時期があつてな。その時にギルドの連中にそう呼ばれていたんだ」

「そついや、なんか『邪魔をするな』とかなんとか言われてなかったか？」

「多分、あいつらの狙っていた魔物とかを倒したりしてたから、かもな。直接会ったことはないが」

シンクは思い出しながら、言った。

カロルはクリントたちをじっと見ていた。

「戻りたいんじゃないの？」

「そ、そんなの」

リタの言葉に、カロルは反応する。

「え……？カロル、戻ってしまうんですか？」

「戻らないよ……！魔物狩りには飽きたからね」

「戻らないじゃなくて、戻れないんでしょう？クビって言われてたし」

「ち、違うよ。元々、出て行くつもりだったんだから」

カロルは否定し続ける。

「ふーん、そう。ま、いいんじゃない？」

「だから、みんなと行くよ」

「なら、あらためてよろしくな、カロル」

「それにしてもあいつら、あんな大所帯で何する気なんだ？」

「さっきの魔物が目的なら、ひとりで十分ですもんね」

ユーリたちは大所帯で来ている魔狩りの剣を見つめる。

「こんな人数が集まるの、今までに一度もなかったよ」

「そっなんですか？」

「ということは、それほど強力な魔物がいるってことだな……」

「後……つけてみる？」

「それも楽しそうだが、今は紅の絆傭兵団の方が先決だ」

「それもそうね」

ユーリたちは魔狩りの剣を後にし、違う道を進んだ。

*

ユーリたちは建物の階段を降りて、螺旋階段の奥へ行った。すると、全員が身体に異常を訴える。周りには緑色の粒子が飛んでいる。

「これは……」

「エアルよ。濃度が濃くなってる……」

「そういえば、クオイの森で、エステルがそれで倒れたな……」

シンクがエアルで苦しみながらも思い出して言った。

「あんたたち、そんなことがあったの……？」

「あ、あれ、なに？」

カロルは奥にある機械に目を向ける。そこには扉らしきものもあった。

「この魔導器がドアと連動してるみたい。ここにパスワードを入れれば、開く仕組みみたい」

「パスワード……わかるか？」

ユーリの言葉に、リタは首を振る。

「さすがにノーヒントじゃわからないわ」

「ヒント……もしかしてこれか？」

シンクはそう言って三枚の紙を取り出した。

その紙には一枚ずつに、『光』『空』『球』と書かれている。

「シンク、それをどこで？」

「いや、他の建物の中をあちこち調べていたら見つかった」

シンクは真顔で答えた。

「あんたってやつは……けど、助かるわ」

リタはシンクから三枚の紙を受け取り、装置に『太陽』と打ち込む。すると、トビラが開かれた。

「行こう」

一行はトビラの先へ進んだ。

そこには先ほどよりもエアルが充満していた。

「水が浮いてる……」

カロルの言葉に、全員が上を見た。

そこには、魔導器らしきものが浮いていて、水を浮かせていた。

「あの魔導器の仕業みたいだな」

「たぶん、この異常も……」

「あれ、エフミドやカプワ・ノールの子に似てる」

「壊れてるのかな……？」

「そんなわけないだろ、ちゃんと動いてるじゃないか……」

シンクはカロルの言葉に、ツツコんだ。

「……じゃあ……一体……」

「わからない……あの子……何をしてるの……」

「どうやら……こいつを閉じ込めているらしいぞ」

シンクは下に視線を落しながら言った。

そこには、今まで会ったものより巨大な魔物がいた。

「ま、魔物お……」

カロルが怯えた声で言う。

「病人は休んどけ。ここに医者はいねーぞ」

「え……？で、でも……う、うわぁ……！」

魔物は下から暴れだしていた。

「結界が破れるぞ……！」

「大丈夫、あれは逆結界だから」

「逆……結界……？」

リタの言葉にカロルは首を傾げた。

「魔物を閉じ込めるための強力な結界だ。簡単には出られない。だが、なんだ、このエアルの量は。異常すぎるぞ」

魔物は暴れ続け、逆結界がバチバチと音を立てる。

「な、なんか消えそう……！」

それを見たリタは走りだした。

「リタっ！？」

「待て、リタ！」

シンクはそれを追いかけた。

「待っててね……今、治してあげるから……」

「無茶をするな」

リタをシンクが抱き留める。

「俺様たちの優しい忠告を無視したのはどのどいつだ？」

違う方向から声がした。そこには、ナンにクリント、そして、フー
ドの男、ティソンもいた。

「悪いな。こつちにや、大人しく忠告聞くような優しい人間はいね
えんだ」

「ひん、なるほど……って、なんだ、クビになったカロル君もいる
じゃないか」

ティソンの言葉に、カロルは暗い表情をする。

「しかも、蒼き狼まで来てるってか……また俺らの獲物を横取りに
来たか」

「あいにく、今はあんたらの獲物は横取りする気はねえよ」

「ちょうどいい。そのまま大人しくしている。こちらの用事は、こ
のケダモノだけだ」

クリントが大剣を抜きながら、下にいる魔物を見た。

「大口叩いたからにはペットは最後まで面倒見ろよ。途中で捨てら
れると迷惑だ」

ユーリが挑発じみたことを言ったとき、上から鳴き声が聞こえた。

「なにっ!？」

すると上から竜使いが魔導器を壊しながらやってきた。

「またあいつ!」

リタは竜使いを睨む

『ウオオオオン!!』

逆結界に閉じ込められていた魔物は結界が壊れたことにより、自由となった。

「ふへ……あれ……?平気です……」

エステルが呟くと、周りのエアルの濃度が薄くなっていた。おそらく結界が破れたからだろう。

「け、結界破れたよっ!」

「逆結界の魔導器が壊れたから当然でしょ!?んつとにあのバカドラ!」

リタは竜使いを睨みながら怒りをあらわにしている。

クリントは魔物を大剣で斬り付ける。

「そうだ、もつと暴れる!ケダモノはケダモノらしく、我が手でほふってくれるわ!」

すると、竜使いがクリントたちの前に現れる。

「……ほう?」

「『まず、オレを倒せ!』って事らしいぜ。面白れえじゃ、ねえか!」

クリントたちは竜使いと戦闘を開始していた。

その間に、魔物が暴れだし、ユーリたちの足元が崩れた。

シンクはリタを抱き止め、着地する。

「大丈夫か、リタ?」

「う、うん……大丈夫よ」

リタの安全を確認すると、シンクは魔物の方を見た。

魔物はユーリが相手をしていて、途中からラピード、エステルも加わる。

「俺たちも行こう!」

「わかったわ!」

シンクとリタは、ユーリたちに加わる。

「待たせたわね!」

「加勢するぞ!」

「ああ、助かる」

魔物は巨大な前足を振り下ろす。
ユーリたちはそれをかわす。

「茨よ、アイヴィーラッシュ！」

リタが魔物の足下に、茨を出現させ、攻撃するが、あまり効いていない。

「刃に宿れ、更なる力、シャープネス！」

エステルがユーリとシンクの攻撃力を上げる魔術をかける。

「蒼破牙王撃！」

「風牙一閃！」

ユーリは蒼破刃の後に牙浪撃を繰り出し、シンクは風をまとった閻魔刀で魔物を攻撃する。

しかし、あまり手応えがない。

「……なあ、ユーリ」

「なんだ、シンク？」

「あの魔物、様子が変わらないか？」

「変？」

ユーリは魔物を見ながら、シンクの話聞いた。

「敵意をあまり感じない。それに、こっちを見てるぞ」

魔物は攻撃をやめ、なぜかエステルを見る。
そして、顔を少しエステルに近付ける。
エステルは身構える。

『ウオオオオン!!』

魔物は吠えると、どこかへと去っていった。

「はあ……助かりました」

「……カロルは？」

リタが周りを見渡しながら言った。
すると、後ろから魔導器が落ちてきて、上から水が流れてきた。

「全ての魔物はな、俺様に殴られるために、生まれてきたんじゃない！」

ティソンが腕を広げながら叫んだ。

「師匠！危険です！」

「極上の獲物を前に！命がおしくて逃げ出せるか！」

ティソンは逃げようとする竜使いに向かって飛び上がった。
リタも竜使いに魔術を放とうとする。

「ぐへらああっ！」

ティソンは竜使いに振り払われ落ちていく。

そして、天井が崩れようとしていた。

「天井が……ここは危険です！」

エステルが叫ぶ。

クリントたちも獲物がなくなったことで撤収していった。

「オレたちも退くぞ！」

「あゝもう、あたしもあのバカドラ殴りたかったのに！」

「また次の機会にでもすればいいだろう」

シンクとリタも出ようとする。

「待ってください、カロルはどこに!？」

「たぶん、もう先に外へ出たんだろう。探しながら行くぞ！」

ユーリたちは先ほどのトビラへと逃げた。

*

ユーリたちは建物を出て、カロルを探すことにした。

「なにかあれば、すぐにそう！いつも、いつもひとりで逃げ出して

「！」

カロルはナンと言いついていた。

「ち、違つよ！」

「何が違つもの！？」

「だからハルルの時は……」

「今はハルルのことは言つてない！やましいことがないのなら、さつさと仲間のところに戻ればいいじゃない」

「だからそれは……」

「あたしに説明しなくていい。する相手は別にいるでしょ」

「え……？」

カロルが振り返るとユーリたちがいた。

「みんな……」

「カロル、無事でよかったです」

「まったくよ。どこ行ってたんだか。こっちは大変だったのに」

「まあ、そつ言つな」

シンクは愚痴るリタを宥める。

カロルはみんなに頭を下げた。

「ご、ごめんなさい……」

「ま、ケガもないみたいで何よりだ」

ユーリはそう言って、カロルの頭を撫でる。

「もう、行くから」

「あ、待って……」

「自分が何をしたのか、ちゃんと考えるのね。じゃないともう知らないから」

そう言って、ナンは走っていった。

「行こうぜ、カロル。もう疲れた」

「ユーリ……」

カロルは少し安心した顔になった。

「しかし、紅の絆傭兵団なんていなかったな」

「ほんとに。やっぱりあのおっさんの情報は次から注意しないとな」

「おっさん……って、まさか、あの……?」

「そう」

リタの言葉にユーリは頷く。ユーリに情報をくれたのはレイヴンだと。

「あ、あ、あのおっさん、次は顔見た瞬間に焼いてやるっ！」

「穏便に、ね、穏便に行きましょう」

エステルは慌ててリタを落ち着かせる。

ユーリたちはカルボクラムを出ることにした。

*

入り口に行くと、そこには騎士が三人いた。

真ん中には前にユーリとシンクが帝都で会ったキュモールがいた。

「グルルルルル」

ラピードがキュモールを見て威嚇する。

「ようやく見つけたよ、愚民ども。そこで止まりな」

「わざわざ海まで渡って、暇な下っ端どもだな」

「くっ……キミに下っ端呼ばわりされる筋合いはないね。さ、姫様、こ・ち・ら・へ」

気持ち悪い口調でキュモールはエステルに近づこうとする。

「え、姫様って……誰？」

「姫様は姫様だろ。その目の前のな」

ユーリはエステルを見ながら言った。

「え……ユ、ユーリ、どうして、それを……？」

「え……エステルが……姫様？」

「やっぱりね。そうじゃないかと思ってた」

「ああ、俺も薄々そう思っていた」

「え、リタとシンクも……？」

二人の言葉に、エステルは戸惑いを隠せなかった。
エステルはキュモールの前に歩きます。

「……彼らをどうするのですか？」

「決まっています。姫様誘拐の罪で八つ裂きです」

「待ってください、わたしは誘拐されたのではなくて……」

「あゝ、うるさい姫様だね！こっちに来てくださいよー！」

エステルが否定しようとする、キュモールは態度を変えて、剣を抜く。後ろにいた騎士たちも槍を構える。

「エステル！」

「そっちのハエはそこで死んじゃえ！」

「ユーリ・ローウェル、名無しの男とその一味を罪人として捕縛せよ！」

キュモールの後ろから、ルブラン、アデコール、ボツコスがやってきた。

「げっ……貴様ら、シュヴァーン隊……！待ちなよ！こいつは僕の見つけた獲物だ！むざむざ渡さんぞ！」

「獲物、ですか。任務を狩り気分でやられては困りますな」

「ぐっ……」

ルブランの言葉に、キュモールは押し切られる。

「それに先ほど、死ね、と聞こえたのですが……」

「そつだよ、犯罪者に死の咎を与えて何が悪い？」

「犯罪者は捕まえて、法の下で裁くべきでは？」

「……ふん……そんな小物、おまえらにくれてやるよ」

そう言つて、キュモールは部下を連れて、行つてしまった。

「ささ、どうぞ、姫様はこちらへ、あ、お足元にお気をつけて……」

「あの、わたし……」

「こちらへどうぞ！」

ボツコスという言葉でエステルは前に行く。

「こやつらをシュヴァーン隊長の名の下に逮捕せよ！」

ユーリー一味！おとなしくお縄をちょうだいするであゝる！」

アデコールとボツコスはユーリたちを拘束しようとした。

「一味って何よ！なにすんのよ！はなせ！あたしを誰だと……」

「ボクだつて何もやってないのに！」

「彼らに乱暴しないでください！お願いします……！」

エステルはルブランに懇願しようとした。

「エステル、心配しなくてもいい」

「俺たちは大丈夫だから、安心しろ」

「ユーリ、シンク……！」

ユーリたちはアデコールとボツコスに引つ張られる。

「いいからきりきり歩くのであゝる!」

「いてっ、ちよつと引つ張るなよ……!」

「シュヴァーン隊長、不屈き者を、ヘリオードへ連行します」

全員が去った後、ルブランは屋根に立っている隊長服の男に言う。
男は頷くかわりに左手を上げ、頷く。

「全員、しゅっぱーっ!」

ユーリたちはルブランたちに連れられ、ヘリオードに連行された。

港の街 カブワ・トリム亡き都市 カルボクラム 未知の魔物 襲来（後書き

次回はヘリオードの話です。

唐突なんです、この作品にテーマ曲をつけるなら何がいいですかね？

感想と一緒にお願いします。

新興都市 ヘリオード 姫の力（前書き）

わずか連載1ヶ月あまりだというアクセスがついに5万をいっ
た……

ありえん！ありえんぞお！

みなさんこれからも応援よろしくお願いします！

新興都市　ヘリオード　姫の力

「続けて18番目の罪状を確認する」

「はい、どうぞ」

ユーリたちはルブランたちに取り調べを受けていた。ほとんどがユーリのだが。ユーリ、リタ、カロルは座り、ラピードはその横で寝ている。シンクは壁にもたれている。

「滞納された税の徴収に来た騎士を川に落としたのは間違いないな？」

「そんなこともあったな。あれ、デコだっけ？」

「そうだ！おかげで私は風邪をひいて、三日間寝込んだのである」

「……それで、あといくつだ？もうユーリだけでいいだろ」

「ボクはどうなっちゃうんだろう」

シンクとカロルは不満を言う。

「反省の色はなし……と、徴収に残してやるのだ」

「そっぴゃ、おまえらんとこの何もしない隊長はどうした？シユヴアーンつつたっけ？」

「偉いからってサボリでしょ」

リタの言葉にルブランは反応した。

「我らが隊長を愚弄するか！ シュヴァーン隊長は、10年前のあの
大戦を戦い抜いた英傑だぞ」

「ま、俺たちみたいな小物には用はないってことだな」

「ええ〜い！ 次の罪状確認をするのであ〜る！」

アデコールが怒鳴ると、二人の男女が入ってきた。一人は長い耳に
触角のある褐色肌の女性で、もう一人は白い髪に騎士の鎧を着た男
性だった。

「ア、アレクセイ騎士団長閣下！ どうしてこんなところに！？」

アレクセイが来たことに、ルブランは驚いていた。

アデコールとボツコスはずぐに敬礼をした。

「アレクセイ……なんで」

「エステリーゼ様、ヨーデル様、両殿下のお計らいで君らの罪はす
べて赦免された」

アレクセイはユーリとシンクを見て言った。

「な、なんですとおっ！ こいつらは帝都の平和を乱す凶悪な犯罪者
で……」

「ヨーデル様の救出並びに、エステリーゼ様の護衛、騎士団として

礼を言おう」

アレクセイが言うと、女性の方がお金の入った袋をユーリに差し出す。

「こちらを……」

「そんなもん、いらねえよ。騎士団のためにやったんじゃない」

「右に同じく」

「そうか」

そう言っアアレクセイと女性ハ部屋を出ようとした。

「それより、エステルのことだが……」

「先ほど、帝都に戻る旨、ご承諾いただいた」

「えっ！……あ、でも、お姫様なら仕方ないか」

カロルハ一度驚くが、すぐに理解した。

「姫様には宿でお待ちいただいている。顔を見せてあげてほしい」

そう言っアアレクセイと女性ハ部屋を出た。

*

ユーリたちは部屋を出て、外に出た。
そこはレンガ造りの街だった。

「エステル、帰っちゃうんだね」

「あんた、これでいいの？」

リタはユーリに尋ねる。

「選ぶのはオレじゃないだろ」

「そりゃ……そうだけど」

「それより、ここはどこだ？」

「新興都市ヘリオードだよ。位置的にはトリム港とダングレストつて街の間だね。まだ作られて間もない新しい街なんだ」

ユーリの問いに、カロールが答えた。

「この道を東に行けばさっきいたカルボクラム、西に抜けて西北に行けばダングレストだよ」

「ふうん、少し街の中も見て回るか」

「……あたしは好きにさせてもらっわ」

「俺もそうする」

「ボクは……どうしようかな」

コーリたちはしばらく自由行動となった。

*

シンクは街の中心にある結界魔導器を見ていた。

「おや、君か」

そこにアレクセイとクリティア族の女性がやってきた。

「あんたか……」

「君にも感謝するよ。エステリーゼ様の護衛に、ヨードル様の救出」

「別に、俺は感謝されるようなことはしていないつもりだ」

「フレンから聞いたのだが、君はどうやら記憶喪失らしいな」

「エステルか……」

フレンに話したのはおそらくエステルだろう、とシンクは予想した。

「まあな、手がかりはこいつだけみたいだ」

そう言っつてシンクは閻魔刀を見せた。

「ほう……伝説の英雄の剣の一本……なぜ、君が……？」

「あんたも知ってるのか？スパイダを」

「まあな。古い文献を調べているうちに目に入っつてな。伝承によれば、このテルカ・リュミレースのどこかに存在するとは聞いていたが、よもやこんなところで……」アレクセイは閻魔刀をまじまじと見つめる。

「それがあるということとは、どうやら他の二本もどこかにあるということだな。君の記憶を取り戻すにも、他の二本を探すのが得策と私は思う」

「スパイダか……探してみるかな」

「頑張りたまえ、では、また」

そう言っつてアレクセイは去り、クリティア族の女性は一度お辞儀をして去った。

「スパイダ……俺の記憶の手がかり……」

シンクはそう呟いたあと、宿に行った。

*

シンクが宿に行くと、ユーリたちが集まっていた。

「ん？エステルはどうした？」

シンクはユーリに尋ねた。

「行っただけど、会うのは明日にしてくれてよ」

「そうか」

「じゃあ、ボクたちも部屋に行こう」

カロルの言葉に、ユーリたちは頷き、部屋で休んだ。

*

翌日。

「……………」

ラピードが何かに反応していた。

「どうした、ラピード？」

「変な音、聞こえない？」

「言われてみれば、確かに」

「ああ、なんでも、結界魔導器の調子が悪いんですよ」

ユーリたちの疑問に、宿の店員が答えた。
それを聞いたリタが真っ先に走りだした。
シンクがその肩を掴んだ。

「ちょっと待て、リタ！」

「待つてらんないわよ」

「騎士団長様だっているんだ。すぐに手打ってくれるだろ」

「リタが出ていって勝手すると、エフミドの丘の時みたいになっちゃうもんね」

「ま、気が向けば、フレンって騎士に伝えればいいだろ」

「わ、わかったわよ……」

シンクの言葉に、リタは頷いた。

*

ユーリたちは騎士団本部にいるフレンに会いに行った。そこにはエステルもいた。

「なんか、結界魔導器が変な音出してるけど、平気か？」

「それが気になって、わざわざ顔を出したのか。相変わらず、目の前の事件をユーリは放っておけないんだな」

フレンは皮肉っぽく、言った。

「オレがっていうか、こっちの……」

ユーリはそう言いながら、リタを横目で見た。

「様子がおかしいのは明白よ。あたしに調べさせて！」

「今、こちらでも修繕の手配はしてあるんだ。悪いが魔導器を調べさせるわけにはいかない」

「なんでよ!」

フレンの言葉に、リタは怒鳴った。
その時、街が大きく揺れた。

「なんだ、今の振動？」

「まさか、魔導器か？」

「おい、リタ！」

リタはその間に走っていった。

「結界魔導器に何かあったんだろう」

「ああ、行ってみるぞ」

「エステリーゼ様はここに！」

ユーリたちは結界魔導器のある広場に走った。

*

広場の中心の結界魔導器からは強い光が放たれていて、そこからエアルが噴き出していた。

しかし、本来、緑色のエアルは今は赤い粒子となっていた。周りの植物が異常な大きさに成長し、街の人々はぐったりと倒れていた。リタが魔導器のところに行こうとしたとき、シンクが腕を掴んだ。

「待て、リタ！」

「ちょっとはなして！この子ほっとけないのよ！」

リタは叫んだ。

「エアルがバカみたいに出てる！この濃度じゃ命に関わるわ！」

「おまえだって危険じゃねえか！？」

近くにいたユーリが怒鳴る。

その時、衝撃波が飛んできて、ユーリとシンクは吹き飛ばされた。リタは急いで魔導器の方に走った。

ユーリとシンクも追いかけようとするが、エアルに邪魔される。リタは魔導器に駆け寄る。

「大丈夫、エアルの量を調整すれば、すぐに落ち着くから。元通りになるからね！」

魔導器に話し掛けるように術式を展開し、操作する。

「危ない！今すぐ離れるんだ！」

フレンが遠くからリタに叫ぶ。

フレンの後ろからアレクセイがやってきた。

「……市民を街の外へ誘導だ。あと姫様を含めた彼らも」

「はい」

「エアルの暴走だ。どうなるか想像が付かん」

アレクセイが結界魔導器を見ながら言った。

「……そんな！この子の容量を超えたエアルが流れ込んでる。このままじゃ、エアルが街を飲み込むか、下手すりゃ爆発……」

「ば、爆発だつて！冗談じゃないぞ！」

「みんな、逃げろ！逃げ！」

リタの言葉を聞いた市民が逃げ出す。

「リタ！！」

エステルがリタのところに走った。

「姫様！？」

「エステリーゼ様！」

「ちっ！」

アレクセイとフレンは驚き、ユーリは舌打ちをする。シンクはエステルに付いて走っていく。

「おい、シンク！」

「シンク君、待ちたまえ！」

「待てるか！」

ユーリとアレクセイが止めるが、シンクはエステルに付いてリタのところに向かった。

エステルは何故か光を放っていた。

「おまえ……！？」

「リタ！だいじょうぶ！」

「……エステリーゼ……シンク……」

リタが二人を見て、驚いた顔をする。

リタは急いで術式を操作した。

「よしっ、できた……」

リタがそう言ったとき、魔導器が強い光を放とうとした。

シンクはその刹那、リタとエステルをユーリたちのところに突き飛ばす。

「ぐああああー！」

シンクは吹き飛ばされ、レンガの壁に激突し、意識を失った。

「……っ！！」

「……シンクッ！！」

体を起こしたリタとエステルはシンクに駆け寄る。

「シンク、しっかりして！！」

「シンク……目を覚まして！！」

エステルはシンクに治癒術をかけた。

すると、雨が降ってきた。

「……はあ……はあ……シンクを……休ませる部屋を……準備してください……」

「……おねがい……シンクを……おねがい……」

エステルとリタは弱々しく言った。
そこにユーリがやってきた。

「なに言ってやがる。おまえらもぼろぼろじゃねえか」

「すぐに準備を……！彼は私が連れていきましょう」

フレンがやってきて、シンクを担いで、宿に向かった。
その様子を遠くから見ていた騎士がいた……

*

宿の一室では、ベッドで未だ目を覚まさないシンクにエステルが治療術を掛け続けている。リタはシンクの手を握りながら、眠っている。

そこにノックする音がした。

「……どうぞ」

入ってきたのはユーリだった。

「治療術だって無限に使えるわけじゃない。もうシンクも落ち着いてる。その辺にしておけ」

「はい……」

そう言っただけでエステルは治療術をやめた。

「まったく、無茶しやがって」

「本当ですね。リタとシンクって、決めたことにはどこまでも真っ直ぐで……」

「ひとことにすんな。エステルも同罪だ」

「……ごめんなさい」

エステルは謝った。

「ここ、オレが残るから、エステルはもう休め。治療術使って疲れたる？」

ユーリの言葉に、エステルは首を横に振った。

「わたし、リタとシンクがうらやましいです。大切なものを持っていくから……」

「リタはわかるが、シンクはわからないな……」

「わからないんですか？」

「ああ、こいつ、そんなに自分のこと話さないし」

ユーリの言葉に、エステルはため息をついた。

「っていうか、今は休んどけよ」

「だいじょうぶです。ユーリの方こそ休んでください」

「おまえが倒れたら、オレがフレンに怒られんの」

「なら、怒られてください」

エステルの言葉に、ユーリは呆れながら部屋を出た。

*

「ん……」

シンクはようやく目を覚ました。

そこでは、エステルとリタがベットに突っ伏して眠っている。

「気がついたか？よかったな」

ユーリが小声で尋ねた。

「あ、ああ」

シンクは二人を起こさないように起き上がった。

「エステル、ずっと治療使ってたんだぜ。リタなんか、おまえの手を握っていたからな」

「そうか……道理で……」

シンクが自分が倒れたのを思い出していると、リタが目蓋を開こうとしていた。

「ん……シンク……？」

「ああ、リタ」

「シ、シンクッ！」

リタはシンクを見た途端、シンクに抱きついた。

「リタ、落ち着け！」

「落ち着けるわけないでしょ……本当に、心配したん、だから……」

抱きついていて、表情は見えなかったが、おそらくリタは泣いているというのはシンクにわかった。

シンクはそっとリタの頭を撫でる。

「ああ、ありがとう……」

「おい、お二人さん、アツアツのところ悪いが、エステル目覚まし

ちまうぞ」

ユーリが呆れながら言った時、

「ふむう……あれ？シンク！目が覚めたんですね！」

エステルが急に体を起こした。

リタは顔を赤くしながらはすぐにシンクから離れた。

「あ、でも油断したらだめですよ！治ったと思った頃が危ないんです」

「もう大丈夫だ」

「あと、魔導器を使うフリ、もうやめていいよ」

リタの言葉に、エステルは驚いた。

「な、何のことです？」

「魔導器なくても、治癒術使えるなんてすげえよな」

「ど、どうしてそれを……」

エステルが口ごもったときだった。窓にさつと影が差した。そこには竜使いがいた。

「あいつは！」

「バカドラ！」

竜使いの竜が火球を放とうとした。

シンクは二人を押し退け、竜使いの前に出る。
ユーリも竜使いの前に出た。

「無茶すんな、シンク！」

「大丈夫だ！」

そう言つて二人は、閻魔刀とニバンボシで竜の火球を凌いだ。竜使いはなぜかとまどうようなそぶりを見せた後、振り上げていた槍を下ろす。

「すごい音がしたけど、どうしたの……つて、うわあああー！」

カロルが部屋に入ってきて、竜使いを見て驚いた。

竜使いは次の火球を放たず飛び去っていった。

「な、なに！？なんだつたの！？」

カロルは状況が飲み込めていない中、ユーリたちは話していた。

「大事な話だつたのに……」

「エステルの治療術に関してはここまでだな……」

「ま、あたしはだいたい理解したけど」

「え？なに？何の話？ボクだけ仲間はずれ？」

「そうか。ならエステルをフレンのところに連れていこう」

「おまえはリタと一緒に留守番だ。まだ休んでいろ」

「……わかった」

「ちょっと、勝手に話進めないでよ！」

ユーリたちがカロールを無視して、話を進めていたので、カロールが文句を言いながら、シンクとリタを残し、部屋を出た。
シンクは再びベットに入り、リタは隣の椅子に座る。

「あのさ……シンク……」

「ん？なんだ？」

「そのエステリーゼとあたしを、助けてくれて……あ、ありがとう」

リタは顔を赤くしながら礼を言った。
シンクはそれを見て、

「俺は当然のことをしただけだ」

そう言っただけで微笑む。

「それでも、ありがとう」

リタはそう言っただけで微笑み返した。

*

翌日。

ユーリたちは宿屋の前で集まっていた。

「帝都までの道中、気をつけてな」

「はい……」

「忘れ物とかないか？途中で思い出して迷惑かけんなよ」

「忘れたら、ユーリが届けてください」

「おいおい……」

エステルの言葉に、シンクは呆れた。

「バカ言ってるな。さっさとフレンとこ行くぞ。そこまでは送って
やつから」

「あ、あの、ユーリたちはこのあとどうするんです？」

「そうだな。紅の絆傭兵団の足取りも途絶えちまったし……」

「なら、ここから西のダンゲレストがいいと思うぞ」

シンクがユーリに答えた。

「ダングレストっていうと、確かギルドの街だよな？」

「ああ、紅の絆傭兵団の情報も見つかるはずだ」

「なら、行くか、カロル。ギルド作るにしても、色々と参考になるだろうし」

ユーリの言葉に、カロルは驚いた。

「え？ギルドのために？なら、行こう！」

ユーリたちはとりあえず広場に行った。

「フレンって騎士いないじゃない」

「このままボクらについてくる？」

カロルはエステルに尋ねる。

「そうですね。そうしてもいいです？」

「勝手をされては困ります。エステリーゼ様には帝都にお戻りいただかないと」

そこにアレクセイとクリティア族の女性がやってきた。

「フレンは別件ですでに旅立った。さて、リタ・モルディオ、君には昨日の魔導器の暴走の調査を依頼したい」

そう言ってアレクセイは、リタに顔を向ける。

「……あれ調べるのはもう無理。あの子、今朝少しみたけど結局何もわからなかったわ」

「いや、ケーブ・モック大森林に行ってもらいたい」

「ケーブ・モック大森林か。暴走に巻き込まれた植物の感じ、あの森にそっくりだったかも」

カロールが思い出したように言った。

「最近、森の木々に異常や魔物の大量発生、それに凶暴化が報告されている。帝都に使者を送ったが、優秀な魔導士の派遣にはまだまだ時間を要する」

「あたしの専門は魔導器。植物は管轄外なんだけど？」

「エアル関連と考えれば、管轄外でもないはずだ」

「それに……あたしは……エステルが戻るなら、一緒に帝都に行きたい」

「え？」

「君は帝国直属の魔導器研究所の研究員だ。我々からの仕事を請け負うのは君たちの義務だ」

アレクセイが言ったとき、エステルがリタに近づく。

「あ、え、えっと……それじゃあ、わたしがその森に一緒に行けば

問題ないですよね」

「姫様、あまり無理をおっしゃらないでいただきたい」

「エアルが関係しているのなら、わたしの治癒術も役に立つはずですよ」

「それは、確かに……」

「お願いです、アレクセイ！わたしにも手伝わせてください」

「しかし、危険な大森林に姫様を行かせるわけには」

「それなら。ユーリ、シンク、一緒に行きませんか？」

そう言ってエステルはユーリとシンクを見た。

「え？オレらが？」

「俺は構わないが」

「ユーリたちが一緒なら、かまいませんよね？」

アレクセイは少し考え込み、

「青年方、姫様の護衛をお願いする」

「……仕方ねえな。ただし、オレにも用事がある。森に行くのはダングレストの後だ」

「致し方あるまい」

そう言ってアレクセイは去ろうとした。

「閣下……」

「この結果を、フレンは予期していたようだな」

「ん？フレンがどうしたって？」

「『エステリーゼ様を頼む』。フレンからの伝言だ」

エステルはアレクセイにお辞儀をした。

「よし、じゃあ、ダングレスト経由で、ケープ・モック大森林だね」

カロルの言葉で、ユーリたちはダングレストを目指す。

新興都市 ヘリオード 姫の力（後書き）

次回はダングレスト〜ケープ・モック大森林の流れになります。

次回もお楽しみに！

感想もお願いします！

ギルドの巣窟 ダングレストヶープ・モック大森林 魔物の襲撃、うさんくさ

お待たせしました。

今回も新技登場します。

「ギルドの巣窟 ダングレスト」

「ここがダングレストか？」

「ああ、そうだ」

ユーリが街を見渡して、シンクに聞いて、シンクは答えた。

「にぎやかなとこみたいだな」

「そりゃ、帝都に次いで第二の都市だし、ギルドが統治する街だからね」

「もっとはじめめた悪党のいる巣窟だと思ってたよ」

「それって、ギルドに対する偏見だよな」

カロルがムツとして言った。

「紅の絆傭兵団の印象が悪かったからだろ」

「僕まで悪党なのかと思ったよ」

「あんたが悪党なら、こいつはどうなるのよ」

リタはユーリを指差しながら言った。

「それもそうだ。さて、バルボスのことはどこから手をつけようか」

「ユニオンなら、早いし確実だと思うが」

「ユニオンとはギルドを束ねる集合組織で、5大ギルドによって運営されている、ですよね？」

エステルは説明して、カロールに尋ねる。

「うん、それと、この街の統治も、ユニオンが取り仕切ってるんだ」

「でも、いいわけ？バルボスの紅の絆傭兵団って、5大ギルドのひとつでしょ？」

「ってことはバルボスに手出したら、ユニオンも敵に回るな」

「それはユニオンを統治するドンに聞いてみないと、なんとも言わないな」

シンクがカロールの代わりに答えた。

「んじゃ、そのドンに会うか。カロール、案内頼む」

「ちょっとそんなに簡単に会って……。ボクはあんまり……」

「じゃ、シンク、あんたが案内して」

「ユニオンは街の北側だ。ついてこい」

シンクを先頭に、一行はユニオン本部に向かう。

広場まで歩くと、カロルがキョロキョロと周りを見ている。

「あんた、何してんの？」

「え？な、なにっつて、べつに」

「ん？そこにいるのはカロルじゃねえか」

ユーリたちの前に、二人組の男がやってきた。

「どの面下げてこの街に戻ってきてんだ？」

「な、なんだよ、いきなり」

「おや、ナンの姿が見えないな？ついに見放されちゃったか、あはははっ！」

「ち、違う！いつもしつこいから、ボクがあいつから逃げてるの！」

「（これがあるから、最初ダングレスト行き気乗りじゃなかったんだな）」

「（だろうな）」

ユーリとシンクはカロルを見ながら小声で話した。

「あんたらがこいつ拾った新しいギルドの人？相手は選んだ方がいいぜ」

「自慢できるのは、所属したギルドの数だけだし。あ、それ自慢に

「ならねえか」

カロルは顔を俯く。

「カロルの友達か？相手は選んだ方がいいぜ？」

「な、なんだと！」

「あなた方の品位を疑います」

「ぶさけやがって！」

「あんた、言うわね。ま、でも同感」

「大の大人がよってたかって何やってんだかな」

「言わせておけば……！？」

男はシンクに気づいて、表情を変えた。

「お、お前、蒼き狼！」

「帰ってきやがったのかよ、くそっ」

男たちが悪態をついた時、街に鐘の音が鳴り響いた。

「何の音……？」

「やべ……また、来やがった……」

「行くぞ！」

そう言って男たちは走り去っていった。

「警鐘……魔物が来たんだ」

「魔物って……まさかこの震動、魔物の足音……」

「だとすると、こりや大群だな」

「ま、でも心配いらないよ。最近多いけど、ここの結界は丈夫で、破られたこともないしね。外の魔物だって、ギルドが撃退……」

カロールがそう言っただけ空を見上げた時、結界が突然消えた。

「……って、ええっ!!」

「結界が、消えた……?」

「一体どうなってんの!魔物が来てるのに!」

「ったく、行く場所、行く場所、厄介ごと起こりやがって……」

ユーリがため息をつきながら言った。

「おまえ、なんか憑いてるんじゃないのか?」

「……かもな」

「ユーリ、魔物を止めに行きましょう!」

ユーリたちは街の入り口の道に向かった。

*

ユーリたちの前には魔物の大群がいた。
イノシンに似た魔物、サイノッサスに、カニに似た魔物、クラブマ
ン、カブトムシに似た昆虫型の魔物、ビートル、トカゲのような魔
物、バシリスクがたくさんいる。

「すげーな、こんだけの魔物、どっから湧いてくんた」

「ちょっと異常だよ……！」

「ちよつとどころじゃないだろ！」

「魔物の様子も普段と違いますか？」

「来るよ！」

リタの言葉に、全員武器を構える。

「蒼破追連！」

「紅蓮連牙斬！」

「穢れなき汝の清浄を彼の者に与えん、スプラッシュ！」

「落破ペインショット！」

「煌めいて、魂揺の力、フォトン！」

「バウツ！」

ユーリは蒼破刃を2連続で繰り出し、シンクは紅蓮斬を3回連続で放ち、リタは水瓶を出現させ、広範囲に水流を放ち、カロルはカバンを振り回し、エステルは光の爆発を発生させ、ラピードは宙返りしながら尻尾で斬り上げて、魔物を撃退していく。しかし、魔物の勢いは収まることを知らない。

「あゝ、ウザイ！次から次へと……もおっ！」

リタは愚痴を言いながら、魔物たちを蹴散らしていく。

「きゃあッ！」

ユーリたちと違う方向か悲鳴が聞こえた。

そこには、逃げ遅れた女性がビートルに襲われていた。

「ちっ！」

ユーリは舌打ちをしながら、蒼破刃でビートルを倒した。

「あ、ありがとうございます……」

「礼はいい！走れ！」

ユーリの言葉に、女性は走った。

そして違う方向でも人が魔物に襲われようとしていた。

「くそつ、間に合わねえ！」

ユーリたちのいるところからでは間に合わない。

その時、一つの人影が魔物たちを斬り伏せる。

その人物は見た目は老人だが、老人とは思えない動きで魔物を蹴散らす。

「さあ、クソ野郎ども、いくらでも来い。この老いばれが胸を貸してやる！」

そう言つて老人は魔物に向かっていく。

「とんでもねえじじいだな。何者だ？」

「あれがドン。ドン・ホワイトホースだ」

「あのじじいねえ」

シンクの言葉を聞いて、ユーリはドンを物珍しそうな目で見た。

「ドンだ！ドンがきたぞ！」

「みんな、ドンに続けえ！」

「一気に蹴散らせ！俺たちの街を守るんだ！」

「我ら『オウラウビル暁の雲』の力を見せる!!」

ドンを先頭にギルドの人間が魔物に向かっていく。その後ろからフレン率いる騎士団の姿があった。

「フレン！」

意外な再会にエステルは驚いた。

「魔物の討伐に協力させていただく！」

「騎士の坊主は、そこで止まれえ！騎士に助けられたとあっては、俺らの面子がたたねえんだ。すっこんでろ！」

「今は、それどころでは！」

「どいつもこいつも、てめえの意志で帝国抜け出してギルドやってんだ！いまさら、やべえからって帝国の力借りるような恥知らずこの街にはいやしねえよお！」

「しかし！」

「そいつがてめえで決めたルールだ。てめえで守らねえで誰が守る」

ドンとフレンの言い合いはまだ続いている。

「何があっても筋は曲げねえってか……なるほど、こいつが本物のギルドか」

ドンを見てユーリはそう呟く。

「ちょっとそこの！案内しなさい」

リタがカロルに話し掛けた。

「そのつて、ボク？え、ど、どこに？」

「結界魔導器を直しに行くんです。このままでは魔物の群れに飲み込まれます！」

エステルとカロルは走りだし、リタはユーリとシンクに歩み寄る。

「ちょっとあんたらも！」

「それしかなさそうだな」

「行くぞ」

ユーリたちは結界魔導器のあるところに向かった。

*

リタは階段を上り結界魔導器の前に立つ。

「これなら、なんとかなるかも」

「リタ、後ろだ！」

シンクの言葉にリタは後ろを見た。そこには前にユーリたちが会った赤目の男たちがいた。

「結界は直させんぞ」

「ったく、ほんと次から次に！もうっ！！」

リタは愚痴を言いながら戦闘態勢に入る。

赤目の一人がリタに斬り掛かろうとする。

そこにシンクが横に入り、閻魔刀の鞘でその攻撃を防ぐ。

「リタはやらせない！氷烈斬！」

シンクは氷を纏った閻魔刀で赤目を斬り付ける。

赤目は一撃で倒れた。

「あ、ありがとう、シンク」

「礼ならいいさ」

そこにもう一人の赤目が襲い掛かる。

「目覚めよ、無慈悲で名も無き茨の女王、アイヴィーラッシュ！」

リタが詠唱すると、赤目の足下から茨が現れ、赤目を襲った。

「さすが、リタ」

シンクがリタをほめた。すると、リタは顔を赤くした。

「と、当然よ！ってこんなことしてる場合じゃない」

そう言ってリタは結界魔導器の前で術式を展開し、操作する。

「結界魔導器の不調はこいつらの仕業かよ」

「だろうな」

「でも、どうして？」

ユーリたちが倒れた赤目たちを見て言っていると、フレンと騎士二人がやってきた。

「こっちも大変みたいだな」

「なんだ、ドンの説得はもう諦めたのか？」

「今は、やれることをやるだけだ。それで、結界魔導器の修復は？」

「それはリタ次第だ。ま、大丈夫だな」

シンクはリタを見ながら言った。

「君は随分と彼女を信頼してるんだね」

「まあな。俺にとって、大切な人だからな」

シンクは最後の言葉は小声で言った。

「……魔核は残ってる。術式いじって、止めただけね。ん？これ、増幅器っ！？それにまた、この術式……。エフミドの丘のと同じ……」

リタは操作しながら呟く。

「魔物の襲撃と結界の消失。同時だったのは偶然じゃないかな？」

「……おそらくは」

「おまえが来たってことは、これも帝国のごたごたと関連ありってわけか」

「わからない、だから確かめに来た」

ユーリとフレンの話を聞きながら、シンクは考えた。

（おそらく裏にはバルボスやラゴウが絡んでいるのか……）

シンクはそう思いながらリタのいるところを見た。

「……それが、あれで、これが、こう！」

リタが術式を操作し終わると、街の結界魔導器が再び稼働した。

「さすが、リタ」

「よし、外の魔物を一掃する！外ならギルドも文句を言っまい」

フレンはそう言って騎士と共に走っていった。

「魔物の方はフレンに任せて、オレたちはユニオンにバルボスの話を聞きにいくぞ」

ユーリの言葉で、一行はユニオン本部に向かった。

*

ユーリたちはユニオン本部の入り口についた。

「ん？なんだおまえたち」

ユーリたちは入り口にいた男に話し掛けられた。

「ドンに会って話したいことがあるんだ。取り次いでくれ」

「5大ギルドに関係あることなんだ」

「見ない顔だな。どこのギルドだ？」

「どこって、どこでもないけど」

「……あいにくドンは魔物の群れを追って街を出てったぞ」

「魔物の群れを？」

カロールが首を傾げながら尋ねる。

「ああ、魔物の巣を一網打尽にするんだと」

「なるほど……教えてくれてサンキュな」

「ああ」

ユーリたちはユニオン本部の入り口から離れた。

「……ドンの手伝いをしたら、ドンに認めてもらえて……」

カロールは小さく呟いた。

「しょうがねえな。街で情報を探るか」

「……え？ドンの手伝いに行かないの？」

「魔物の巣の場所、知ってるのか？」

「あ、そっか……」

ユーリの言葉に、カロールは口ごもった。

「手詰まりみたいだし、あたしたち、ケープ・モックの調査に行ってくる」

「そんな勝手に」

「リタは面倒な仕事はさつさと終わらせたい性格なんだよ」

「けど、それなら、エステルも一緒ってこと？」

「そうですね。アレクセイにはそう言いましたし……」

ユーリは顎に手を当てて考え込む。

「だいじょうぶですよ。シンクもいますし、三人でもやれます」

「そうもいかねえだろ。ケガでもされたら、オレがフレンに殺される」

「いいの、ユーリ？」

「ま、有力な手掛かりもねえしな」

「なら、決まりだな。ケーブ・モック大森林はここから西だ。行く」

シンクの言葉に、ユーリたちは歩きだす。その様子を屋根から見ていた人影がいた。

「ケーブ・モック大森林とは。偶然ってあるもんだねえ」

*

くケープ・モック大森林く

「世の中にはこんな大きな木があるんですね……」

エステルは周りで生えている巨大な木の根に驚いていた。

「けど、ここまで成長すると、逆に不健康な感じがすんな」

「カロールが言っていたとおりね。ヘリオードで魔導器が暴走したときの感じになんとなく似てる」

「気をつける……誰がいるぞ」

そう言ってシンクは閻魔刀を抜く準備をしている。

「よっ、偶然！」

木の影から出てきたのは、なんとレイヴンだった。

「こんなところで何してんだよ？」

「自然観察と森林浴って感じだな」

「うさん臭い」

カロールがバツサリと言った。

「あれ？歓迎されてない？」

「本気で歓迎されてると思ったたのか？」

「そんなこと言っなよ。俺、役に立つぜ」

レイヴンが残念そうな顔で言った。

「役に立つってまさか、一緒に来たい、とか？」

「そうよ、一人じゃ寂しいしさ。何？ダメ？」

「背後に気をつけてね。変なことしたら殺すから」

「俺も何かしたら即刻斬り殺す」

リタとシンクはそうレイヴンに言って歩きだす。

「なあ、俺ってば、そんなにうさん臭い？」

レイヴンはユーリに尋ねる。

「ああ、うさん臭さが、全身からにじみ出てるな」

「どれどれ……」

レイヴンは自分の二の腕を嗅ぎだした。

「余計な真似したら、オレ何するかわからないんでそこんところはよろしくな」

そう言ってユーリたちはレイヴンも加えて森を進む。

*

太い木の根を歩いて少しするとユーリたちは後ろに來ているレイヴンに振り返る。

「まあ、俺のことは気にせず、よろしくやってくださいよ」

「どうします?」

「だったらおっさん、俺たちを納得させる何かを見せてくれ」

「そりゃ、オレも賛成だ。なんか芸とかないのか?」

シンクとユーリはレイヴンに言った。

「俺を大道芸人かなんかと、間違えてない?」

レイヴンは少し考え、向こうの木の根に歩きカロールに目を向ける。

「ちよいちよい、こっち来て」

「え……ボ、ボク……?」

カロールはレイヴンについて行った。ユーリたちは頭に「?」を作った。するとレイヴンだけ戻ってきた。

「ん？カロルはどうしたんだ、おっさん」

「う、う、うわぁあつ！ちょっと、一人にしないで〜！」

カロルはビートルに襲われながらこっちに来た。
カロルは武器を構えている。

「ほら、ガンバレ、少年！」

「くっ、くそおおっ！」

カロルはやけくそになろうとした。するとレイヴンが弓を構え、ビートルに放った。

「も、もう嫌ー！」

カロルは叫びながら逃げてきた。

「もうそろそろかね……」

レイヴンが呟くと、ビートルは何の前触れもなく爆発した。

「うわっ！」

「中で爆発した！？」

「どういつことだ……？」

「な、何したんです！？」

「防御が崩れた瞬間、打ち込んで中から……ボンてね!」

みんなの疑問にレイヴンは答えた。

「まったく……悪趣味な芸だ」

「いいんじゃないでしょうか?」

「……いいのか?」

「ええ」

「ま、いつか……」

「お、合格?」

「マ、マジで……?」

カロルは驚いた表情で言った。

「いいんじゃないか? そばにおいとけば、下手な真似したときに、色々やりやすいし」

「おいおい、色々って……」

「……それもそうよね」

シンクの言葉にリタは頷いた。

「なんか背筋が寒くなってきたんだけど……」

「えと、それなら、よろしくお願いします」

エステルはそう言ってお辞儀をした。

「はい、よろしく」

レイヴンはエステルに言い返す。

*

「……何か……声が聞こえなかった？」

一行が森を大分進んでいるとカロールが言った。

「うちをどこへ連れてってくれるのかのー」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「この声、どこかで……」

振り返ると、パーティがビートルに捕まっていて、飛んでいた。

「パ、パーティ……!？」

「なに？お馴染みさん？」

レイヴンが尋ねる。

「助けなきゃ……！」

「あーほいほい、俺様にお任せよっと……」

そう言つてレイヴンは変形弓を構え、ビートルが通りすぎざまに矢を放った。

「当たりました！」

矢は見事にビートルに命中した。

ユーリは走り、パティを受けとめた。

「ナイスキャッチなのじゃ」

ユーリはパティを下ろし、みんなのところに戻った。

*

「で？やっぱりアイフリードのお宝つて奴を探してるのか？」

「アイフリード……？」

「のじゃ」

パティは頷く。

「嘘くさ。本当にこんなところに宝が？」

「誰に聞いたんだ？」

「測量ギルド、『天地の窖』が色々と教えてくれるのじゃ。連中は世界を回つとるからの」

パティはシンクとリタの間に答えた。

「それでラゴウの屋敷に入ったのか。でも、結局何も見つからなかったんだろ」

「１００パーセント信用できる話の方が逆にうさん臭いのじゃ」

「ま、確かにそうかも」

「あんたは１００パーセントうさん臭いだろ（わよね）」

シンクとリタは声を合わせてレイヴンに言った。

「ふたり共、ひどいお言葉……」

「とりあえず、うちは宝探しを続行するのじゃ」

「一人でウロウロしたら、さっきみたいにまた魔物に襲われて危険なことに……」

エステルは心配そうにパティに言った。

「あれは襲われてたんではないのじゃ。戯れてたのじゃ」

パティは胸を張って言った。

「たぶん、魔物の方はそんなこと思ってないと思うけどな」

カロールが呆れ口調で言うと、パティの後ろからカマキリに似た緑色の魔物、グラスホッパーが現れた。

「パティ、後ろ……」

パティは海賊銃を抜き、グラスホッパーに数発放った。
グラスホッパーは力尽きて倒れた。

「つまり、ひとりでも大丈夫ってことか」

「一緒に行くかの？」

パティはユーリに尋ねる。

「せっかくだけど、お宝探しはまたの機会にしとくわ」

「それは残念至極なのじゃ。でもうちはそれでもいくのじゃ。サラバなのじゃ」

そう言ってパティは走っていった。

「行っちゃった……」

「本当に大丈夫なんでしょうか……」

カロールとエステルは不安そうに言った。

「本人が大丈夫って言ってるんだから、大丈夫なんですよ」

「ま、オレたちは先へ進もうぜ」

ユーリの言葉で一行は森の奥へと進んでいく。

*

ユーリたちは森の奥へとついた。その先にはオレンジ色の光が浮かんでいた。

「あれは……ヘリオードの街で見たのと同じ……エアルは弱いけど間違いない。でも……」

リタが言おうとした瞬間、後ろからドンッ！と巨大な影が降ってきた。

「みんな、気をつけろ！」

シンクの言葉に、全員後ろを振り返った。

そこにはサソリにも似た巨大な魔物、ギガラルヴァがいた。

「あ、あの魔物、ダングレストを襲ったのと様子が同じです!」

「来やがったぞ!」

ユーリの言葉と共に、全員武器を構える。

「気をつける!ギガラルヴァはちよつと手強いぞ!」

「シンクあの魔物知ってるの!？」

「ああ、まあな」

「だったら来る前に教えなさいよ!」

リタは魔術の詠唱をしながらシンクに怒鳴った。

「すまない……」

「話はあとだ!」

ユーリはニバンボシを抜き、ギガラルヴァを斬り付ける。

しかしギガラルヴァはあまり効いているようには見えない。

「紅蓮斬!」

シンクはギガラルヴァに向かって炎の斬撃を放つ。

ギガラルヴァは効いたのか、少し仰け反った。

「あれが弱点みたいね。だったら……灼熱の軌跡を以って野卑なる

蛮行を滅せよ、スパイラルフレア！」

リタはギガラルヴァに回転させた炎を放った。
その炎をダイレクトに受けたためかギガラルヴァはバランスを崩した。

「今だ、烈碎衝破！」

「ガウツ！」

「煌めいて、魂揺の力、フォトン！」

「爆碎ロック！」

「紅蓮連牙斬！」

「天の閃き！」

ユーリは地面に二本ボシを刺し衝撃波を放ち、ラピードは炎の闘気『紅蓮犬』を、エステルは光の爆発を発生させ、カロルはハンマーを地面に叩きつけ、シンクは紅蓮斬を連続して放ち、レイヴンは変形弓を上空に放ち、矢はギガラルヴァに降り落ちた。

全員の攻撃をともに受け、ギガラルヴァは力尽きたように倒れた。

「木も魔物も、このエアルのせいだわ！」

リタはそう言ってエアルの束に近づこうとするが、ユーリたちの周りにギガラルヴァが4匹、四方八方に現れ、ユーリたちを囲んだ。

「さすがにこの数は……」

「ああ、ここで死んじまうのか。さよなら、世界中の俺様のファン……」

「『世界一の軽薄男、ここに眠る』って、墓に彫つてやるからな！」

「そんなこと言わずに、『一緒に生き残ろうぜ』とか言えないの！？」

「お前ら真面目にやれ——」

ユーリとレイヴンのコントにシンクが怒鳴ろうとした時、スタッとユーリたちの前に白髪の男が降り立った。

男はその手に持つ赤く輝く剣を掲げる。男の周りには円を描くように術式が現れ、強い光を放った。

次の瞬間、ギガラルヴァたちの姿はなかった。

後ろにあるエアルの束も普通の緑色になっていた。

「誰……？」

「『デューク……』」

「え……？」

カロルは首を傾げ、シンクとレイヴンは男の名を呟いた。レイヴンはいみんなに聞こえない音量だったが、シンクの呟きは隣にいたリタに聞こえた。

*

デュークは一度、エアルの束を一瞥すると、すぐに立ち去ろうとした。

「ちょっと待って！」

そこにリタがデュークに叫び、デュークは歩みを止めた。

「その剣はなに！？見せて！」

リタの言葉にデュークは振り返り、リタはデュークが持つ赤く輝く剣を見る。

「今の一体なにをしたの？エアルを斬ったっていうか……ううん、そんなの無理だけど」

「知ってどうする？」

「そりゃもちろん……いや……それがあれば、魔導器の暴走を止められるかと思つて。前にも魔導器の暴走を見たの。エアルが暴れだしてどうすることもできなくて……」

「それはひずみ。当然の現象だ」

「ひ、ず……み……？」

デュークの言葉にリタは首を傾げた。

そこにエステルがデュークの前に出て、頭を下げた。

「あの、危ないところをありがとうございました」

「エアルクレーネには近づくな」

「エアルクレーネってなに？ここのこと？」

リタはそう言って、後ろにあるエアルの束に目を向ける。

「世界に点在するエアルの源泉、それがエアルクレーネ」

「エアルの、源泉……」

「デューク、さっきはありがとう」

シンクはそう言ってデュークに近づいた。

「シンクか……」

「二年ぶりだな」

「ああ、そうだな」

「おまえら、知り合いか？」

ユーリが二人に尋ねた。

「まあ、ちょっとな」

「……………」

デュークは無言で去って行った。

「あんた、あいつとどういう関係？」

「修行の時にこの森で会ってな。その時に一度戦い方を教わった」

「え？　じゃあ、シンク、やっぱりこの森に来たことあるんだ」

「道理でさっきの魔物のことも知っていたわけか」

「まあな。ところでリタ、もう調べることはもうないか？」

シンクはそう言ってエアルクレーネに目を向けているリタに尋ねる。

「ここだけ調べてもダメね。他のも見てみないと」

「確かあいつ、世界中にあるって言ってたよな？」

「ええ、確かに」

「それを探しだして、もっとよく見てみないと、確かなことは何もわかんない」

「なら、ダンゲレストに戻ってドンに会おうぜ」

ユーリの言葉に、全員賛成し、森を出ることにした。

ギルドの巣窟 ダングレストのケープ・モック大森林 魔物の襲撃、うさぐさ

次回はダングレストの話になります。

お楽しみに！

感想も待ってます！

ギルドの巣窟 ダングレスト ユニオン誓約（前書き）

今回は結構長くなりました……

更新が遅れたのは、グレイセスFを絶賛プレイしていたからです。
すいませんm（――）m

今回はシンクの新技はグレイセスFからの技です。
これからもグレイセスFの技出すと思います。

ギルドの巢窟 ダングレスト ユニオン誓約

ユーリたちはケープ・モック大森林の入り口にさしかかっていた。その時、大きな揺れが起きた。

「うわっ、何！？また魔物の襲撃？」

カロルが揺れに驚く。

ユーリたちは物影に隠れた。

すると、ビートルやグラスホッパーなど、たくさんの魔物が森に戻って行く。

「カロル、頭、上げんなよ！」

「リタ、気をつける！」

ユーリとシンクは二人に言う。

魔物たちが全員森に入ってしまったのを確認し、物影から出た。

「あ……あの人たち……」

「ドン……！」

その先にはドン率いるギルドの人間がいた。

「……てめえらが何かしたのか？」

ユーリたちを見るなり、ドンは尋ねた。

「何かって何だ？」

「暴れまくってた魔物が突然、おとなしくなって逃げやがった。何
いやった？」

「……ユーリ、あれです。エアルの暴走が止まったから……」

エステルが小声でユーリに言う。

「ボクたちが、エアルの暴走を止めたから、魔物もおとなしくなっ
たんでんです！」

「エアルの暴走？ほお……」

「何、おじいさん、あんた、なんか知ってんの！？」

リタが声を上げてドンに聞いた。

「いやな、ベリウスって俺の古い友達がそんな話をしてたことがあ
つてな」

「……ドンが南のベリウスと友達だって本当だったんだ……」

「何よ、そのベリウスっていつの」

「ノードポリカで闘技場の首領ドゥーチェをしているやつだ」

リタの間にシンクが前に出て言った。

「おまえ……シンクじゃねえか」

「久しぶりだな、ドン」

「え？シンクってドンの知り合い？」

カロルがシンクとドンのやり取りに驚いていた。

「ああ、ちょっとな」

「おまえさんとうとうして会うのは、一年ぶりだな」

「さっきの人といい、シンクって知り合い多いね」

カロルはシンクのことに驚きを隠せなかった。

「で？エアルの暴走がどうしたって？」

ドンが話を戻してカロルに尋ねた。

「本当大変だったんです！すごくたくさん、強い魔物が次から次へとでも……」

「坊主、そういうことはな、ひっそり胸に秘めておくもんだ」

「へ……？」

「誰かに認めてもらうためにやってんじやねえ。街や部下を守るためにやってんだかな」

「う、ごめんなさい……」

カロルはドンの言葉に、落ち込みながら謝った。

「ちょっと、すみません。見せてくださいますか？」

「ん？何だ？」

エステルがドンの部下を治癒術で治した。

「おおっ……治癒術か……ありがてえ……」

部下はエステルに礼を言った。

「……ん？そこにいるのはレイヴンじゃねえか。何隠れてんだ！」

「ちっ」

ドンは林に隠れていたレイヴンに気付いた。レイヴンは軽く舌打ちをしてやってきた。

「うちのもんが、他人様のところで迷惑かけてんじゃあるめえな？」

「迷惑つてなによ？ここの魔物大人しくさせるのにがんばったのよ、主に俺が」

「え！？レイヴンって、『天を射る矢』アルトスクの一員なの！？」

「どうも、そうらしいな」

「マジかよ……」

ユーリたちはレイヴンが天を射る矢の一員だということに驚いていた。

ドン はレイヴンの腹を剣の柄で殴った。

「いたた……じいさん、反則！反則だろ！」

「黙れえ！」

「ドン・ホワイトホース」

そこにユーリが横に入り、ドンはユーリに目を向けた。

「何だ？」

「会ったばかりで悪いが、あんたに折り入って話がある」

「ほお……おまえ、名前は？」

「ユーリだ。ユーリ・ローウェル」

「ドン、お話中、失礼します」

ユーリがドンに話をしようとした時、ドンの部下がドンに近づき、耳打ちをした。

「ん、わかった。野郎ども、引き上げだ。すまねえな。急用でダングレストに戻らにやならねえ。ユニオンを訪ねてくれりゃあ、優先して話を聞くから、勘弁してくれ」

ドンはユーリを見て言った。

「いや、約束してくれるなら、それでかまわねえよ」

「ふん、俺相手に物怖じなしか。てめえら、いいギルドになれるぜ」

そう言っただんは部下を引き連れ、ダングレストに戻っていった。

「で、どうよ？俺様の偉大さが伝わったかね？」

「偉大なのは、レイヴンじゃないんじゃない？」

「それはそうだな」

「なによ、すぐケチつけるんだから」

カロルの言葉に、シンクも同意して言った。

「さ、オレたちもダングレストに戻って、ドンに会ったらバルボス探しの続きだ」

そう言っただんは歩きだした。

「リタ、ユーリの用事が終わったら、わたしたちもアレクセイへ報告へ……」

「おい、リタ？」

エステルがリタに話すが、リタは考え事をしていて、シンクも声をかけた。

「……あ、何？」

「ユーリの用事が済んだら、俺たちもアレクセイに報告をしようって……おまえ、どうした？」

「な、なんでもない！ほら、あたしらも戻るわよ！」

リタはそう言って走っていく。

「どうしたんでしょう？」

「たぶん、エアルクレーネのことが気になってるんだろう」

「エアルクレーネ……ですか？」

「ああ」

エステルは先ほどのデュークのことを思い出しながら聞いた。

「エステル、シンク！早く行こうよ！置いてっちゃうよ！」

「今行く！行こう、エステル」

「はい」

カロルの声で、エステルとシンクはユーリたちのところに向かい、ユーリたちもダングレストに戻った。

*

ユーリたちはダングレストに戻ると、真っ先にユニオンへ向かった。途中、レイヴンと別れ、レイヴンは一足先にユニオンへ向かったのだ。

ユニオンのドンの私室に入ると、そこにはドンにレイヴン、他数人に、フレンがいた。

「よお、てめえら。帰って来たか」

「……ユーリ」

フレンが振り返りながら、驚きの表情で呟いた。

「なんだ、てめえら、知り合いか？」

「はい、古い友人で……」

「ほづ」

「ドンもユーリと面識があったのですね」

「魔物の襲撃騒ぎの件でな。で？用件はなんだ？」

「いや……」

口ごもるフレンにユーリは前に出た。

「オレらは紅の絆傭兵団のバルボスってやつ話を聞きにきたんだ

よ。魔核ドロボウの一件、裏にいるのはやつみたいなんだな」

「なるほど、やはりそっちもバルボス絡みか」

「……ということは、あんたもか？」

シンの言葉にフレンは頷き、ドンの前に出る。

「ユニオンと紅の絆傭兵団の盟約破棄のお願いに参りました。バルボス以下、かのギルドは各地で魔導器を悪用し、社会を混乱させています。ご助力いただけるなら、共に紅の絆傭兵団の打倒を果たしたいと思っております」

「……なるほど、バルボスか。確かに最近のやつのは行動は少しばかり目に余るな。ギルドとして、けじめはつけにやあならねえ」

「あなたの抑止力のおかげで、昨今、帝国とギルドの武力闘争はおさまっています。ですが、バルボスを野放しにすれば、両者の関係に再び亀裂が生じるかもしれません」

「そいつは面白くねえな」

「バルボスは、今止めるべきです」

「協力ってからには、俺らと帝国の立場は対等だよな？」

「はい」

ドンの言葉にフレンは頷く。

「ふんっ、そういつことなら帝国との共同戦線も悪いもんじゃあねえ」

「では……」

「ああ、ここは手を結んで、ことを運んだ方が得策だ。おいっ、ベリウスにも連絡しておけ。いざとなったらノードポリカにも協力してもらってな」

ドン is 近くの男に言っ、男は頷き、早足で部屋を出た。

「なんか大事になってきたね……」

カロルが小さく呟いた。

フレンはドンに書状らしきものを差し出す。

「こちらにヨーデル殿下より書状を預かって参りました」

「ほお、次期皇帝候補の密書か」

ドンは中身を開け、書状を読むと、

「読んで聞かせてやれ」

それをレイヴンに渡す。

そして、レイヴンが書状を読み上げる。

「『ドン・ホワイトホースの首を差し出せば、バルボスの件に関し、ユニオンの責任は不問とす』」

部屋にいたものが驚きの表情になる。

「何ですって……!?!」

「うわはっはっは!これは笑える話だ」

ドンが笑い、レイヴンがフレンに書状を見せる。

「……なんだ、これは……」

フレンの書状を持つ手が震えていた。

「どうやら、騎士殿と殿下のお考えは天と地ほど違うようだな」

「これは何かの間違いです!ヨーデル殿下がそのようなことを」

「おい、客人を特別室にご案内しろ!」「ドン・ホワイトホース、聞いてください!これは何者かの罠です!」

ドンは部下に命令し、部下はフレンを特別室、牢屋に連れていった。

「フレン……!どうして?」

「待て!へたに動けば、逆にあのフレンが危険にさらされる」

「……………」

フレンを追おうとするエステルをシンクが止めた。
ドンは椅子から立ち上がり、声を上げる。

「帝国との全面戦争だ！総力をあげて帝都に攻めのぼる！客人は見せしめに奴らの目の前で八つ裂きだ！二度となめた口聞かせるな！」
そう言つてドンはレイヴンたちを引き連れ部屋を出ていった。

「た、たいへんなことになっちゃったよ」

「おかげであたしらの用件、忘れられちゃったわよ」

「ドンも話どころじゃねえな」

「わたし、帝都に戻つて、本当のことを確かめてきます」

「だから、落ち着け。少し様子を見よう」

「わ……わかりました」

ユーリたちはまず、ユニオン本部を出た。

*

ユニオン本部を離れてすぐ、ユーリは突然自分の身の回りを探りはじめた。

「どうしたの、ユーリ？」

「財布、落としたみたいだ」

「こんなときに何やってんの！」

「ドンの中で落としたかな？ちよつと探してくる。そのあたりで待っててくれ」

「う、うん。早く探してきてよ！」

ユーリは一人ユニオン本部へ走っていった。

*

「まったく、何なのよ、ギルドって本当バカばっか」

ユーリと別れて、リタが悪態をついた。

周りを見ると、ギルドの人間は武装して、戦闘の準備をしていた。

「それがギルドだからな」

「だからって帝国と戦争なんて……」

リタが言おうとした時、ラピードが何かを見つける。

その先には、紅の絆傭兵団の人間が数人集まっていた。

「あいつら、紅の絆傭兵団の……」

「なんであんなところに……」

「今は後をつけよう。カロールとエステルはユーリが来るのを待っていてくれ」

「うん！」

「わかりました」

シンクはエステルとカロールに言うと、リタとラピードを連れ、後をつけた。

*

シンクたちは物陰に隠れて、紅の絆傭兵団の人間たちを見ている。連中は酒場らしき場所の前にいた。

「リタ……！」

そこにカロールがやってきて、声を出そうとしたとき、リタが止める。

「しっ……ガキンちょ、あんだ声でかい……」

そこにユーリとエステルもやってきた。

「……ありや、ちよつと無理矢理押し入るってわけにやいかなそうだな」

「でも、あの中にバルボスがいるとしたら……」

「指をくわえて見ているわけにもいかない」

「どうしょっか」

「いーこと教えてあげよう」

背後から声がして振り返ると、そこにはレイヴンがいた。

「……また、あんたか」

「いいのか？ ドンのところに行かなくて」

「よかないけど、青年たちが下手打たないようにちゃんとみとけてドンがさ。ゆっくり酒場にでも行つて俺様のお話聞かない？」

「わたしたちにはそんなゆっくりしてる暇は……」

エステルが断ろうとするが、

「いいから、いいから、騙されたと思って」

「そんなこと言われて、騙される奴がいると思って……！」

「騙されるのは、二度も三度も同じだ。けど、おっさん、『仏の顔も三度まで』ってことわざ、知ってるよな？」

シンクは言いながらレイヴンを睨んだ。

「そんな怖い顔しなくても、わかってますって。ほら、青年たち、笑って笑って。こっちょ」

ユーリたちはレイヴンについていった。

*

ユーリたちはレイヴンを先頭に、紅の絆傭兵団のいた酒場とは反対側の酒場『天を射る重星』にきた。

「ちよいと通してもらつよ」

レイヴンは隣の部屋の前にいる男に言つて通る。

ユーリたちもそれについていく。

そこは豪勢な部屋で壁には天を射る矢の旗が貼られてある。

「なんだ、ここは」

「ドンが偉い客迎えて、お酒飲みながら秘密の話するところよ」

「ここで大人しく飲んでいろと？」

「おたくのお友達が本物の書状持って戻ってくれば、とりあえず事

は丸く収まるのよね」

レイヴンは顎に手をあてながら言った。

「悪いけど、フレンひとりにいい格好させとくわけにやいかないんでね」

「わたしたち、この騒ぎの犯人を突き止めなければならないんです！もしバルボスが……」

「まあまあ、急いては事を仕損じる」

レイヴンは旗のある場所に歩く。そこには扉らしき場所があった。

「これは……？」

「この街の地下には、複雑に地下水道が張り巡らされている。その昔、街が帝国に占領された時、ギルドはこの地下水道に潜伏して、反撃の機会をうかがったんだと」

レイヴンが扉を見ながら説明する。

「まさか……ここがその地下水道につながってる……とか言わないよね」

カロルがおそろおそろ尋ねる。

「そのまさかよ。で、ここからこっそりと連中の足元に忍び込めるって寸法なわけよ」

「ここから忍び込んで奴らを捕まえる。回り道だが、確実だな」

「そういうこと。信じてよかったでしょ？」

「それは行ってみないとわからないな」

「やっぱおっさんは信用ならない？」

「当然、おっさんも付き合っただよな？」

ユーリの言葉に、レイヴンは残念な表情をする。

「あつらー？おっさん、このまま、バックれる気満々だったのに」

「おっさんにもいいかつこさせてやるってんだよ、ほら、行くぜ」

ユーリたちはレイヴンも加えて、地下水道の扉を開いた。

*

「うわぁ……真っ暗です……」

辺りは真っ暗だった。

「迷子になって永遠にでられねってのは勘弁だぜ」

「ほら、天才魔導士のお嬢ちゃんよ、ここは一つ、火の魔術でバーンと先を照らしてくれんかね」

「あたしをランプ代わりにしようつての？いい根性してるわね」

「落ち着け、リタ」

レイヴンに喧嘩腰のリタをシンクが宥める。

「リタ、なんとかありませんか？」

「うーん……無理。火の魔術は攻撃用なの。照明みたいに持続させるには、常時エアルを供給されないと。光照魔導器ルクス・ラスティアみたいだね」

「ありゃ……そうなの？」

「おっさんの当て、外れたな」

「ワン！」

「ん？どうした、ラピード」

ラピードが何かを咥えてきた。それはマイクに似た形をしたものだった。

「これ……もしかして魔導器？だいぶと傷んでるけど、なんとか使えそうね」

リタがそれを受け取り、魔導器を起動させた。すると、魔導器から光が照らされた。

「だ、大丈夫なの……爆発したりしない？」

カロルが少し驚きながら聞く。

「するわけないでしょ。これ光照魔導器の一種よ。あの充填器にエアルを補充して光る仕組みね」

リタはそう言いながら、目の前にある充填器らしきものを指差す。そこからは緑色のエアルが出ていた。

「さすがです、リタ」

「でもかなりガタきてるから、多分長持ちしないと思うわ」

「じゃあ、こいつが光ってるうちに先を行こうぜ」

ユーリの言葉でユーリたちは光照魔導器を手先に進む。

*

「ま、魔物……！」

カロルが下を見た。

そこには白いウォント、アルビノウォントや白いオタオタ、ホワホワなどがいた。

「……襲つて……来ませんね」

「恐らく光に弱いだろう」

「無理にことを構える必要はねえ」

ユーリがそう言ったとき、光照魔導器から光が消えた。辺りは暗くなつた。

「消える前にまたエアルを充填しないと」

リタがそう言ったとき、下からアルビノウォントが四匹出てきた。

「なっ……！」

「ちい！」

アルビノウォントは自分が持つ武器をユーリたちに振り下ろす。

全員は分散して戦う。

シンクはエステルと、ユーリはラピードと、リタはカロールとレイヴンで戦う。

「気をつける、エステル！」

「はい！」

シンクの言葉に、エステルは頷きながら剣を構える。

シンクはアルビノウォントの攻撃をかわし、閻魔刀を抜刀する。

「スターストローク！」

エステルは剣を振り上げ、斬撃を地面に走らせ放つ。

アルビノウォントに当たり、アルビノウォントはエステルに標的を向けた。

「こっちもいるぞ！紫電滅天翔！」

シンクは雷を纏った閻魔刀をフェンシングのように何度も突き刺し、

「碎け散れ！」

そのまま振り上げた。

アルビノウォントはそのまま消滅した。

他のみんなも、倒し終わった。

「……びっくりした……油断させておいて、攻撃してくるなんて……」

「魔物にそんな知恵、あるわけないでしょ」

リタはカロルの言葉を否定する。

「光に反応して襲ってきたんだろうな」

「そんなのがいるのか？」

「洞窟や海底といった場所に棲息する生物の中には光に対する耐性がなくなり、強い刺激として避けるものがある、です」

エステルが説明する。

「そっか……だから、明るい時は襲ってこないんだね」

エステルの説明に、カロルは納得した。

「あ、さっきと同じのがあるよ！」

カロルが指差す場所に先ほどと同じ充填器があった。ユーリは光照魔導器にエアルを充填する。

「おほ、なるほどねえ」

「ようは消えないように注意して充填しながら進めってことだな」

「ワン！」

*

ユーリたちは光照魔導器にエアルを充填しながら、進んでいくとあるものを見つけた。

そこには壁に文字が刻んであった。

「なんだ、こりゃ？」

ユーリが首を傾げていると、エステルが壁の字を読み上げた。

「……かつて我らの父祖は民を護る務めを忘れし国を捨て、自ら真の自由の護り手となった。これ即ちギルドの起りである。しかし今や圧制者の鉄の鎖は再び我らの首に届くに至った。我らが父祖の誓いを忘れ、利を巡り互いの争いに明け暮れたからである。ゆえに我らは今一度ギルドの本義に立ち戻り持てる力をひとつにせん。我らの剣は自由のため。我らの盾は友のため。我らの命は皆のため。ここに古き誓いを新たにす」

「ねえ……これって『ユニオン誓約』じゃない？」

「何よ、それ？」

リタがカロルに尋ねる。

「ドンがユニオンを結成した時に作られた、ユニオンの標語みたいなもんだよ」

「自分たちのことは帝国に頼らず自分たちで守る。そのためにはしつかり結束し、お互いのためなら命もかけよう、みたいなことね」

レイヴンが言葉を紡いだ。

「でも、なんでこんなところに誓約がかかれてるの？」

「ユニオンってのは帝国がこの街を占領した時に抵抗したギルド勢力が元になってんのよ。それまでギルドってのは、てんでバラバラ好き勝手やってて、問題が生じた時だけ団結してた。で、事が済めばまたバラバラ。帝国に占領されて、ようやくそれじゃまずいって悟った訳ね」

「そのギルド勢力を率いたのが、ドンなのか？」

「そそ。そんな時、この地下水道も大いに役に立ったはずよ」

「じゃあ、その時ここで結成の誓いを立てたってことなんだね」

「そういうことみたいね。確かに誓約書の実物がどこかにあるって話だったけど、こんな壁の落書きとはね」

レイヴンは誓約書を見ながら言った。

「壁に書かれた誓約書なんて、なんか素敵ですね」

エステルはそう言つと、ある文字を見つけた。

「ここ……アイフリードって書いてあります」

「ああ、あの大悪党って噂の海賊王か」

ユーリは思い出しながら言った。

「ドンが言うには一応、盟友だったそうよ。でも、頭の回る食えない人物で、あのドンですら相手すんのに苦労したってさ」

「それでも盟友とか言うあたり大した器のじいさんだな、ドンってのは」

「……我らの命は皆のため……か……」

カロルは小さく呟いた。

「面白いもんが見れたが、今はバルボスだ、そろそろ行こうぜ」

ユーリたちは誓約書を後にし、先を進む。

*

出口らしき場所に出ると、そこは酒場だった。

「ここは……」

「バルボスがアジトに使ってる街の東の酒場、つまり……」

「俺たちが忍び込もうとした場所だな」

レイヴンが言おうとした言葉をシンクが言った。

「じゃあ、このどこかにバルボスが……？」

「上があるみたいだな……上がってみるか」

ユーリたちは二階へ行き、階段を上った。

*

ダングレストの外では、ギルドと騎士団が睨み合っていた。その様子をバルボスが椅子にふんぞり返りながら見ていた。後ろにはラゴウがいた。

「バルボス！これはどういうことです！」

「何を言っているのか、ワシにはさっぱりだな」

ラゴウとバルボスは言い合っていた。

「例の塔と魔導器の件です！私は報告を受けていませんよ！」

「なぜ、そんなことを報告しなきゃならない？」

バルボスの言葉に、ラゴウは険しい表情をする。

「な、なんですと！？雇い主に黙ってあんな要塞まがいな塔を……
それに『海凶の爪』リヴァイアサンのツメまで勝手に使って！」

「ワシは飼い犬になったつもりはない。ただおまえの要望どおり、魔核を集めたのだ。そのおかげであの天候を操れる魔導器を作れたんだろう」

バルボスは振り返りながらラゴウに言った。

「誰が余った魔核を持っていたといいと言いました!？」

「お互い不可侵が協力の条件だったはずだがな」

「な、なにを……！」

「ワシが貴様のやることに口出しをしたか？」

「……バルボス、貴様！」

「執政官様がお帰りだ」

バルボスは部下に命令した。

「覚えておきなさい！貴様のような腹黒い男はいつか痛い目を見ますよ！」

「貴様がな」

そこにユーリたちがやってきた。

「あ、あんたら！」

「悪党が揃って特等席を独占か？いいご身分だな」

「その、とっておきの舞台を邪魔するバカはこのどいつだ？」

そう言いながら、バルボスはユーリたちを睨む。

「ほう、船で会った小僧どもと蒼き狼か」

「この一連の騒動は、あなた方の仕業だったんですね」

エステルは指を指しながら言った。

「それがどうした。所詮貴様らにワシを捕えることはできまい」

「はあ、どういう理屈よ」

「悪人つてのは負けることを考えてねえってことかよ」

「なら、ユーリもやっぱり悪人だ」

カロルは笑みを浮かべながら言った。

「おう。極悪人だ」

「なら、俺たちもだな」

「やれやれ、造反確定か。面倒なことしてくれちゃって」

ユーリとシンクが笑みを浮かべていると、レイヴンが小さく呟いた。

「ガキが吠えおって」

バルボスが言うと、紅の絆傭兵団の人間が武器を構える。
ユーリたちも武器を構える。

「手向かうか？前に言ったはずだ。次は容赦しないと」

「その方が暴れがいあるってもんだ」

「とつとと始末しろ！」

バルボスが怒鳴ったとき、外から爆発音がした。

「バカどもめ、動いたか！これで邪魔なドンも騎士団もぼろぼろに成り果てるぞ！」

「まさか、ユニオンを壊して、ドンを消すために……！」

「騎士団がぼろぼろになったら、誰が帝国を守るんです？ラゴウ、どうして……あつ」

エステルは気付いたような顔をする。

ユーリたちもその意図がわかった。

「なるほど、騎士団の弱体化に乗じて、評議会が帝国を支配しようってカラクリね」

「で、紅の絆傭兵団が天を射る矢を抑えてユニオンに君臨する、と」

「なんてこと……」

「バカの考えそうな浅知恵だな……」

「騎士団とユニオンの共倒れか。フレンの言ってた通りだ」

ユーリたちはバルボスを睨みながらそれぞれ言った。
特にシンクは呆れ口調で言った。

「ふつ、今さら知ってどうなる？どうあがいたところで、この戦いは止まらない！」

「それはどうかな」

「そして、おまえらの命もここで終わりだ」

バルボスがそう言った時、外から足音が聞こえた。

「つたく、遅刻だぜ」

ユーリはその足音を知っていた。
それは馬に乗ったフレンだった。

「フレン！？」

エステルは驚きの声を上げる。

「止まれーっ！双方刃を引け！引かないかー！」

フレンはギルドと騎士団の間に入った。

「私は騎士団のフレン・シーフォだ。ヨーデル殿下の記した書状をここに預かり参上した！」

その手には本物の書状があった。

「帝国に伝えられた書状も逆臣の手によるものである！即刻、軍を退け！」

フレンは騎士団に叫ぶ。
ドンがフレンに近づく。

「戻ってこねえかと思っただぜ」

「あいつを見捨てるつもりは、はなからありませんので」

その様子を見たバルボスは怒りの表情をラゴウに向ける。

「ラゴウ、帝国側の根回しをしくじりやがったな!!」

「ひっ……」

「ちっ……!!」

バルボスは舌打ちをすると、部下に命令した。
部下は銃らしき魔導器をフレンに向けた。

「ユーリ!あの人、フレンを狙ってます!」

エステルがそう言うと、カロールがラピードがくわえていた煙管を部下に投げた。煙管は見事に命中した。

「当たった!」

「ナイスだ、カロール」

「ガキども!邪魔はゆるさんぞ!」

バルボスは部下の持っていた銃の魔導器を持ち、放った。

「うわぁぁぁ！」

「きゃぁぁぁぁ！」

ユーリたちは避け、砲弾は壁に当たり、火を噴いた。

「逃げろ、出口に向かって走れ」

ユーリはそう言ってバルボスに向かう。

「ユーリ、危ない！」

「エアルを再充填するまで、少し間があるはず。その隙を狙って……」

リタが言うと、銃型の魔導器は再充填に入った。

「今だ！」

「遅いわぁ！」

しかし、リタの思っていたより再充填は早かった。

「うそ！？エアルの充填が早い！」

「危ない、リタ！」

シンクがリタを庇おうとした時、頭上を何かが通り、バルボスを攻撃した。

「なっ……なんだあつ……！」

その正体は竜使いだった。

「なんだ、ありゃ」

レイヴンは見るのは初めてのため、驚いていた。

「また出たわね！バカドラ！」

そう言ってリタは魔術の詠唱に入った。

「待て、リタ！今はバルボスだ！」

「あたしの敵はバカドラよ！」

「今はほつとけ！」

「ちっ！ワシの邪魔をしたこと、必ず後悔させてやるからな！」

バルボスはそう言いながら、チェーンソーに似た魔核のはめられた魔導器を掲げる。

すると、バルボスは宙に浮いた。

「うそっ！飛んだ！」

「おーお、大将だけトンスラか」

「しかもお決まりの捨て台詞だな」

バルボスは宙に浮いたまま、どこかへと飛んでいった。
竜使いはそれを追おうとする。

「あ！まて！バカドラ！あんたは逃がさないんだから！」

リタは竜使いの前に出ようとするが、ユーリが先に前に出た。

「やつを追うなら一緒に頼む！羽のはえたのがいないんでね」

「あんた、なに言ってるの！こいつは敵よ！」

「オレはなんとしてもやつを捕まえなきゃなんねえ」

「下町の魔核のため……だな」

「ああ、そうだ……頼む！」

ユーリは竜使いに向き直って言う。
竜使いは竜をユーリに近づけた。

「助かる！」

ユーリは竜使いに礼を言うと、竜使いの後ろに乗った。

「待って！ボクたちも……！」

「こりやどう見ても定員オーバーだ！」

ユーリの言う通り、竜にはもう乗れる場所はない。

「でも、ボクたちも……！」

「おまえらは留守番してろ！」

「そんな……！」

「ちゃんと齒磨いて、街の連中にも迷惑かけるなよ！」

「ユーリのバカあっ！」

「フレンにもちよつと行ってくるって伝えといてくれ！」

そう言つてユーリは竜使いとともにバルボスを追つていった。

「ボクたちも追わないと！」

「でもどこに行つたのかわからないじゃない！」

カロルの言葉にリタは怒鳴つた。

「いや……あの方角には確か、竜巻が出ていた場所だ」

シンクは思い出したように言つた。

「じゃあ、ユーリはそこへ!？」

「恐らくな」

「じゃあ、行こう!」

「おっさんパス。ドンに報告に行かないといけないから」

レイヴンは手を挙げて言った。

「ああ、行こうみんな！」

「はい！」

「うん！」

「ええ！」

「ワン！」

シンクたちはレイヴンと別れ、ユーリと竜使いの向かった方向に向かった。

ギルドの巣窟 ダングレスト ユニオン誓約（後書き）

次回は第一章ラスト！

そして、シンクの第一秘奥義を出します。

秘奥義はグレイセスFのあのキャラの技です。

お楽しみに！

感想もお願いします！

歯車の楼閣　ガスファロスト　クリティアの槍使い、駆け付けた友（前書き）

今回、シンクの秘奥義が出ます。

書いているうちにシンクの戦闘スタイルってグレイセスFのアスベルと大分似てるんですよ。

とにかく、今回で第一章は終了です。

楽しんで見てください。

シンクたちは竜使いと共に飛んでいったユーリを追って、ダングレ
ストの北東にある嵐の吹き荒れていた場所に向かっていった。

「おーい！待ってくれよー！」

後ろから走ってくる人影があつた。
それを見たシンクたちは驚いた。

「レ、レイヴン！？」

「はあ……はあ……やっと追いついた……おっさん疲れたよ」

レイヴンは息を荒くして、膝に手をつけた。

「なんで、来てんだよ？ドンに報告は？」

「それがさあ、聞いてよ。ドンが、バルボスなんぞになめられちゃ
いけねえって言うって俺様に青年たちと一緒に行ってこいつて」

「ついてくる気なの、あんた？」

リタは疑いの目をレイヴンに向けた。

「いいんじゃないでしょうか？」

「確かにな。おっさんも“一応”強いからな」

「一応って……」

シンクたちはレイヴンと共に歩き出した。

*

ユーリと竜使いが向かった方向に向かうと、そこには竜巻が吹き荒れていず、代わりに巨大な歯車の塔が立っていた。

「うわあゝ大きい塔」

塔を見ながらカロールが言った。

「でも、竜巻なんて吹いていませんね」

「どういうことだ……」

「この塔……もしかして」

「どうしたのよ、天才魔導少女？」

シンクの隣で考えているリタを見て、レイヴンが尋ねた。

「前にラゴウの屋敷で見た魔導器、覚えてる？」

「天候を操る魔導器だろ？」

「そう。それと似たのが、この塔にあるのなら、シンクたちが言っていた竜巻も発生させられる。ということは……」

「ここにバルボスがいる……か？」

「うん」

シンクの言葉にリタは頷いた。

「じゃあ、ユーリはここに来てるんだね！」

「ついでにバカドラもよ！」

リタは右拳を震わせながら言った。

「それじゃあ、すぐに行きましょう！」

エステルがそう言って目の前の大きな扉を開こうとする。カロールも一緒に開けようとするが、扉はびくともしない。

「どうやら正面は無理っぽいな」

「んじゃあ、あそこからはどうよ？」

レイヴンがある場所を指差しながら言った。

そこには、梯子があった。

シンクたちは梯子を伝って上に登った。

全員が登り終わると、目の前に紅の絆傭兵団と鳥に似た魔物、ホー
スラプターが現れた。

「あらら……豪勢なお出迎えで……」

レイヴンが呆れ口調で呟いた。

「貴様ら、どうやってここに！」

「おまえらなんか言う言葉はない」

「ほざけ、やれ！」

男の言葉でホースラプターと部下達はシンクたちに襲い掛かった。
シンクたちも武器を構える。

「みんな、行くぞ！」

「ええ！」

「はい！」

「うん！」

「ワン！」

「おおよ！」

全員が頷き、戦闘に入った。

*

「紅蓮斬！」

シンクは紅蓮斬で大剣を持った大男を切り裂いた。

「はい、これで最後！」

リタはファイアボールでホースラプターを撃ち落とした。

レイヴンも紅の絆傭兵団を変形弓で切り裂き、素早く矢をホースラプターに放った。

とりあえず周りは片付いた。

「おっ……やってるな」

シンクたちの後ろから声が聞こえた。

そこにはユーリがいた。

「ユーリ！」

エステルはユーリに気付き、ユーリに抱きついた。

「おわつと……ちょっと、離れろって……」

「大丈夫ですか？怪我はしてませんか？」

「なんともないって。心配しすぎ」

ユーリに言われ、エステルはユーリから離れた。

「おまえらも……大人しくしとけって言つたのに」

「だって、みんなユーリのことが心配で！」

「ちょっと。別にあたしは心配なんてしてないわよ」

「俺もだ」

「おっさんも心配で心配で」

「嘘つけ。っていうか、なんでおっさんまでわざわざ来てんだ？」

ユーリの問いに、レイヴンはシンクたちに言つたのと同じ説明をした。

「そもそも、おまえたち、どこから入ってきてんだよ」

「仕方がないだろ。正門が閉まっていたからな」

「だからってなあ……」

そこにユーリの後ろから女性がやってきた。青い髪に長い触角が特徴のクリティア族で、グラマラスな女性だった。女性を見たレイヴンは目をギョツとした。

「……だ、誰だ、そのクリティアっ娘は？どこのお姫様だ？」

「おっさん、食い付きすぎ」

「オレと一緒に捕まってたジュデイス」

「こんにちは」

ユーリが紹介し、ジューデイスはシンクたちに挨拶をした。
カロールたちも自己紹介した。

「ボク、カロール！」

「エステリーゼって言います」

「ボクらはエステルって呼んでるんだ」

「リタ・モルディオ」

「シンクだ」

「そして俺様は……」

「「おっさん」」

リタとシンクは同時に言った。

「レイヴン！レ・イ・ヴ・ン！」

レイヴンはすぐさま否定した

「そういう言い方する人って信用できない人多いよね」
「なーんか、納得いかないわ」

「ま、いいんじゃないか？とりあえず」

「ウフフ……愉快な人たち」

ジユデイスはそんなユーリたちを見て微笑む。
ジユデイスの言葉に、レイヴンは反応する。

「おお？なんだか好印象？」

「バカっぽい……」

リタが呆れ顔で呟いた。

「ジユデイス、あなたはここへ何しに来てたんです？」

エステルがジユデイスに尋ねた。

「私は魔導器を見に来たのよ」

「わざわざこんな所にか？何しに？」

「私は……」

「ふらふら研究の旅してたら捕まったんだと」

ジユデイスの言葉を遮るようにユーリが言う。

「ふーん。研究熱心なクリティア人らしいわ」

「……………」

「水道魔導器の魔核は取り返せたのか？」

「残念がらな」

「じゃあ、この塔のどこにあるのかなあ……」

カロルは上を見上げたとき、上の階から紅の絆傭兵団の一人が大剣を振り下ろしながら降りてきた。

「うわあっ！」

「ちっ」

全員身構えたその時、何者かが、紅の絆傭兵団を斬り伏せた。

「大丈夫か！」

その人物はフレンだった。

「フレン！？」

全員が驚いた表情をした。

「あんた、小隊長なんだろ？ひとりで何しに来たんだ」

「人手が足りなくてね。それにどんな危険があるかも分からなかったし」

「衝突はもう大丈夫なんです？」

エステルは言葉に、フレンは頷いた。

「ドンが真相を伝えたので、みな落ち着きを取り戻しました。もう衝突の心配はありません。ラゴウの身柄は部下が確保した。街の傭兵たちはユニオンが制圧した。あとはバルボスだけだ。危険ですからエステリーゼ様はユーリたちとここにいてください」

「ひとりで行くななんて危険です！わたしたちも一緒に行きます！」

エステルはフレンを止めようとする。

「そんな、いけません！」

「待てよ、こつちもバルボスには色々要因縁があるんだ。ここまできて止まる気はねえ」

「それにエステルはどのみちあんたを追いかけて行くぞ」

「ユーリ、シンク……」

二人の言葉に、フレンは少し考えた。

「……分かった。なら一緒に行こう。時間もないし、その方がまだ安全だろう」

「話はまとまった？じゃ、行くわよ」

リタの言葉で、みんなは歩きだす。しかしレイヴンは立ち止まっていた。

ユーリは振り返る。

「どうした、おっさん？」

「あ、いや……こんな立派な塔に住んでいたら、自慢できるだろうなあと思ってねえ」

「ふーん……ラピード、行こうぜ。ついでにおっさんも……」

「俺の方がついでかよ」

レイヴンはユーリが行ったのを確認した。

「いい歳して、かくれんぼ？ちょっと顔出してくれてもいいんじゃないの？」

レイヴンの後ろからデュークが現れた。

「若者ががんばってんだ、ちつとは手、貸してくれよ」

「もしその必要があればそうする。今は必要と感じない」

「またまた。あんたにも目的があるのはわかるけどさ」

「……貴様の道化に付き合っている暇はない」

「ほんと、ひどいお言葉」

デュークは素っ気ない態度で去ろうとする。

「ちょい待った。一つ聞きたいんだけどさ」

「…………なんだ？」

「青年二号…………いや、シンクのこと、どこまで知ってるわけ？」

「…………知っていても、貴様に教える筋合いはない」

「あら、そう…………」

そう言つて、レイヴンもユーリたちのところに向かった。

*

ユーリたちはガスフロストの仕掛けや敵をなんとか切り抜け、頂上までたどり着いた。

中心には魔導器らしきものがバチバチと眩い光を放っていた。

その近くにはチェーンソー型の剣の魔導器を持ったバルボスがいた。

「性懲りもなく、また来たか」

「待たせて悪いな」

「もしかして、あの剣にはまってる魔核、水道魔導器の…………！」

リタはバルボスの持つ剣を見て言った。

「ああ、間違いない……」

「分をわきまえぬバカどもが。カプワ・ノール、ダングレスト、ついにガスファロストまで！忌々しい小僧どもめ！」

バルボスはユーリたちを睨みながら忌々しげに言った。

「バルボス、ここまでです！潔く縛に就きなさい！」

「ラゴウも捕まった。次はあんただぜ」

「間もなく騎士団も来る。これ以上の抵抗は無駄だ！」

「そう、もうあんた終わりよ」

「ふんっ、まだ終わりではないわ！十年の歳月を費やしたこの大樓閣ガスファロストがあれば、ワシの野望は潰えぬ！」

バルボスは魔導器の剣を掲げながら、声高らかに言った。

「あの男」と帝国を利用して作り上げた、この魔導器があればな
！」

「あの男」……？」

フレンはバルボスの言葉に、眉をひそめる。

バルボスは魔導器の剣をユーリたちに向ける。剣から衝撃波が放たれ、爆発が起こる。

ユーリたちは飛び上がり、着地する。

「下町の魔核をくだらねえことに使いやがって」

バルボスは魔導器の力で下りてきた。

「くだらなくなどないわ。これでホワイトホースを消し、ワシがギルドの頂点に立つ！ギルドの後は帝国だ！この力さえあれば、世界はワシのものになるのだ！手始めに失せろ！ハエども！」

そう言つてバルボスは魔導器の剣を向け、衝撃波を放つ。ユーリたちの周りが爆発を起こした。

「大丈夫か、みんな！！」

「あの剣はちつとやばいぜ」

「ちつとどころじゃないぞ」

「やばいつていうか……こりゃ反則でしょ」

「圧倒的ね」

ユーリたちはバルボスの持つ剣を見ながら言った。

「グハハっ！！魔導器とバカにしておつたが使えるではないか！」

高らかに笑いながら、バルボスは魔導器の剣を掲げ、ガスファロス
トの周りが爆発を起こす。

「そんな……！」

「どうした小僧ども。口先だけか？」

「ふん、まだまだ」

「お遊びはここまでだ！ダングレストごと、消し飛ぶがいいわ！」

バルボスが言うと、魔導器の剣からエアルの渦が収束される。
その時、

「伏せる」

頂上のところから声が聞こえた。

その人物はデュークだった。

デュークは自分が持つ剣を掲げ、ケープ・モック大森林の時のように、彼を囲むように術式が展開される。

「なにっ!？」

バルボスの持つ魔導器の剣が異音を上げた。

まるでデュークの剣とバルボスの剣が呼応するように見えた。
その時、周りが光に包まれた。

光が収まると、バルボスの剣は寸断されたように折れていた。

「あれは……?」

「デューク……!」

シンクはデュークを見て、驚きの表情を浮かべた。

「ヒマも興味なかったんじゃないの？」

レイヴンもデュークを見ると、誰にも聞こえない音量で呟いた。
デュークは一度、シンクを見ると、立ち去っていった。

「あいつ……！」

「リタ！今はよそ見すんな！」

バルボスは折れた剣を一度振る。しかし、魔導器の剣は機能を失い、停止した。

「……くっ！貧弱な！」

「形勢逆転だな」

「……賢しい知恵と魔導器で得る力など紛い物にすぎん……か」

そう言つてバルボスは、何のしかけもない大剣を構えた。

「所詮、最後に頼れるのは、己の力だけだったな。さあ、おまえら剣を取れ！」

「あちゃゝ、力に酔つてた分、さっきまでの方が扱いやすかったのに」

「開き直ったバカほど、扱いにくいものはないわね」

バルボスを見ながら、レイヴンとリタはうんざりしたように言った。

「ホワイトホースに並ぶ兵、“剛嵐のバルボス”と呼ばれたワシの

力と……ワシが作り上げた『紅の絆傭兵団』の力、とくと味わうがよい――！」

バルボスが叫び、戦いの狼煙は上がった。

＊

「来い、僕どもおっ――！」

バルボスは左腕を挙げながら叫ぶ。

それに呼応するように、四方の齒車の橋から紅の絆傭兵団の面々が出てきた。

「後悔しやがれえ――！」

ユーリとフレンはバルボスに向かい、相手をする。

シンクたちは他の紅の絆傭兵団に囲まれていた。

「邪魔だ！ 朧月夜――！」

シンクは満月を描くように回転しながら紅の絆傭兵団を閻魔刀で切り裂く。

「裂旋スマッシュ――！」

カロールは武器を振り回しながら、周囲の敵を吹き飛ばす。

「天月旋！円月！」

ジユデイスは敵を数人蹴り上げ、回転しながら槍で切り裂いた。

「邪悪なる魂揺、光の楔にて滅さん、グラシャリオ！」

エステルは敵に向かって北斗七星を形の光を発生させ、七つの爆発を発生させた。

「氷結せし刃、鋭く空を駆け抜ける、フリーズランサー！」

リタは無数の氷の刃を撃ちだした。氷の刃は紅の絆傭兵団の数人に突き刺さった。

「回つときなあ！」

レイヴンは折りたたんだ変形弓と小太刀で敵を切り裂く。

「更に飛んでけ！」

更にレイヴンは周囲8方向に、同時に矢を放った。矢は見事にすべて命中した。

「ガウッ！」

ラピードは周囲の敵を回転しながら攻撃する“閃空烈破”で敵を攻撃する。

しかし、なかなか数が減らない。

「ああっ！もううざったい！」

「倒しても倒しても出てくるよ！」

リタは減らない敵に嫌気をさし、カロルは怖じ気づいてきた。

「あれは……！」

シンクは歯車の橋の袂にあるあるものを見つけた。
それは制御装置らしきものだった。

「あれだ！」

「えっ！？シンク！？」

シンクは敵をはねのけながら、装置に駆け出し、閻魔刀を振り下ろした。

装置はバチバチと火花を放ち、壊れた。

装置が壊れたと同時に、その装置のあった場所の橋の歯車がクルクルと回り、折りたたまれた。

「なるほど、あの装置を壊せばいいのね」

「すごいや、シンク！」

「じゃあ、わたしたちも！」

「ワンツ！」

ジューデイスたちもさっきので納得し、それぞれ他の装置を壊していった。

やがて全ての装置が壊れ、もう敵が増えることもなくなった。

「やってくれおったな！」

ユーリとフレンを相手にしているバルボスはシンクたちを睨んだ。

「よそ見してる暇あるのかよ？蒼破刃！」

「魔神剣！」

ユーリは青い衝撃波を、フレンは地を這う斬撃をバルボスに放った。バルボスは大剣の腹で防御した。

「なめるなあ！」

「ちっ！さすがにギルドの首領やってるだけはあるな」

「ああ、強い」

「今度はこっちの番だ！ハンマーロール！」

バルボスは左腕のハンマーを振り回した。

ユーリとフレンは当たるギリギリで交わした。

「しぶといハエどもが！」

バルボスはなかなか倒れない二人を見て、悪態をつく。

「紅蓮斬！」

そこに、炎の斬撃がバルボスを襲う。

「ぬおっ!?!」

「俺が止めを刺す」

「「シンク!」」

放ったのは青いオーラを放っているシンクだった。
今のシンクはオーバーリミッツ状態であった。

「くっ! 蒼き狼か」

「あんたにドンはやらせない!」

「ほざけ! ワシがギルドの頂点にふさわしい男なのだあ!」

そう言つてバルボスは右目の義眼から光線を放った。
シンクは横に体を捻り、避けた。

「そんな夢物語、夢だけで見てろ! 紅蓮連牙斬!」

シンクは叫びながら、紅蓮斬を連続して放つ。

「一瞬で決める! この技で沈め!」

シンクの全身から炎が吹き上げた。そして、バルボスに向かい、一瞬で切り抜け、

「緋鳳、絶炎衝!」

斬撃と炎の同時攻撃を見舞った。

「ガッ……ハア……！」

バルボスは口から血を吐き出し、服が所々焦げていた。辺りには紅の絆傭兵団はバルボス以外いなかった。

「もう部下はいない。器が知れたな」

「分をわきまえないバカはあんただったってことだ」

「ぐっ……ハハハっ……な、なるほど、どうやらそのようだな」

ユーリとシンクの言葉に、バルボスは息苦しそうに笑う。

「ではおとなしく……」

「これ以上、無様をさらすつもりはない」

エステルの言葉を遮り、バルボスは言い放った。そして、ユーリを見た。

「……ユーリとか言ったか？おまえは若い頃のドン・ホワイトホースに似ている……そっくりだ」

「オレがあんなじいさんになるってか。ぞっとしない話だな」

「ああ、貴様はいずれ世界に大きな敵をつくる。あのドンのように。……そして世界に食い潰される」

そして、バルボスは今度はシンクを見た。

「貴様もだ、蒼き狼」

「俺は蒼き狼じゃない。シンクだ」

「シンク……そうか。貴様はいずれ自らの存在に絶望するだろう」

「……どうということだ？」

「クッククツ……」

シンクの問いにバルボスは薄く笑った。

「悔やみ、嘆き、絶望した貴様等がやってくるのを、先に地獄で待つでしょう」

そう言つてバルボスは後ろに下がろうとする。

後ろには何もなく、あるのは底が見えない下のみ。

ユーリ、フレン、エステルは駆け寄るが遅かった。

バルボスは下に落ち、ガスファロストの底へと消えていった。

残ったのはユーリたちと、バルボスが持っていた壊れた魔導器の剣のみだった。

*

ユーリたちはガスファロストの入り口にいた。

「まったく、魔核が無事でよかったぜ」

ユーリの手には、魔導器の剣にはめられていた水道魔導器の魔核があった。

「水道魔導器の魔核ってそんなに小さいものだったんですね」

「さて、魔核も取り戻したし、これで一件落着だね」

「でも、バルボスを捕まえることができませんでした……」

「ええ……それだけが悔やまれます」

「なに言ってるの、あんな悪人死んで……ふぎや……！」

シンクは途中まで言おうとしたリタの頭を叩いた。

「なにすんのよ！」

「あいつはギルドの首領としてのけじめをしたんだ。帝国騎士に捕まるくらいなら、死んだ方がマシだと思ったんだろう」

「それがギルド……か」

シンクの言葉にユーリは呟いた。

「それにまだ一件落着には早いな」

「ああ、こいつがちゃんと動くかどうか確認しないと」

「……………」

フレンは別のことを考えていた。それはバルボスの言った“あの男”という言葉が引っ掛かっていた。

「魔導器の魔核がそんなに簡単に壊れないわよ」

「ふ〜ん、そうなんだ。しってた、レイヴン……？」

カロルはレイヴンに聞こうとするが、肝心のレイヴンはそこにはいなかった。

「おっさんなら途中でいなくなってたな」

「またあのおっさんは……本当に自分勝手ね」

「それをリタが言うんだ」

カロルはリタをジト眼で見ながら言った。

「人それぞれでいいんじゃない？」

「ダングレストに帰ったんだろ。会いたきゃ会えるさ」

「僕も一足先に戻る。部下に仕事を押しつけたままだから。……エステリーゼ様もどうか私と一緒に」

そう言ってフレンはエステルに顔を向ける。

「ええと……わたし……もう少しみんなと一緒にいてはいけませんか……？」

エステルは戸惑いながら言うが、フレンは首を横に振る。

「ダングレストに着くまで、ならいいだろう？」

「責任もって送り届けるからよ」

「……わかった。その代わり、絶対に間違いのないように頼む。寄り道も駄目だ、いいね？」

「分かった分かった」

「ではエステリーゼ様、ダングレストで」

「ありがとう、フレン」

フレンはエステルを一瞥すると走っていった。

「二人とも、浮かない顔して、どうかしましたか？」

「いや、まだデッキの野郎をぶん殴ってねえと思ってさ」

「ああ、リタの名を語った奴だからな」

ユーリとシンクは言った。

リタはシンクの言葉を聞いて、頬を赤くした。

「魔導器の魔核は戻ったんだからいいんじゃないの？そんなコソ泥なんて」

「ま、それもそうだな。どっかで会ったら絶対にぶん殴るけど……地獄で待ってる、か。やなこと言っぜ」

ユーリは小さく先ほどバルボスの言った言葉を呟いた。

「ほらほら、いいかげん、ダングレストに戻ろうよ」

「じゃあ、私はここでお別れね」

「相棒のどこ戻るのか？」

「相棒？誰です、それ？」

「ここからは別行動。お互いの行動に干渉はなしね」

「そっか、じゃあな」

「ええ……」

ユーリたちはジュディスと別れ、ダングレストへと戻る。

（自らの存在に絶望する……か。そんなこと言われたら、ますます自分のことを知りたくなってしまっじゃないか）

シンクは空を見上げながら思う。

（探してみるか……スパイダの剣を……）

というわけでシンクの第一秘奥義はグレイセスFのリチャードの秘奥義から、『緋鳳絶炎衝』です。

理由はICVが浪川だということと、シンクは今まで結構、紅蓮斬とか炎系の術技結構使ってるからです。

最初はアスベルの『白夜殲滅剣』のどっちにしようか迷ったんですよ……

次回からは第二章！

第二章は多分、オリジナルの始祖の隸長が何匹か出ると思います。そして、シンクの記憶にも関わります。

お楽しみに！

感想もお願いします！

ギルドの巣窟ダンゲレスト 新たに歩む道（前書き）

今回から第2章！

基本はシンクサイドで描いていきます。

ギルドの巢窟ダングレスト 新たに歩む道

ユーリたちはガスファロストからダングレストに戻ってきた。

「あ、騎士団も戻ってきたよ」

そこに騎士団に取り押さえられているラゴウの姿があった。

「私は無実です！これは評議会を潰さんとする騎士団の陰謀です！」

ラゴウはそんなことをダングレストの住民に訴えていた。

「往生際悪いじいさん」

「悪党の悪あがきだな……」

「フレンは……？」

ユーリたちをその様子を呆れて見ていた。

エステルは先に戻ったフレンを探している。

「ここからじゃ見えないな」

ユーリたちは騎士団に近づいた。

「騎士団を信じてはなりません！彼らはあなたたちを安心させた上で、この街を潰そうとしているのです！」

「我らは騎士団の名の下に、その様な不実なことはしないと誓いま

す」

そんなラゴウの前に、先に戻っていたフレンが現れた。

「あなたは……フレン・シーフォ！」

「帝国とユニオンの間に友好協定が結ばれることになりました」

「な！そんな、バカな……」

「今ドン・ホワイトホースとヨーデル様の間で、話し合いがもたれています。正式な調印も時間の問題でしょう」

「どうして……アレクセイは今、別事動けぬはず」

「確かに。騎士団長はこちらに顔を出された後、すぐに帝都に戻られました」

「では……誰の指示を……」

ラゴウはハツとして、フレンを見た。

指示をしたのはこの男だと、ラゴウは気付いた。

「くっ……まさかこんな若造に我が計画を潰されるとは……」

その後、ラゴウは大人しくなり、騎士団に連れていかれた。

「これでカプワ・ノールの人々も圧政から解放されますね」

「次はまともな執政官が来りゃいいんだがな」

「いい人が選ばれるように、お城に戻って掛け合ってみます」

「お城につて……エステル、帝都へ帰っちゃうの？」

カロルの問いに、エステルは頷いた。

「……はい。ラゴウが捕まって、もうお城の中も安全でしょうから
そう言つてエステルはフレンを見た。

「ホントは帰りたくない」

「え？」

「つて、顔してる」

「そんなこと、ないです……」

「でも、本当に行きたくなくても、これ以上、皇帝候補がぶらぶら
している訳にもいかないだろ？」

「ま、好きにすりゃいいさ。自分で決めたんだろ」

「……帰ります。これ以上、フレンや他の方々を心配させないよう
に……」

エステルがぎこちない表情で言っていると、フレンは一度、ユーリ
たちを見て、騎士団のところへ走っていった。

「寂しくなるな、ラピード」

「ユーリ……」

シンクだけがユーリの呟きを聞いていた。

*

ユーリたちは、ダングレストの宿屋についた。

「あ、あたしとシンクは一緒の部屋ね」

「え？なんで、シンクと一緒にの部屋なの？」

「これからどうするか話すのよ。いいわよね？」

「ん？まあ、構わないが」

「んじゃ、オレは部屋で寝させてもらっわ」

ユーリはそう言って部屋に行った。

*

その夜、シンクとリタは部屋のベットに座って向かい合っている。

「で、リタはこれからどうしたいんだ？」

「あたしはエアルクレーネを調べてみたい」

「デュークが言っていたことが……」

シンクはデュークを思い出していた。

（そういえばあいつ、なんであんな所にいたんだ……？）

シンクはなぜデュークがガスファロストにいたのか考えていた。

「で？シンクはどうするの？」

「リタについていく……と言いたいが、俺はこれを探そうと思う」

そう言っただけでシンクは、閻魔刀をリタに見せた。

「その刀？」

「この刀はスパイダの剣のひとつらしい。もしかしたら、俺の記憶に関わるかもしれない」

「……そうなんだ」

「だから、リタ……」

「だったら、あたしも手伝う」

「え……？」

リタの発言に、シンクは少し驚いた。

「あたしだって、あんたの力になりたいのよ」

「だが……」

「ああつ、もう！いいでしょ！あたしはあんたと一緒にいたいんですよ！」

「え？」

「ハッ！？ち、違うのよ！ええつと……その……つまり……／＼／＼」

リタは顔を真っ赤にしていた。シンクはそんなリタを見て、首を傾げた。

「大変だよ、シンク、リタ！」

そこにカロルがドアを勢いよく開け、大声で入ってきた。

「……あれ？どうしたの、リタ？顔なんて赤くして」

「う、うるさいガキンちょ！ノ、ノックくらいしなさいよ！」

「ああ、ごめん……ってそうじゃなくて、大変なんだよ！」

「……なにがあつたんだ？」

カロルの慌てようを見て、シンクが尋ねた。

「ラゴウが、評議会の立場を利用して、罪を軽くしたんだって！少し地位が低くなるだけで済まされるみたい！ひどいことしたのに！」

カロルの言葉に、シンクとリタは表情を険しくした。

「……本当なのか？」

「ほんとだよ！」

「これが今の帝国が……」

「おかしいわよ！散々ひどいことしてきたのに、こんなの……」

「これから、エステルのところに行こうと思ったんだ」

「ユーリには言ったのか？」

「うん。先に言ってきた」

「……そうか」

そう言ってシンクは部屋を出ようとした。

「シンク、どこ行くの？」

「ちょっと、散歩だ」

そう言ってシンクは部屋を出た。

（まずは、あのフレンに聞いてみるか。確か駐屯地のテントだよな）

シンクはフレンのいる駐屯地に向かった。

*

シンクがフレンのいる駐屯地に向かうと、ユーリが通りすぎた。その表情は険しかった。

「君か……」

フレンは前に会った時よりも、立派な騎士服を着ていた。

「その格好……」

「本日付けで、隊長に就任したんだ」

「……そうか」

「君も、ラゴウの件だろ？」

「君もってことは、ユーリも聞きにきたのか？」

シンクの問いに、フレンは頷く。

「ああ。ユーリに話したのと同じ内容だけど、いいかい？」

「構わない」

「ノール港での私物化、バルボスと結託しての反逆行為。さらには街の人への涼奪、気に入らないというだけで部下にも手を加えた。死体は魔物のエサか、欲しいやつに売り飛ばして金にしていた」

「下衆が……！」

シンクとフレンは拳を強く握った。

「これだけのことをして、罪に問われないなんて……！」

「理不尽だな……権力ってのは」

「隊長に就任しても、ラゴウひとり裁けないのが、僕の現実だ」

「けど、あんたはそれを変えるために上に行くんだろ？」

「トリム港で君が言っていたことを思い出すよ。こうしてる間にも、理不尽に人々が苦しめられている……」

「……そうか」

シンクはフレンの話を聞くと、駐屯地をあとにした。

*

シンクが宿屋に戻ろうとしたとき、入り口のある橋が目に入った。
そこにはユーリとラゴウがいた。

「ラゴウ……なぜ……それにユーリ……」

シンクはその様子を見た。
次の瞬間、ユーリがラゴウをニバンボシで切った。
そしてラゴウは川に落ちていった。
ユーリはこちらに戻ってきた。

「シンク……」

「おまえ、なんでラゴウを……」

「法で裁けない悪党は、こうするしかねえって思ったんだ」

「……そうか」

「問い詰めないのか？」

「おまえがああしななければ、また罪のない人があの下衆の食い物に
されていた」

「……ありがとな」

ユーリはそう言ってシンクに礼を言った。

ユーリとシンクは宿屋に戻った。

入り口には、ラピードが寝ていた。

「……ラピード」

「見ていたんだな、多分」

「……だろうな」

ユーリとシンクは宿屋に入った。

シンクはリタのいる部屋に入った。

リタは気持ちよさそうに寝ていた。

「……おやすみ、リタ」

シンクは寝ているリタの頭を優しく撫でたあと、眠りについた。

*

翌日。

入り口では、シンク、リタ、カロルはエステルの見送りにきていた。
入り口には馬車に騎士もいる。

「ここでお別れなんて、ちょっと残念だな」

「今度、お城に遊びに来てください」

「ガキンちょほんとに行くわよ」

「え、行っちゃダメなの？」

カロルは首を傾げて聞く。

リタはため息をついた。

「はあ……バカっぽい……」

「いいんじゃないか？友好協定が結ばれれば、ギルドの人間も帝都に入りやすくなるだろうし」

「そうですね」

エステルが頷く。そこに従者らしき人物がやってくる。

「姫様、そろそろ」

「あ、はい」

エステルは従者の言葉に頷き、シンクたちに向く。

「ラゴウの件はわたしからもお願いしてみます。正当な処罰を下せるように」

「姫様、そのことなんですが……」

「はい？」

「…………ええと…………」

エステルの言葉に、従者はシンクたちを見て口ごもった。
エステルと従者は少し離れて話をした。

「ラゴウ様は昨夜から行方不明なのです。詳しくはまだわかりません……。今も足取りを追っている途中なものでして……」

「どういうことなの……」

「びびって逃げたかな」

エステルの隣には、リタとシンクがいた。

「さて、あたしたちも行こうかな。エアルクレーネってのと、シンクの記憶の手がかりを探さないと」

そう言つて、リタは歩きだす。

「調査とかが済んだら、あたしたちも、帝都に、い、行くから」

「はい、楽しみにしてます」

エステルはリタの手を握る。

「よかったな、リタ」

「う、うるさいーじ、じゃあね！」

リタは頬を赤くして、走って行った。

「まったく……じゃあ、俺もこれで」

「はい。記憶、取り戻せるといいですね」

「ああ、ありがとう」

シンクはエステルに別れを告げ、リタを追ってダングレストをあとにした。

*

「待って、リタ！」

ダングレストを出たシンクは、先に走ったリタを呼び止めた。リタはシンクの声に気付き、足を止めた。

「な、何よ？」

「……これからどうするつもりだ？」

「……とりあえず、ヘリオードに行きたいの。あの魔導器が気になるから」

「そうか。ならまずはヘリオードだな」

シンクの言葉に、リタは頷き、新興都市へリオードに向かった。
しかし、シンクとリタは気づかなかった。
ダングレストの方から煙が立っていたのを。

ギルドの巣窟ダンゲレスト 新たに歩む道（後書き）

次回はヘリオードとできればカプワ・トリムを書きたいです。
お楽しみに！

感想もお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0273x/>

Tales of Vesperia —魔を断つ刀を持つ少年—

2011年11月23日15時53分発行